

「近頃外相タレーランから交渉の顛末を聞いたが、貴國は、アミアン條約でマルタの還附を約束して置きながら、その期限の経過した今日、依然として同地を占領してゐるといふが、それは一體どういふ譯か。」

と詰問した。

英國大使は、場合柄として、烏渡まごついたものゝ、返事をしない譯にも行かない。

「それは、貴國がビエドモンテとスピスとを占領されたので……」

「そんな事は、アミアン條約とは關係がない。よしんば、關係があるとしたところで、イタリーの北部とスピスとをフランスの保護の下に置くことは、條約調印の時から判り切つた當然の事だ。それを、今頃とやかくいふ所を見ると、貴國は、フランスの大陸發展を妨げる爲に、戦争をする積りだな。」

「どういたしましたして！ 戦争などとは、思ひも寄らぬことであります。」

「さうはいはさない。今日から五日前の三月八日に、貴國の議會は、國民兵の召集と、海兵一萬の増員とを決議したではないか。これは、一體何の準備か。我國では、その海岸に、一艦隊だも備へてゐないではないか。」

「イギリスは既に十五年間も戦争を續けて來たので、その缺陷を補充する必要を感じたのであります。」

「今後更に十五年間も戦争を續ける積りであらう。貴國が武装するなら、我國も武装せにやならん。貴國は、我國を亡ぼすことができても、威かすことは出來んぞ。」

「敵國はそのいづれをも考へてゐませぬ。たゞ友誼を以て貴國と親交を保たうと望んでゐるだけです。」

「それならば、なぜに條約の規定を履行しないのか。自ら結んだ條約を自ら破るのは、國際信義に悖るの甚だしいものだ。」

ナポレオンは、かう言ひ捨て、やがてロシアとスペインの兩大使に近寄り、イギリスは、フランスに向つて開戦する方針を執りつゝある由を語り、その儘ジョセフ・フィーヌを伴つて、宴席から匆々立ち去つてしまつた。

この事あつてから二箇月間に互つて、タレーラン外相とホイットウォース大使との間に折衝が重ねられたが、イギリスは、かねてから、羽翼の未だ成らざる中に、フランスの大鵬に一撃を加へようと決心してゐたので、終に談判を打ち切り、五月十二日に、その駐佛大使を召還し、その後五日もたゝな

い中に、勅令を發し、フランス及びその與國たるオランダの商船二百艘を捕獲した。

ナポレオンは、その報復手段として、フランスのみならず、イタリー、スミスにおけるイギリス人を、官民男女の差別なく悉く捕縛した。

兩方とも随分亂暴な處置を執つたものだ。

それから十三年間の長きに亙つて、結んで解けぬ戦争が、フランスとイギリスとの間に開かれることになつた。この戦争は、宛かも近時の世界大戦の如く、ヨーロッパの國々が、そのいづれかに加擔することとなり、時日に前後はあるが、オランダ、バヴアリア、バーデン、ウィルテンベルヒ、イタリー、スミスはフランス側となり、オーストリア、ロシア、スウェーデン、プロシア、スペインは、いづれもイギリス側に付いた。

ナポレオンは、軍費を補充する爲と、アメリカの好意を繋ぐ爲と、なほイギリスの占領を豫避する爲とで、北アメリカにある領地ルイジアナ州を、一千五百万弗でアメリカ合衆國政府に譲り渡した。

この領地は、面積四八、五〇六方哩、日本の北海道と九州とを一纏めにしたよりも大きい土地であるから、一千五百万弗では法外に安いものであつた。アメリカは思ひがけない、奇利を博したものである。

暗殺の陰謀

拔群の成功者は、兎角その競争者や反對派から、嫉まれたり悪まれたりして、排斥運動や暗殺陰謀などの的になるものである。ナポレオンの場合に於ては、それが、不思議にも、却て彼の權勢を加へる刺戟となつた。

ナポレオンの通過する道路に爆弾を仕掛けた暴漢があり、又その芝居見物中に七首を懐にして忍び寄つた兇徒もあつた。彼は、それ等の災難から、いつも奇蹟的に免れたが、最後に、敵國たるイギリスを中心とした大規模な陰謀が企てられた。

舊王家や貴族などで、イギリスに亡命した者が大分あつたが、その中に、ルイー十六世の二番目の弟で、一時アルトワ伯と稱し、後にシャルル十世となつた人がある。その身邊に、同じ亡命者で、デュームリーエー、ピシエグリノー、カゾーデルといふ三名の勇將が附いてゐて、ブールボン王政復活の計畫を廻らしてゐた。

イギリス政府は、彼等を利用して、ナポレオンを倒さうとし、その運動に必要な資金を供給したりフランスに往復する密航船を提供したりして、あらゆる援助を與へたものだ。

その中のピシエグリー將軍は、ナポレオン部下の勇將モローの最も親しい舊友であつた。ところが、このモローは、その軍功に於ても、又その聲望に於ても、左までナポレオンに劣らないと自負してゐたので、あはよくば、ナポレオンを倒して自ら取つて代らうといふ野心がないでもなかつた。

そこで、兩將はしばしパリで密會して、ナポレオン排斥の手筈を打合はせたのである。

ある日、ピシエグリーは、

「イギリスは、四面海の國柄で大海軍を持つてゐるから、フランスが幾年戦争を續けても、到底これに打勝つ見込みがない。依つて今我國の爲に計るに、早くイギリスと和を結び、その力を藉りてブルボン家を再興するを上策と思ふが、君はどう考へる？」

と話し出した。すると、モローは、即座に、

「吾輩も至極同感だ。」

と答へた。

「問題はその實行方法だが、それも別段むづかしいことでもない。コルシカの矮兒を片付けるだけで済むではないか。」

「暗殺でもやるつもりか。」

「否。それでは人氣を引付けることができない。」

「どうしようといふのか。」

「君の軍隊中に、ナポレオンに反感を懷いてゐる者があらう。少くとも心服してゐない者が多からう。それ等を糾合して、不意に護衛隊を襲撃して矮兒を屠り、公々然國家の爲に元兇を斃したことを聲明するのだ。」

「なるほど、併しそれには餘程軍用金が要るぞ。」

「その心配には及ばん。イギリスがいくらでも出す。」

ナポレオン退治の相談は、かくして容易しく纏まつた。

X

X

X

こゝに、或時は王黨に附いたり、また或時は共和黨に走つたり、旗色次第で、轉々去就するメエーといふ順慶主義者があつた。彼れは、この時、パリとロンドンとの間を往來し、ピシエグリー、モロー等の陰謀に加擔すると同時に、ナポレオン方の間諜ともなり、兩方の機密を兩方に密告して、そして兩方から金を取つてゐた。

陰謀の計畫が漸く進んで、將にその實行に移らうとする時、その事情をこのメエーから聞き取つた

ナポレオンは、時分を計つて、一網打盡に、モローを始め、折柄バリーに來合せてゐたピシエグリユ、ト、カゾーデルの三人を逮捕させた。

ナポレオンは、彼等を軍法會議に附せんといふ衆議を排し、普通の刑事被告人として裁判させた。これは、必ずしもその措置の公明正大を銜ふ爲ばかりでなく、彼等の罪惡と共に、陰險なイギリスの奸計を世間に暴露してやらうといふ考へからであつた。

正式裁判の結果、モローは事情を酌量されて遠島となつたが、ピシエグリユとカゾーデルの兩人は謀叛人として死刑に處せられた。前者は死刑以前に牢死したともいふ。

この事件は、一八〇四年の二月から三月にかけての出來事であるが、これがために、一般國民の同情は、ますますナポレオンに集まり、彼を危難から完全に擁護する爲に、何等かの方法を講ぜよといふ聲が一時に高まつて來た。

統領から皇帝へ

「予は、徒手空拳を振つて世界の最も強大な君主となつた。併し、予は、主權者が、人民に依つて立つの理を常に忘れたことはない、君主政體でも、民衆の意向に由つて政治を行へば結局民主政體と同じものだ。」

これは、ナポレオンとしていかにも徹底した述懐である。彼が共和時代に於ても、帝王時代に於ても、同じやうに成功したのは、民意順應主義で、終始一貫したからである。

ナポレオンが、第一統領となつてから、矢継ぎ早に、官紀を肅正し、財政を整頓し、國教を確立し殊に封建時代の積弊を一掃して、これに代へるに、人權平等を原則とする文明式法典を以てした等の功績に酬ゆるを主なる理由とし、なほ頻繁に續出する暗殺の陰謀を根絶する爲には、是非とも政府の威力を増大する必要がありといふ理由をも加へて、第一統領の在職を終身とすべしとの建議が元老院から提唱された。さうして提案者の一人ボルタリーは、

「世界の運命は、直にナポレオンの雙肩に懸り、地球上、その英風に畏服せぬものもない。然るに、統領たる任期を十年に限るは、内は人心を安定する所以でなく、外は信を列國に繋ぐ所以でない。」と説明した。

統領の任期を十年から終身とするのは、元老院の決議だけで差支ないといふ説があつたが、ナポレオンは、それでも、憲法の一部を改正するものであるから、宜しく國民投票に問ふべきものであると主張したので、全國に互つて各地方廳に帳簿を備へて、第一統領の任期を終身とする提案に對して

統領から皇帝へ

可否を記入させたところ、反対者僅に三千、賛成者三百五十萬（當時フランスの人口三千萬、その三分の二が婦人子供）といふ大多數に上つたので、いよく一八〇二年八月四日を以て、改正法が公布された。

終身統領といへば、事實上の帝王である。事實上の帝王から名義上の帝王までの距離は、間一髪に過ぎない。併しその間一髪は、國家の歷程として二年の星霜を閲した。

この二年の間に、既に前に述べた通り、列國との戦が起り、爆弾騒ぎの外に、イギリスを中心とする大陰謀が企てられたのである。

元來敵國の元首は、悉く帝王であるし、陰謀の目的は、王家の復位にある。前者に對して均衡を保つと同時に、後者の鼻をあかすには、ナポレオン自ら帝王となるに限るといふ意見が、ナポレオン崇拜者の間に、明せずして一致した。

そこで、元老院の發議で、一八〇四年五月十八日を以て、

「ナポレオンを皇帝とし、その位を世襲とす。」

といふ提案が、國民投票に問はれることになつた。之を可とする者三百五十七萬二千三百二十九名、否とする者一千五百六十九名といふ結果で、ナポレオンは、現頭フランス皇帝となつた。

越えて十二月二日に、ノートル・ダム 寺院に於て戴冠式が擧げられることになり、その式を司る爲に、法王ピウス七世が、わざ／＼ローマから來た。

その時に、法王が金冠をナポレオンの頭上に載せようとする時、ナポレオンは、飽まで自己の至上權を保つ爲に、それを自分の手に取つて、自らこれを戴き、また法王に代つて、皇后の冠を取つて祭壇に跪いたジョセフィーヌの頭上に載せた。

その時、ナポレオンは、簡單に、

「予は、唯だフランス國民の利益、幸福及び光榮を守護する目的を以て、フランスに君臨すること

を誓ふ。」

と述べ、列席の文武百官は、

「皇帝陛下萬歲！」

「皇后陛下萬歲！」

を三唱して、首尾よく式が終つた。

翌年五月二十六日に、ナポレオンは、北イタリー人の請願を容れて、ミラノに赴き、往昔シャールマン大王の戴いたロムバード鐵冠の戴冠式を行ひ、イタリー國王をも兼ねることになつた。

ナポレオン

この式場には僅か六年前に、ナポレオンがイタリア遠征から引揚げる時、

「昨夜閣下がイタリア國王になられた夢を見ました。」

と語つたテイー夫人が列席してゐた。

やがて、謁見式に移つた時に、この夫人が眞先に、ナポレオンの前に進み、

「おめでたう。陛下は、妾の夢物語を覚えてゐらつしやるでせう。」

といふと、ナポレオンは、なつかしげにその手を握つて、

「覚えてゐるとも。お前も、わしが、イタリア國王となる前に、フランス皇帝とならねばならぬや

うな氣がすると、話したことを、よもや忘れはしまいな。」

お互に先見の明を誇り合つたのも、時に取つての一興であつた。

皇帝親征の首途

ナポレオンは、曩に再びイギリスと戦端を啓くことになつた時に、完全に組織され且つ十分に訓練された精兵二十五萬を持つてゐた。先づその中の十三萬をブローギユに集め、吃水の浅い長さ六十尺の平底船二千艘を作り、各船に大砲一二門を備へ、六十人乃至百人を乗せ、順風には帆を揚げ、岸に近

づけば權で漕ぐ仕組とし、新造軍艦四十隻を護衛とし、暗夜に乗じて、ドーヴァー海峡を横切り、八時間にして一擧イギリスを屠つて、宇内の運命を定めようといふ考で、盛んに準備を急いだ。

丁度この時分に、外輪蒸汽船の發明に成功したアメリカ人ファルトンが、ナポレオンに使者を送り、この蒸汽船を利用すれば、十三萬が五十萬でも容易に且つ迅速に海上を渡すことができる由を告げさせた。併し科學的知識に乏しかつたナポレオンのことゝて、ファルトンを山師か詐欺師と思つて、その勸告にはてんで耳を傾けなかつた。

若しナポレオンがファルトンを信用して、その發明船を使つたならば、イギリスの運命はどうなつたか判らない。イギリスは、最初ローマ人に征服され、次にノルマン人に征服されたやうに、三たびフランス人に征服されたかも知れない。

イギリスの方では、ナポレオンの奇襲を豫防する爲に、ネルソン、コーンフィリス、コリングウッド諸提督の率ゐる艦隊をして、晝夜の別なく、フランスの各港に遊弋して、船艦の集合若しくは進出を不可能ならしめ、なほ十八萬の陸軍を要地に配置して、おさく／＼國防の用意を怠らない上に、巧妙な外交術で、殊に軍資の提供を餌食として、オーストリア及びロシアを勧誘し、ナポレオン討伐に加擔させることに努めてゐた。

皇帝親征の首途

ナポレオン

さなきだに、煥帝フランス二世も、露帝アレキサンダー一世も、ナポレオンが、コルシカ島民の分際で、烏澁がましくも、自らフランス皇帝の位に登るさへ、僭上の沙汰なるに、かて、加へて、シャールマン大王の戴ける鐵冠を戴いて、羅馬大帝國發祥の地たるイタリアの國王となつて無遠慮にも世界統一の爪牙を露はし出したのを、惡みつ怨みつ且つ怖れつしてゐたところへ、イギリスから、ナポレオンを討つ爲なら、必要の軍資を引受けようと申込んで來たのであるから、協議は逸早く纏まつて三國間に、またも對佛聯合が成り立つことになつた。

そこで、オーストリアは、四年以前にナポレオンに奪はれたイタリア及びライオンに於ける舊領土を回復する目的で、第一軍をイタリアに送ると同時に、第二軍をしてロシア軍と合同して、ライオン方面からフランスに攻め入ることに手筈を定めた。

ナポレオンはこの形勢を見て、暫くイギリス掩撃の企圖を止めることとし、取り敢へず、マッセナ將軍に五萬の兵を附けて、イタリアに向はせ、自ら十五萬の兵を率ゐて、煥露の聯合軍を邀へ撃たんとして、ライオン方面に急進した。

老将 マックの率ゐる七萬のオーストリア軍は、既にウルムまで進み、こゝでロシア軍を待ち合はせることになつてゐた。歩くよりも駆けるのだといはれたほどのナポレオン軍は、ロシア軍の到着豫定

に先だつこと十日、早くも疾風の如くにウルムに攻め寄つた。

ウルムの守將 マックは、フランス軍の主力が、前例に依つて、イタリア方面に向ふこと、早合點してゐたので、ナポレオンがかゝる大軍を舉げて急に襲來しやうとは夢にも思はず、高々五六萬の寡兵であらうと思ひ、輕卒にもロシア軍の來援を待たずに、應戰することに決した。

いざ實戰となると、案外にも、十五萬の大兵に、びしりと四方を取り捲かれたので、マックはこゝに始めて、ナポレオンの術中に陥つたことを悟つたものゝ、既に進退兩難に陥つて、如何ともする能はず、僅か六日間を支へた後ち、脆くも降服すべく餘儀なくされた。

ナポレオンは、この役に僅少の損害を受けただけで、敵の將校三十二名、士卒六萬を捕虜とし、大砲二百門、軍旗九十旒を鹵獲した。時に一八〇五年十月二十一日。

丁度この日に、クツソフの率ゐるロシアの第一軍が、漸くウルムを距る百三十哩のインに到着した。クツソフは、マックの敗報に接し、天を仰いで、長大息した。

最古の帝城を乗取る

ウルムの戦勝は、ナポレオンが皇帝として親征した首途の吉祥であつたが、前途に煥露聯合軍との

最古の帝城を乗取る

決戦を控へてゐたので、ナポレオンは、祝杯を酌む暇も惜んで、直にオーストリアの首府ヴィエナを目差して、軍を進めた。

折しも、アレキサンダー一世とフランスス二世の兩帝は、ヴィエナの北方約百二十哩のオルムツにあつて、ロシアの第二軍の來着を待つてゐたので、ナポレオンは、一戦をも交へずして、容易にヴィエナを乗取ることができた。時に一八〇五年十一月十三日。

ナポレオンは、ヨーロッパ最古の帝城たるヴィエナを占領して、神聖羅馬皇帝の宮殿に大本營を置き、こゝで、十二分に軍器、被服、糧食等を徵發することができたのであるから、その得意想ふべく、全軍の勇氣、勃々として天を衝くのがあつた。

この時、聯合側は、ナポレオンをヴィエナに包圍する計略で、先づダニューブ河の架橋を破壊することとし、その目的で特派された一隊の工兵が、將に爆破作業に着手しようとするところであつた。ヴィエナは、ダニューブ河の南岸に位してゐたので、そこから北進するには、是非ともこの橋を渡るより外に道がなかつたからである。

早くもその計略を探知したナポレオンは一策を案じ、ミュラー元帥をして、單騎爆破隊長ビュローを訪はしめ、休戦條約が既に成立つた旨を告げしめた。

ビュローは、自國の司令官からは何の通告も受けてゐなかつたけれども、今敵の元帥が、單騎悠々として來り、また悠々として去つたので、すつかりその言ふことを信用して、俄に爆破作業を中止した。

間もなく、一隊のフランス騎兵が飛んで來て、爆破隊を蹴散し、難なく橋梁を占領してしまつた。かくて、ナポレオンの進路を妨げようとした計略は水泡に歸してしまつた。

それから程なく、今度は狐と狸との騙合ひ見たやうな事件が起つた。十一月十五日の朝方、ミュラー元帥が一萬八千の騎兵を率ゐて、豫定地に向はんとした時に、圖らずも、クツソフの率ゐるロシア軍に出會つた。

ミュラーは、そこに、ロシアの大軍が集中してゐるものと思ひ込んだので、宛かも橋梁爆破隊長を欺むいたと同じ詭計を用ゐて、クツソフに向ひ、

「御承知でもあらうが、休戦條約が目出度く整ひましたぞ。」

と言つて見た。若し先方が聽かずば、逃げ出す覺悟であつた。

すると、クツソフは、意外にも、

「それは結構な事です。追つて御目にかゝるであらう。」

と答へつゝ、手を延ばして握手を求めた。

かくて、兩將は右と左とに別かれた。

ミュラーは仕て遣つたりと、三寸の舌を吐いてクツソフの愚鈍を笑つた。クツソフの方でも、また同じやうに三寸の舌を吐いて、ミュラーの痴呆を嘲つた。

實の處、クツソフは、一小部隊を率ゐて、本隊に赴く途中であつたので、若しミュラーの騎兵隊と一戦すれば、忽ち敗北する所であつた。

敵の配陣をよく知つてゐたナポレオンは、ミュラーの自慢氣に語る報告を聴くや、忽ち切齒扼腕して、

「騙されたのは彼でなくて、汝であることが判らぬか。」

と大喝し、直にクツソフの追撃を命じたが、既に三十六時間も経過してゐたので、追撃隊が途中まで行つた時分には、クツソフは早くもオルムツの本隊に到着してしまつた。

三大帝の會戰

ナポレオンがヴィエナを占領した日から十九日目に、アウステルリッツ (Austerlitz) に於て、三大

帝の會戰が開かれた。

露帝アレキサンダー一世は、五萬の兵を以て、煥帝フランシス二世は、四萬の兵を以て、オルムツ方面より進み、これに對し、ナポレオンは七萬五千を以てブリュン方面より進み、プラツェン丘を中心として、そこに、殆ど白兵戰に均しい激戰が交へられたのである。

聯合軍は、兩頭の蛇の如くに、進退懸引に統一なく、士氣も亦おのづから振るはないものである。これに反して、ナポレオン方は、一人の統帥の下に、全軍手足の如く動き、將卒共に、死を怖れない敵愾心を持つてゐた。

開戰の前夜に、ナポレオンが、部下の軍容を視察せんとて、微行で野營を巡回すると、一二三の兵士が目早くその皇帝なることを發見したので、陛下親臨の報は、それからそれへと、電波の如くに傳はり、一時に數千の松明が點火され、熱狂した士卒は、

「皇帝萬歲！」

を連呼し、中には、ナポレオンの面前に起立して、

「陛下！ 明日は斷じて自ら陣頭に出で給ふの要なし、我等は、必ず敵の軍旗と大砲とを捧げて、

陛下の即位記念日を祝し奉ることを誓ふ。」

と言ふ者さへあつた。

果せる哉當日の戦争は、僅か四時間にして聯合側は、全軍の三分の一を失ひ、フランス方は、七千の死傷者を出した丈で、早くも勝敗の大勢が定まつた。時に十二月二日。恰もナポレオンの即位一年記念日であつた。

「塙露兩帝の指揮した十萬の敵軍は、四時間を出でずして、或は死傷し、或は降服し、或は敗走し我軍は、軍旗四十五旒、大砲百五十門を鹵獲し、將校二十名及び兵卒三萬を生擒し、不朽の功名を博したり。汝等の勇敢なる奮闘は、眞に朕の期待に背かずして、數に於て遙かに汝等に優れる敵兵に打勝ちたれば、汝等は、最早世に恐るべき何物をも有せざるに至れり。汝等は、嘗に現代國民の感謝と祝福とを受くるのみならず、その功勳は萬世無窮に傳はるべし。」

これが、決戦の翌日に、ナポレオンが軍隊に下した勅諭である。

ナポレオンが、この大勝を歡んでゐる際に、トラファルガーの海戦で、フランス艦隊が、イギリス艦隊に破壊されたといふ情報 came。ナポレオンは、慨然として、

「怨むらくは、朕一身にして、萬場に臨む能はざるを。」
と嘆息した。

併しアウステルリッツの一戦で、塙露聯合軍が、再び立つ能はぬまでに潰滅したので、塙露兩帝は翌三日を以て休戦を申込み、ロシアは、再びフランスに敵對せざるべしとの條件を以て、全軍を本國に引還へすことになつた。それから三週間の後、十二月二十六日に至り、プレスブルグに於て、フランス二世とナポレオンの間に平和條約が結ばれ、それに依つて、オーストリアは、カムボ・フォルミア條約で除外されたヴェネチア州までも放棄し、イタリーに於ける領土の全部をフランスに譲り、尙ほ一億法の償金を支拂ふことになつた。

それと同時に、これまでオーストリア皇帝の選舉邦たりしバヴァリア、バーデン、ウイルテンベルヒ（今のドイツ聯邦）を、獨立王國の列に上げ、それに十餘邦を加へて、ライン聯盟を組織し、ナポレオン自らその保護者となつた。

ナポレオンは、その出征軍の本隊を直に引揚げないで、之を南ドイツ地方に駐めた。これは、新附の諸國に對して威壓を加ふる目的の外、後に語るやうな深い思慮があつたからだ。

プロシヤ強國の土崩瓦解

ナポレオンは、アウステルリッツに塙露聯合軍を粉碎して、パリに凱旋するや、諸將の論功行賞

(それに就ては後段に詳述する)と同時に、皇帝の一族たる者は名實共に皇族たらざるべからずとて、兄のジョセフをナポリ國王(後にスペイン國王)に、次弟ルーイ(ジョセフの實子オルタンスと結婚した)をオランダ國王とし、妹カロリーヌの夫ミユラー元帥をベルグ大公とし、末弟ゼローム(ウィルテムベルヒ王女カテリーヌと結婚した)をウエストファリア國王とし、他の妹のエリザ及びボリーヌを、おの／＼トスカナ大公妃及びガスタラ公妃とし、同胞縁者を悉く王公の位に登せた。(ジョセフの實子ユーゼーヌは曩にイタリア太守に封ぜられた。)

かくて、ナポレオンの内外に於る威望は、宛かも旭日天に昇るが如く、いやが上にも光輝を添へるばかりであつた。併しトラファルガーの戦勝國たるイギリスとは、和議整はずして依然戦争を續けねばならなかつた。それに、これまで中立を維持してゐたプロシアが、イギリスと氣脈を通じて、動もすれば、ナポレオンに反抗するが如き態度を執り始めた。

プロシア(獨逸讀プロイセン)は、この時から約四十年前に、かの有名なフレデリック大王出づるに及び、いはゆる「七年戦」に於て當時の墺佛聯合軍をロスバッハに撃ち破つて以來、堂々たる大國となり、ゼルマン聯邦の覇權を握るほどの地歩を占めた。然るにナポレオン時代のプロシア國王フレデリック・ウリアム(獨逸讀フリードリヒ・ウイールヘルム)三世は、曾祖に似ない無爲の庸君で、常

に首鼠兩端を構へ、この時までには、交戦國の兩側から勸誘を受けながら、就くが如く離るゝが如く、頗る曖昧な態度を執つてゐた。然るに、今ナポレオンが大勝の勢ひを恃んで、プロシアの舊與邦たるバヴァリア以下の諸公を國王に取り立て、これをその保護の下に置いた横暴の振舞を見ては、唇亡びて齒寒しの感に打たれざるを得ないのみか、ナポレオンが、先にハノーヴァー公國をプロシアに與ふることを約して置きながら、後にイギリスとの談判中、同じハノーヴァーをイギリスに譲らうといふ條件を持ち出した事實を知るに及んで、ナポレオンの背信を憤り、こゝにいよいよイギリス側に立つて、遅延ながら開戦することに決した。

それは、素よりナポレオンの豫期してゐた所であつた。それゆゑにこそ、彼は曩に引揚げべき出征軍を引揚げずに、南ゼルマン地方に、それを駐めて置いたのである。それが爲に、ナポレオンは、改めて本國から大軍を送る面倒もなく、單にゼルマン駐屯軍に動員令を與へるだけで、直に應戦することができたのである。

兩軍は、一八〇六年十月十四日に、今尙ほドイツ大學の所在地として有名なイエナ(Jena)に於て、會戦することになつた。アウステルリッツの大戦からまだ一年もたないことゝて、ナポレオン方は實戦に經驗を積み來つた勇將猛卒が多かつたが、プロシア方は、行年七十餘歳のプルンズウィク大公

總司令官となり、ホーヘンローへ公、副將となり、その將校は大抵貴族出身の子弟で、兵卒は、始めて戰場に出る者ばかりであつた。

戰場は二つに分れ、イエナに於て、ホーヘンローへ公、七萬を以てナポレオンの八萬二千に當りアウエルスタッドに於て、プルンスウイク大公、五萬を以て、ダヴー、ベルナドット兩將の五萬二千に當つたのであるから、勝敗の數は、まだ戦はない中から明白で、プロシア軍は、兩地に於て散々に敗北し、プルンスウイク大公は戦死し、ホーヘンローへ公は降服した。

ナポレオンは、勝に乗じて北進し、十月二十五日、ボツダムを占領し、こゝで、フレデリック大王の墓を發き、その中に納めてあつた大王生前の帶劍を奪ひ取り、それを戦利品としてパリに送り、越えて二十七日には、早くもプロシアの首府ベルリンを乗取り、その王城に大本營を置き、ハムブルヒ、ブレトメン等の諸市をも占領し、更に軍を四方に出して敵の殘軍を掃蕩し、勢ひ殆ど無人の境を行くが如くであつた。その間に、總數二十餘名の將軍と七萬の士卒を捕虜とし、大砲六千門、軍旗百五十旒を鹵獲し、殆どプロシア軍を全滅した。

孰れが大膽?

哀れむべし、フレデリック大王の築き上げたプロシア強國は、未だ半世紀もたぬ中に端なくもナポレオンの鎧袖に觸るゝや、一たまりもなく瓦解してしまつた。

優柔不斷の現王フレデリック・ウイリアム三世は、都城を棄て、遠くケニヒスベルヒに蒙塵し、全く戰鬥力を失ひながら、なほ早く和議を開く決心もつかず、最後の窮策として、援兵をロシアに求めて、僅かに一縷の望みを繋いだのである。

この時、戦勝の威勢すさまじく、ベルリン城に雄視してゐたナポレオンは、ヨーロッパ大陸諸國の背後に、絶えずイギリスの外交と黄金とが、猛烈な勢力を振ひつゝある事實を發見して、つら／＼思ふやう、若しイギリスの資金だにヨーロッパ大陸に流入せざれば、プロシアは言ふに及ばず、ロシアもオーストリアも、戦争を繼續する能はざるに至らんと。

是に於て、彼は、イギリスを封鎖状態に置く爲に、十一月二十一日を以て、世にベルリン勅令と稱する大陸制度 (System Continental) を發布したのである。この勅令に依つて、第一、イギリス及びその植民地の製造若しくは生産に係る物品は、總て戦時禁制品とし、大陸への輸出入を禁ずること。第二、イギリス人の財産は、いづれの處に於て發見するとも、悉く沒收すること。第三、イギリスと大陸との交通を嚴禁し、その間に往復する文書は、悉く押收して開封すること等を強制したのである。

このイギリス封鎖策の爲に、大陸諸國は、いづれも多少の影響を蒙つたのであるが、就中イギリスと重要な貿易關係を續けてゐたロシアが、最大の打撃を受けることになつたのである。

これまで、プロシア國王から援助を求められながら、やゝ躊躇してゐたアレキサンダー一世は、このベルリン勅令がロシアにも適用されることを聞くに及んで、斷然プロシアを援けてナポレオンを討つことに決した。

ナポレオンは、豫てかくあるべしと思つてゐたので、直に北進してポーランドに入り、その首府ワルソーを根據地として、ロシア軍に當るべく戦闘準備を整へた。

翌年の二月八日にワルソーより北の方百哩、ケニスベルヒを距る二十四哩のアイローに於て、ナポレオンの前進隊とベニングゼン將軍の率ゐるロシア軍と衝突したのが始まりで、續紛たる風雪の中で、十九世紀中最も凄慘を極めたといはれる血戦が行はれたのである。

實戰に参加した兵數は、露軍七萬六千、佛軍六萬五千に過ぎなかつたが、午前十時から午後十時に至る十二時間の中に、露軍は二萬五千、佛軍は三萬の死傷者を出したといふから、それが、非常な激戰であつたと同時に、ナポレオンに取つて、未曾有な難關であつたに相違ない。

始め佛軍大に敗れ、勝に乗じた露軍の一隊が、ナポレオンの身邊間近く突進して來た時には、並居

る將校いづれも色を失ひ、參謀總長ベルティエーの如きは、

「玉体危し、早く逃れ給へ。」

と辭せわしく言上した。

併しナポレオンは、少しも驚く容子もなく、たゞ露兵の勇敢に感心するものゝ如く、

「大膽！ 大膽！」

と連呼するばかりで、泰然自若として動かない。

そこへ、折好くミユラー元帥が一萬八千の騎兵を以て斷付け、横合から露兵を蹴散らしたので、ナポレオンはわづかに奇禍を免れた。

ベルティエーは、ナポレオンに向ひ、

「大膽とは、露兵よりも陛下に當てはまる言葉であります。大元帥は漫りに危険を冒し給うてはなりません。おぼせぬ。」

と諫めたほどである。

午後八時になると、勇將ネー、ダヴー等の部隊が相前後して戦線に到着したので、こゝに頽勢一變し、午後十時に至り、漸く露軍を撃退して、最後の勝利を博することができたのである。

その翌日より八日間に互り、ナポレオンは、部下を督勵し一哩四方に互り、算を亂して縦横に散在する數萬の死傷者を收容し、敵方といへども射方と同じく鄭重に、死者を葬り、傷者に手當を加へた。この寛仁なナポレオンの措置は、後に至り、端なくも露帝をして、ナポレオンに親近せしむる動機の一つとなつた。

兩雄後上の會

アイローの雪中戦で、敵も射方も疲れ果てたので、共に休養かたぐ冬籠すること四箇月、春過ぎて夏氣の立ち初めた頃に、ナポレオンは、漸く陣容を整へて、五月二十五日、ダンツイヒを占領し、漸次北進しつ、敵狀を窺つて見ると、この時、ロシアの元帥ベニングゼンが、六萬の兵を率ゐてフリードランドに在り、それより西北二十六哩を隔つるプロシア王蒙塵の地たるケニヒスベルヒで、プロシア軍と合して、ナポレオンと決戦を試みようとしてゐることが判つた。敵の集合を妨げて、箇々の部隊を突撃するのを得意としてゐたナポレオンは、先づランヌ將軍に一萬の小勢を附けて、ベニングゼンに戦を挑ませた。ベニングゼンは、ナポレオンが軍隊を展開して、各軍別々にケニヒスベルヒに迫つて來るものと思ひ、

ランヌの一部隊に出會ひしこそ幸ひ、この一角を撃ち破つて、行きがけの功名にせんもの、俄に軍を返して砲火を開いた。

この戦争の始まつたのは、早朝のことであるが、正午頃には、一萬のランヌ軍は忽ち三萬となり、午後四時になると、當時ナポレオンの名將といはれたネー、ヴィクトル、モルティエ等順次戦線に加はつて、總勢八萬となつた。

ベニングゼンは、さうに始めてナポレオンの術中に陥つたことを覺つたものゝ、今さら退くには時既に遅く、止むなく接戦を續けた結果、終に二萬五千の死傷者を出して敗北し、ケニヒスベルヒ方面に落ち延びた。ナポレオン軍は、僅に九千の損害を受けただけで、思はぬ奇勝を博した。時に一八〇七年六月十四日。

露帝アレキサンダー一世は、第一着にかゝる大敗を招いたプロシア軍を援けて、此の上戦争を續けたところで、到底ナポレオンを屈服する見込がないので、直に休戦を申込んだ。そこで六月二十五日に、テイルジット市に沿うて流る、ニーメン河に筏を浮かべて、兩帝が、その上で會見することになつた。

ナポレオンが、ひどくイギリスを憎んでゐることを知つてゐたアレキサンダーは、會見の劈頭に、

「陛下よ、朕は陛下以上にイギリスを憎んでゐますぞ。|| Sire, je hais Anglais autant que vous.」
 といつたので、ナポレオンは、それを聞いて頗る満足した容子で、

「それならば、屹度平和が成立ちますぞ。|| En ce cas, la paix est faite.」
 と答へ、更に言葉を改めて、

「貴我兩國の利益は、近東方面に於て、絶えずイギリスの脅威を受けてゐるエジプトもインドも、地理上から見れば、宜しくイギリスよりも、貴我兩國に於て處分すべきものである。お互に力を戮せば、トルコ、ペルシアを越えてインドに出づることも、さまで難事ではない。」
 と附け加へた、

さなきだに、ナポレオンの英風に推服してゐたアレキサンダーは、今親しく彼と會談するに及んですつかりその魔力に魅せられ、イギリスを棄て、フランスに就く氣になつて、自分の妹をナポレオンの後妻にする相談にも乗つたほどであつた。

ナポレオンの方でも、アレキサンダーが思ひの外、自分に好意を持つてゐるのを歡んだものと見えその晩に彼が、ジョセフィーヌに書き送つた手紙の中に、

「予は今日露帝アレキサンダーと會見せり。彼は、年若く、男振りも好く、豫て噂に聞きしよりも

親切にして聰明なり。」
 とある。

さて、ナポレオンは、ニーメン河上で、アレキサンダーと大體の條件を協定して、プロシア王とも會見した結果、七月七日に至つて、三國間に、平和條約が結ばれた。

ロシアは、イギリス封鎖同盟に加はる條件で、プロシア領ポーランドの一部とスウェーデン領フィンランドとを併合し、なほバルカン地方をもその勢力範囲に入れることとなつたので、相應の利益を得たのであるが、酷い目にあつたのは、プロシアで、エルベ西岸の領土は、ウエストファリア國として分離獨立し、ナポレオンの末弟ゼロームがその國王となり、またプロシア領ポーランドは、ワルソニア大公國として獨立し、ナポレオンの腹心たるザクソン王の配下に移され、なほイギリスがナポレオンと講和するに至るまで、二十萬のフランス兵を、プロシアの費用を以て、プロシアの各要塞に駐屯するといふ、随分残酷な條件を強制されたのである。

無類の精力、非凡の眼識

ナポレオンは、露帝アレキサンダー一世を壓服して身方に付け、プロシアを分割してポーランド、

ウエストフリア兩王國を造り、之をフランスの保護下に置くことにして、パリに凱旋したのであるから、國民の歡喜と矜負とは、殆どその絶頂に達し、ナポレオンを欽仰すること、さながら活神を崇拜するが如く、或僧正の如きは、大真面目で、

「神はナポレオンを造つて、一先づ休息し給へり。」
とまで絶叫したほどである。

神は休息しても、活動そのもの、やうなナポレオンは、瞬時も休息しなかつた。彼は、平時に於ても、毎日十八時間位は、平氣で働き、その間、凡人の絶えて企て及ばぬほどの精力と、如何なる難件に對しても、容易にその解決法を見出すほどの眼識とを以て、それからそれと、流るゝが如く裁斷を下すのである。

祕書役の忙しいこと、いつたら、眞に目の廻るやうで、夜中でもナポレオンが眼を覺ます時は、すぐに呼び付けられる。ナポレオンは、性來の能辯家な上に、人一倍の早口で、一たび思想が沸き起ると、止めどもなく言葉を續けて行く。それを間違ひなく筆記せねばならぬのであるから、並大抵な事ではない。

閣議などは、大抵八時間から十時間位まで、ぶつ通しでやる。夜半の二時頃になると、閣員中には

耐まらなくなつて、居眠りをする者もある。ナポレオンは、

「諸君！ まだ二時にしかならん。今少し勉強するがい。國家の休戚は、諸君の双肩に懸かつてゐることを忘れてはいかんよ。」

といひつゝ、平氣で議事を進めて行くのである。

併し、ナポレオンが、三時間しか眠らなかつたといふ説は、本當ではない。彼がプロシア戰役中に、
ジョセフィーヌに送つた手紙の中に、

「予は出發以來、殊の外肥満したれども、馬上又は馬車にて一日優に二十五哩乃至三十哩の道を馳せて、少しも疲勞を覺えず、されど用事なき時は、午後八時に就眠し、夜半に起きることあり。その時には、御身はまだ床に入らずに、我身の事を案じつゝ、あらんかなど、想像して、目のさえることも有之候。」

とあるから、早寢をすることもあつたに違ひない。

イタリー戰役の時に、五日五晩靴も脱がずに一睡もしなかつたことがあつたが、戦が濟んだ後で、何事があつても起すなとて、三十六時間ほど續けて眠つたといふから、それを五六晝夜に割り當てる

と、毎日平均六七時間も寝たことになる。彼は、非凡な精力を持つてゐたにもせよ、その人間たる肉體に變りのあらうはずがない。

彼の人を使ふことは、随分荒かつたが、功勞者に對しては、惜し氣もなく恩賞を振り撒いた。彼が第一統領になつた時に、レジオン・ドヌール勳章を設けて、廣く功勞者を表彰したが、プロシア戰役から歸つた時、新に爵位を設け、ベルティエー、ネー、ダヴー以下二十餘人の元帥を公爵とし、なほ年金として、ベルティエーに百萬法、ネー、スール、ダヴー、ベツシエーに各六十萬法、マツセナ、オージエロー、ベルナドット、モルチエー、ヴィクトルに各四十萬法、その他の元帥には二十萬法宛を與へた。

文官の筆頭は外相タレーランで公爵となり、百萬法の年金と共に廣大な城地を賜はり、その他の内閣員、元老院、法制院、立法院の各議長は、いづれも伯爵を授けられ、高等法院長、パリイ、リオン、ボルドー等の市長は、子爵または男爵を授けられ、それに相當する年金をも賜はつた。

オーストリアの四戰四敗

ナポレオンが、フリードリランドにロシア軍を破つて、ニーメン河上にアレキサンダー一世と相會し

て、媾和條件を協定した時に、兩帝が、端なくもイギリス征伐に一致した事實は、痛烈な脅威をイギリスに與へずには止まなかつた。

是に於て、イギリスは、いつまでも海軍を以てする自衛策を執つてばかりもゐられなくなり、進んで陸軍を大陸に出すことに決し、ウェリントン (Wellington) 將軍をデンマークに、モア (More) 將軍をスペインに特派した。

デンマークは、中立を嚴守してゐたが、スペインの國王は、フランスのブルボン王家の姻戚である關係から、終始ナポレオンに反對して、イギリス方となつてゐた。

今やイギリス軍のスペインに上陸するを見て、ナポレオンは、直に十五萬の兵を以て、イギリス軍を撃退し、スペイン國王を廢して、曩にナポリ王に封じた自分の兄ジョセフをスペイン國王として、いよゝゝスペインをフランスの屬國としてしまつた。(ジョセフの跡に、妹婿ミュラー元帥を擧げて、ナポリ國王に封じた。)

之より先き、再び三たびナポレオンから屈辱を蒙つたオーストリア皇帝フランシス二世は、前後三年の間、鳴りを鎮めて、いつか報復を圖らうと待ち構へてゐたところ、二年間の北歐戰に疲れたナポレオンが、更にスペインに攻め入つて、英西聯合軍と戰を開いたと聞いて、好機乘すべしと思ひ、

チャールス大公をして、ナポレオンの保護國たるバヴァリアを占領せしめ、その弟ジョン大公をして、イタリー方面に向はしめ、四たびナポレオンに挑戦した。

この時、オーストリアは、四十萬の兵を備へてゐたが、ナポレオンは、本國兵及び屬國兵を合せ實戰に經驗ある七十萬の精兵を持つてゐた。彼は、オーストリア出兵の報を聞くや、直にスペインから引返し、その保護下にあるライン同盟聯邦に大軍を集中し、四月九日（一八〇九年）にチャールス大公の率ゐるオーストリア軍をバヴァリアから撃退し、五月十三日には、早くも再びオーストリアの首府ウィエナに進み、六月六日におけるワグラムの一戦に大勝を博して、オーストリア軍に致命的打撃を與へ、シェンブリュン條約に依り、オーストリアをして、八千萬法の償金を拂はしめ、なほトリエスタ及びアドリアティックの海岸諸港全部を放棄せしめた。

この條約の條件は、スペイン方面の戰況によつて幾分緩和されようといふ思惑から、オーストリア側で數週間遷延したので、漸く十月十四日に至つて調印された。

この戰役の結果として、オーストリア首相スタディオ（Stadion）責を引いて辭職し、かの有名な外交家メッテルニツヒ（Metternich）がこれに代つた。メッテルニツヒは、豫てより親佛主義を持ち、フランスの外交家タレーランとも親善の間柄であつたので、爾來三年に亙り、兩國は平和の國交

を續けることになつた。

後に、オーストリアの皇女をナポレオンに嫁はすことになつたのも、このメッテルニツヒの取計らひである。

子なきは去る

ナポレオンがオーストリアから凱旋すると間もなく、ジョセフィーヌは離別されることになつた。

丁度この時から十年前に、ナポレオンがエジプトから歸つて、離婚を言ひ出したのは、ジョセフィーヌとシャルル大尉とのあらぬ艶聞に一時激昂したまで、本氣の沙汰ではなかつたが、今度は考慮を重ねた結果、いよくジョセフィーヌを離別することにしたのである。

それは、勿論ジョセフィーヌの方に、落度のあつた譯ではなく、またナポレオンの彼の女に對する愛情が衰へた譯でもない。

ナポレオン夫妻の愛情は、兩人がこの世を去る時まで、少しも渝らなかつた。ナポレオンは、プロシア征伐の時に、ジョセフィーヌをメーヤンスまで伴つた。それから、彼がロシア軍を討たんがためポーランドに北進するや、ジョセフィーヌは、メーヤンスから一書を飛ばして、

子なきは去る

「妻は夫と同棲するために、夫を持つものではありませんか。」と書き送つて、自ら寒風凜烈たる雪國のポーランドまでも行かうとした。ナポレオンは、最後のオーストリア出征の時でさへも、ジョセフィーヌをストラズブルグまで連れて行つたほどである。離婚問題の起つたのは、この時から半年もたない頃である。

それは、一體何故であるか。早く言へば「子なきは去る」の本文が、偶然にもジョセフィーヌの場合に當てはめられた譯だ。

この時、ナポレオンは三十九歳、ジョセフィーヌは四十五歳、兩人の間に子が生れなかつたので、フランス大帝國を誰に譲らんかといふ問題が、絶えずナポレオンのみならず、ジョセフィーヌの念頭からも去らなかつた。

尤も、實子がなくても、適當の猶子があれば、帝位を繼がせることができぬでもない。ナポレオンの弟のルーイとジョセフィーヌの實子オルタンスとの間に、男の子が生れた時に、ナポレオンもジョセフィーヌもこの子を猶子としようと思つてゐたところ、運悪くも、その子が五歳の時に亡くなつてしまつた。

ナポレオンの他の兄弟にも子があつたが、母方が悪かつたり、又妹達の子の方は、父方が善くな

かつたりして、どうも猶子とすべき適當な者が見當らなかつた。

そこで、帝位繼承者を、ナポレオンの再婚に由つて求めることにし、そしてその新皇后たるべき女性をヨーロッパの帝室から迎へて、ナポレオンの直系で而も眞誠の皇胤(母方)たる立派な嗣子を設けて帝位に即かせようといふ事に、ナポレオンとその重臣との間で、取極められたのである。

この問題は、數年以前より研究されてゐたのであるが、ナポレオンは、これまでその斷行を躊躇してゐたのである。それには、事情がある。ジョセフィーヌは、先夫ボーアルネとの間に、男女二人の子を産んでゐたから、石女でないことが明白であつたが、ナポレオンに果して子種があるかどうか疑問となつてゐた。若し子種が無いとすれば、糟糠の妻ともいふべきジョセフィーヌの離別が、結局無益の殺生に終る譯になる。

ナポレオンは、よくその一生中に七人の女を持つたと自慢したが、その五人までが年の若いのにも拘らず、妊娠しなかつたので、彼は、一時猶子を求めるより外に仕方がないと諦めてゐたところ、幸か不幸か最後の二人の女が、おのゝ一男子を擧げたので、こゝに彼は、新妻を迎へて、實子を得ようといふ腹を極めることになつたのである。

ナポレオンの戀愛物語をするのは本書の領分でないが、この最後の二女との關係は、彼をして最愛

の皇后を離別せしむる動機となつたものであるから、その概略を語る必要がある。

子を生む情婦(上)

ナポレオンが、常勝將軍として帝王中の帝王として、又超人的英雄として、萬民の崇拜を受け
てゐた時分に、テュイユリー宮中に開かれた夜會の盛大さといつたら、それこそ、文字通りの古今無比
ともいふべきものであつた。

當代の名將、賢相、碩學、文豪、悉く集まり、各國の外交官は、彩色陸離たる禮服に、光輝燦爛
たる勳章を帯び、交際社會の花と呼ばれたる無數の淑女佳人は、綺羅を飾り盛裝を凝らし、眞に人目
を眩惑するばかり。

この夜會に召さるゝさへ無上の光榮なるに、ナポレオン大帝の御聲掛りでもあらうものなら、忽ち
萬目羨望の的となる。わけて虚榮に憧憬れる女性は、ことさらに嬌態を作り、艶笑を浮かべつゝ、い
かで陛下の眷顧を惹かばやと、競ひ合ふのである。

その中に、目鼻だちなら、姿かたちなら、一際優れて、十八九とも覺しき美人が、人知れずナポレ
オンに付き纏つて、心ありけに絶えず彼に秋波を送つてゐる。それが素よりナポレオンの目に留まり

ぬ管がない。

この美人は、エレオノール嬢(Mademoiselle Éléonore Denuelle)と呼ばれ、ナポレオンの妹、カロ
リーヌの學校友達で、十七の歳に、第十五龍騎隊のルーヴェル大尉と結婚したが、この男は酒癖が悪
く劍を抜いて同僚を刺した料で、軍籍から除かれ、二年の懲役になつたので、彼女はこの男と別かれ
てしまつた。丁度その時分に、ナポレオンの妹、カロリーヌは、夫のミュラーが、戦功に依り、ベル
グ大公に封ぜられたので、自分も大公妃と出世してゐた。

エレオノール嬢は、昔馴染の縁故を辿つて、大公妃附女官となつた。勿論侍女といふよりも話相手
といふ格で、夜會などにもエレオノールは、カロリーヌと一緒に出来ることになつてゐた。

かういふ事情が判ると、ナポレオンは、エレオノール嬢に逢ふために、微行で度々妹の家に往き
出した。

妹のカロリーヌは、夫のミュラーが、ともすれば新女官のエレオノールの美貌に目をつけて、妙
な素振りをするところがあるので、いつそのこと、この女を兄の持者として、夫の動く食指を抑へてや
らうといふ思惑から、自ら進んでナポレオンとエレオノール嬢との媾合を媒介つたといふことだ。

その中に、エレオノール嬢が妊娠して、男の子を産んだ。その出生届には、

子を生む情婦

「エレオノール嬢二十歳、その長男レオン、一八〇六年十二月十三日生る。父不在。」とある。

それからナポレオンの微行は、一入頻繁となつた。それは、女よりも始めての實子の愛に惹かされてゐた。

ナポレオンは、この子の養育料として、年額三萬法を與へ、その教育を祕書官メヌーヴァルに任せ、レオンは、伶俐な質ではあつたが、ナポレオンを父に持つたのを誇りとして、兎角放埒に流れ、生長してからも、無謀な鐵道や運河などの計畫を起したが、一つも成功せず、後に、一八四八年、第二共和國の大統領候補として競争したが、それにも失敗した。彼はナポレオンの遺言で、七萬二千法の年金を受けたので、生活には困らないで、七十五歳まで生き延びた。

それから、エレオノールは、レオンを産んでから二年後に、歩兵大尉アンヂエーと再婚し、アンヂエーがモスコ遠征の時に戦死してから、三たびバヴァリアのエミーユ伯爵と結婚し、伯爵が駐佛大使となつた時に、相携へてパリに歸つた。彼女は八十二歳の長壽を保つた。

以上の事實は、主としてノーロワー(Nauroy)の「ボナパルトの祕密」(Les Secrets des Bonapartes)に據つたものであるから、ありふれた物語とは、おのづからその選を異にするものである。ことを特に附記して置く。

子を生む情婦(下)

ナポレオンがプロシアを蹂躪して、更にロシア征伐に向ふ途すがら、ポーランドに乗込んだ時に、これまでプロシアとロシアとの間に介在して、分割の屈辱に悩んでゐたポーランド人が、ナポレオンを頼んで、自國の獨立を回復しようといふ思惑から、上下言ひ合はしたやうに、盛んに歓迎の意を表したものだ。

ポーランドは、世界第一の美人國といはれてゐる。それに、女共は、一年の半を、田園の別墅で讀書や修養に送る習慣になつてゐるので、天成の麗質に、灼爍たる才華までが添う譯である。その中にナポレオンの魂を奪つた絶世の尤物があつた。

訊ねて見ると、この女は、當時歳二十一で、二年前にウァリユースキ(Walewski)伯爵に嫁いたが、伯爵は、歳既に耳順を過ぎ、頑固で、冷酷で、而も陰氣な無趣味な男であるので、その結婚生活は、餘り幸福なものでないといふ評判であつた。

ナポオレンは、それを聞くにつけても、彼女を慕ふ心に一入の憐れさが増して來た。彼思へらく、

高官たる侍従長を特派して勅命を傳へさせたならば、必ず難有がり奉つて、二つ返事で御請をするであらうと。豈科らんや、ウァリュースカ夫人。(Madame Walewka)は、本心からか、ただしは思はせぶりか、二の句の繼げぬまでに、きつぱり斷つた。

ナポレオンは、何事でも想を遂げずに止む男でない。今度は人を筆にかへて直接談判を試みることにした。羽書の飛ぶこと再三に及んだが、まだ手應へがない。

「朕は親しく御身の脚下に身を運んで、口づから真心を打開けばやとあせれども、如何せん、大國の大帝たる重荷に妨げられて、思ふに任せずと、知り給はずや。朕は爾が満腔の熱情もて御身を愛慕するものを、御身は、何時まで残忍の無言を續けんとはし給ふぞ。」

古い言葉だが、弱き者よ、汝の名は女なり。高峰の花も、誘ふ嵐には散らされる。

場所は、戦の塵に塗れた營舎。時は、夜更は人定まる頃。男は得意満面の體。女は色蒼ざめて涙の雫頬に滴り、固く口を結んで俯向いてゐる。

この光景は現場の斡旋者たるコンスタンの書き遺した記録の一節であるが、彼は、女の歸つて行つたのが、夜半の二時であつたとばかりで、兩人の間に、何事が語られたかには、言ひ及んでゐない。

始終ナポレオンに親近してゐたレミューザ夫人 (Madame Remusat) の備忘録には、
「この時、ナポレオンは、侍従長デロックの案内で、皇帝たる威風堂々と、ウァリュースカ夫人の待つてゐる部屋へ入り來り、さながら裁判官が罪人でも取調べるやうな態度で、ポーランドの一般國情や、人民の政治思想などを、巨細に互つて訊問する。僅か二十前後の若い女は、この意外な待遇に異様の目を見張つた時に、ナポレオンは、始めて我に返り、侍従長を退けて、やさしい言葉をかじめ始めた。」

とある。
その後、ウァリュースカ夫人は、

「君が妾を愛せざる時來るも、妾は尚ほ必ず君を愛することを忘れ給ふな。」

といふ文字を刻み込んだ指環をナポレオンに贈つたことほど左やうに、彼を慕ふやうになつた。

ナポレオンは、この前の情婦エレオノールには餘り執着しなかつたが、ウァリュースカ夫人に對する愛情は、より長く續いた。ナポレオンは、

「彼女は、その姿の美しいやうに、その心の美しい完全な美人である。」

と常に賞めてゐた。

ナポレオンは、ポーランドから北進して、アイローにロシア軍を撃退した後、フィンケンスタインの本營に冬籠りしてゐた時に、彼女を呼び寄せたり、パリに凱旋してからも、勝利町の舊邸に彼女を圍まつて置いたりしたが、彼女は一八〇八年の七月中に妊娠し、翌年五月四日に男の子を産んだ。ナポレオンは此の子をアレキサンダーと名づけて、殊の外可愛がつた。アレキサンダーは、兄のレオンよりも出来が良く、成長してからはコロナ伯爵と名乗り、ナポレオン三世の時代に立法院議長とまでなつた。

愛妻との離婚

エレオノールとウアリユースカの兩女が、共にナポレオンの種を宿しておのゝ男の子を産んだ事實は、ナポレオンをして、歳既に不惑に達しながら、なほ直系の嫡子を擧げることができるといふ自信を固めしむべき、強い動機となつたのである。

曩にナポレオンが、ニーメン河で、アレキサンダー一世と會見した時に、皇妹を貰ふ約束がほゞ出来たのであるが、母后の不承知で、終に纏まらなかつた。最後にオーストリアと和を結んだ折に、フランス二世は、ナポレオンの歡心を買ふ爲に、首相メッテルニッヒの勧めを容れて、皇女マリア・ル

イザ || Maria Louisa (フランスに移つてからマリー・ルイズ || Marie Louise) をナポレオンに娶はせることを承諾した。

ナポレオンが、いよく離婚の決心をジョセフィーヌに打ち開けたのは、オーストリアから歸つてからまだ間もない頃で、一八〇九年の十一月下旬であつた。

やがて善美を盡した最後の晚餐會が開かれた。ナポレオンとジョセフィーヌとは、抑へんとしても又こみあける悲痛の感に打たれて、兩人とも一物をも口にすることができなかつた。食事が終ると、それと察した陪食者は、一人残らず席をばづした。

兩人が差向ひになると、ナポレオンは、思ひ切つて口を開いた。

「あゝ、ジョセフィーヌよ。予が如何に御身を熱愛するかは、御身のよく知る所である。予が一生の成功及び幸福は、御身の力に負ふ所多きに居る。御身に離るゝほど予に取つて苦痛なるものはまたとない。併し、ジョセフィーヌよ。予は運命に従はねばならぬ。國家の爲には予が最大の愛情をも犠牲にしなければならぬことを察してくれ。」

ジョセフィーヌは、豫て覺悟は極めてゐたものゝ、いよくこの離婚の宣告を受けるに及んで、鐵槌にでも胸を打たれる想ひで、忽ち血を吐くやうな聲を出して、氣を失つてしまつた。

近侍の人々が驚いて駈付けて見ると、ナポレオンはジョセフィーヌを抱き締めて、

「予はなほ御身を愛す。去らるゝ御身よりも、去る我身の苦しさは、いかにかりぞ。」

と狂氣の如く泣き叫んでゐた。

英國前首相ローズベリー卿は、その名著「ナポレオンの晩年」の中で、この時に於けるナポレオンの態度を評して、

「これは喜劇(Comedy)ではない。こんな喜劇をやつたとて、ナポレオンに取つて、何の利益も無いではないか。それは正しく彼の眞情が、咄嗟の間に、流露したものに相違ない。」

と斷案を下してゐる。

越えて十二月十五日に、離婚式がテュイユリー宮殿で行はれた。その時、ナポレオンは、

「フランス國民は、擧つて、朕に皇嗣を得て皇統を萬世に傳へんことを望んで止まない。然るに皇后ジョセフィーヌは、伉儷既に十五年に及ぶも、終に一子を擧げなかつた。是れ朕が深甚なる愛情を割きて皇后を離別する所以である。朕の身は尙ほ健全なれば、必ず國民の期待を満足する時あるを信ず。十有餘年に互り赤誠を盡して朕に事へたる皇后の功績は朕の深く感銘する所、朕は離婚後と雖も、ジョセフィーヌをして皇后たる尊稱を保たしめ、終生朕の良友として、朕の親愛の意を表

するであらう。」

と述べ、ジョセフィーヌは、之に對し、

「妾は、陛下の御側にかしづきてより十有餘年、何等フランスの幸福に資する所なく、殊に皇子を擧げて、皇帝及び國民の望みを充たす能はざるを憾む。陛下は、天稟の偉材を懷いて、革命の禍亂を鎮定し、秩序を回復し、宗教を再興し、帝位に登りて國家百年の基礎を樹て給うた。妾はたとへ離婚の身となるも、陛下に對する尊敬の至情は、長へに渝らざることを誓ふ。今國の爲め民の爲めに、一切の私情を棄て、奉公の誠を盡し得たるを思へば、悲哀の感も頓に消え去るを覺ゆ。」

この時、ジョセフィーヌは、少しも取り亂した容子がなかつたが、その顔色は、さながら大理石で作られた肖像とも見紛ふばかり、平生星の如く涼しく輝ける眸さへ、俄かに曇つて光もなく、耐へ難き憂愁の雲は、眉のあたりに棚引くかとも思はれて、並居る人々顔を背けて、暗涙に咽ばぬ者はなかつた。

皇女との結婚

ジョセフィーヌを離別してから四月ほど過ぎた一八一〇年の三月上旬に、ナポレオンは、參謀總

長ベルティエーを特使としてオーストリアに派遣し、フランシス二世に對し、皇女との結婚を申込んだ。同月十一日に、ヴィエナに於て、名代結婚式が擧げられた。時に、ナポレオン四十一歳、マリールイズ十九歳。

それから、マリールイズが、ヴィエナからバリーに来る時に、ナポレオンは途中まで出迎へ、コムピエーギユで兩人が始めてお互の顔を見合つたのである。

その時、マリールイズは、侍女に向ひ、

「ナポレオンは、肖像で見たよりも一層好い男振だよ。」

と語つたといふから、彼女は、この政略結婚に、さして失望もしなかつたらしい。

コムピエーギユで、一泊することになつた時、ナポレオンは、皇女に附いて來たオーストリアの宰相メッテルニッヒとナンテ僧正に對し、

「朕はマリールイズと同室で夜を過ごしても差支なきか。」

と訊ねた。宰相は、

「勿論です。」

と答へ、僧正は、

「名代なりとも、即ちに結婚式が行はれた以上、マリールイズ陛下は、最早オーストリア皇女でなくて、フランス皇后であります。」

と附け加へた。

やがて、ナポレオンがマリールの部屋に這入つた時に、

「御身がヴィエナを去らるゝ時に、兩親陛下から何か御傳言でもあつたか。」

と訊ねると、マリールは、

「別段御傳言とはありませんが、陛下と二人きりとなつた時は、何事も、陛下の御仰せらるゝが儘に、従はねばならぬと申付けられました。」

と答へた。

以上の問答は、ナポレオン自身の口述した追想録に載つてゐる。その次に、ナポレオンは、

「彼女は愛嬌の好い、正直な處女であつた。」

と言ひ添へてゐる。

翌月二日に、バリーのノートル・ダムにおいて、正式の大禮が行はれた。

その時から丁度一年後の一八一一年の三月二日に、新皇后は、お説ひ向きに、男の子を産んだ。こ

の皇子は、ローマ王と稱せられて皇嗣になつた。ナポレオンが、手の舞ひ足の踏む所を知らぬまでに雀躍して歡んだのは、言ふまでもなく、全國民も亦舉つて衷心から皇室の萬歳を祝した。

この頃が、ナポレオンの全盛時代で、その勢力は正しく絶頂に達してゐた。オランダ、フリースラント、オルデンブルヒ、ブレーメン各地からハムブルヒに至る一帯の邦土は、フランスに併合され、イタリー、スウェーデン、スペイン、ウエストファリア、サキソニー、バヴァリヤ、ウィルテムベルヒ、バーデン等の諸國は、悉くナポレオンの保護國となり、プロシアは獨立の名あるのみで、ナポレオンの鐵腕の下に屈従し、又オーストリアは、姻戚として、ロシアは良友として、孰れもナポレオンに好意を表してゐた。

一人の勢力範圍に、かくの如き廣汎なる邦土を包容した事實は、たしかに空前であり、恐らく絶後であらう。

全盛と衰運

人の一生は、宛も山を越えるが如く、登り詰めれば降りることになるものだ。ナポレオンの運勢が絶頂に達した時が即ち下り坂に向ふ時であつた。登る時には、隨分手間がとれたが、降る時には急轉

直下、思ひの外あつけないものであつた。その没落の兆候は、モスコ入から始まる。

ナポレオンが、プロシア征伐の時に、大陸制度と稱するベルリン勅令を發し、イギリスの富源を涸らす目的で、イギリスと大陸との間に於ける通商貿易を禁斷したのは、彼に取つて一大失策であつた。といふのは、それが、敵を苦しめると同時に、躬方をヨリ以上に苦しめる結果となつたからだ。

當時イギリスは、世界に於ける通商の仲介で、兼て金融の中心となつてゐた。されば、ベルリン勅令の結果として、大陸諸國は、イギリスといふ顧客と金主とを一時に失ふこととなり、次第に疲弊を加へて來るので、ナポレオンの政策に對して、いづれも不滿の念を起さずには居られなかつたのである。

別けても、ロシアは、穀物、材木、毛皮、麻類、獸脂、煙脂等を特産品として、専らイギリスに輸出してゐるところ、それが俄に禁制となつたのであるから、莫大な損害を蒙らざるを得ないので、關係事業家は、一齋に政府に向ひ、フランスとの同盟を棄て、舊友邦のイギリスと通商關係を開くことを要求して止まなかつた。

そこで、露帝アレキサンダー一世は、一八一〇年の十二月三十一日に、勅命を發して、イギリス人

の名儀になつてゐない物品なれば、その輸出入を許可することにした。これは、イギリスへ輸出したはイギリスから輸入する物品でも、名儀さへ他國人にすれば、自由に貿易ができるといふ趣旨であつた。

ある日、ナポレオンは、ロシア大使コフラキン公 (Prince Kowrakin) を呼び付け、

「貴國皇帝は、イギリスとの通商を始め出したさうだ。朕は、バルチック沿岸を監視し、税關吏をペテルスブルグまでも派遣して、大陸制度を強制せねばならぬ。若し貴國が反對するならば、朕にも相當な覺悟がある。」

と語つた。

コフラキンは、露佛の破綻の到底避け難いことを豫期してゐたものゝ、一應は辯解して見た。

「イギリス人名儀の物品の貿易は依然禁止してゐます。」

「それは有名無實ぢや。」

「ロシアの死活に關する通商は、全然止める譯には行きませぬ。」

「我國との戦争は、貴國の死活に關しないといふのか。」

「その事に就ては、本國より命令を受けてゐます。」

「どういふや。」

「只今ボメラニア公國とワルソー大公國とに駐屯する貴國軍隊は、弊國の死命を制するものなるが故に、一日も早く御引揚げを望むといふのであります。」

「朕は、そんな指圖に従はねばならぬ地位にあると思ふか。馬鹿な事だ。この上議論は無益ぢや。」

それから間もなくコフラキン大使は、本國に引揚げた。

これより先き皇嗣降誕の祝詞を捧呈しに來たパリ市代表者に對し、ナポレオンは、早くもロシア征伐をほめかしてゐた。

「朕は、遠からず皇嗣を残して又も征衣を着けねばならぬ。ティルジツトでロシアと媾和したのは、ロシアがイギリスと斷交することを約束したからだ。然らざれば、當時既にペテルスブルグかモスコイまで攻め込むところであつた。今我宮中の金庫には二億フランの現金がある。これは、チヨコレートやコーヒーを買ふためぢやない。みんな國のために用立てる積りぢや。若し、朕の地位が、單にフランス國王たるに止まれば、ルイ十四世か十五世の眞似をして歡樂にばかり耽つてゐてもいいところだが、朕は今シャーレマン大王の如く、大陸の皇帝となつてゐる以上、大陸制度を強制する爲に、またも兵馬の艱苦を忍ばねばならぬわい。」

ナポレオン
ナポレオン

モスコー焼拂ひ

ナポレオンは、一八二二年五月九日に、新皇后マリー・ルイズと共に、パリを出發し、サクソニの首府ドレスデンに向つた。

ナポレオンのドレスデンに到着するや、サクソニーの國王及び王妃は勿論、オーストリアの皇帝及び皇后までも駈付けて見參する。歓迎の盛宴は、晝夜を別たすに催される。與邦の王公大臣は、孰れもナポレオンの膝下に平伏して敬意を表する。彼は、その自負した通り、眞實「大陸の皇帝」となつたのである。

ナポレオンは、此處に留まること二週間、五月三十日に、ポーランドに入り、六月六日に、ダンツィヒに出で、同月二十四日に、ニーメン河を渡つて、漸次モスコーに近寄つた。

この時ナポレオンの統率した軍隊の總數に就ては、幾多の異説がある。最も多くに見積つたのが、バラード少將（一九二四年、我が大正十三年の著ナポレオン傳）で、六十五萬としてゐる。最も少く計算したのが、マクファーレン（一八五〇年、我が嘉永三年の著ナポレオン傳）で、フランス兵二十萬、ポーランド兵六萬、オーストリア兵、バヴァリア兵各三萬、プロシア兵二萬二千、イタリー兵、サ

クソニー兵、ウエストフアリア兵各二萬、スミス兵一萬、スペイン兵四千、ライン聯邦の小國兵併せて三萬二千、合計四十九萬八千としてゐる。なほそれよりも少い總勢四十萬と概算する史家もあるが、先づ五六十萬の間と見るのが當つてゐるであらう。

その中で、實際モスコーに向つたのが二十五萬である。之に對して、ロシア軍は、最初十八萬しか持つてゐなかつた。アレキサンダー一世は、ナポレオンが意外の大軍を率ゐて來たのを見て、大いに驚き、早くもバラチヨフ將軍を、露領ウイルナまで進んで來たナポレオンの陣營に送り、若しナポレオンが直ちにニーメン河以西に引揚げるならば、ロシアは必ず大陸制度を確實に遵守する條件で和を結ぶべき旨を傳へさせた。

これは、敵が戦はないで降服する譯だから、直ちに之に應ずるのが得策であつたのであるが、アレキサンダーの誠意を疑つてゐたナポレオンは、飽くまでモスコーに攻め入り、露帝をして城下の盟を爲さしむることに決し、この申込みを退けて軍を進め、ウイテブスクに、スモレンスクに、到る處に苦もなく敵軍を撃退した。九月七日に、アレキサンダー一世は、ポロディノに踏み留まつて、決戦を試みたが、この戦争も亦ナポレオンの勝利に歸し、ロシア軍は十一萬の中四萬を失ひ、ナポレオン軍の損害は、僅に二萬五千に過ぎなかつた。それから、ロシア軍は戦を避けてどしどし退却を續

けた。

ナポレオン

ボロディノから目的地たるモスコーまでは七十哩しかない。ナポレオンは、九月十四日に、いよいよモスコーに乗り込んだ。不圖、見ると宮城は悉く開放され、敵兵の片影も見えない。彼は、意氣揚々として、露帝の居城たるクレムリン宮に入り、思へらく、いかに頑強なアレキサンダーでも、かく首府を乗取られては、必ず城下の盟を爲さざるを得ざるべしと。

やがて、フランス軍隊は、市中に亂入して、食を漁り、酒を貪り、好い氣持になつてゐると、突如として火は十五箇所から起つた。そして火の手は、折柄の大風に煽られて、見る／＼うちに全市に擴がり、五日間に亘つて猛威を逞しうし、十二哩の間、見渡す限り朦々たる灰燼に没してしまつた。クレムリン宮も焼け落ちたので、ナポレオンは、郊外の離宮に移るべく餘儀なくされた。

發火の原因に就ては、説が分れてゐる。フランス側の歴史家は、アレキサンダーが、食糧宿舎を破壊して、フランス軍を苦しめる爲に、わざと全市を焼拂つたのだといひ、ロシア側の歴史家は、フランスの掠奪兵が狂酔して火を付けたのだといつてゐる。双方で種々の理窟を付けてゐるが、何分火事の水掛論に過ぎないから、いづれとも斷案を下すことはできない。

その後、いつまでたつても敵から音沙汰がないので、ナポレオンは、十月三日に至り、ローリスト

ン將軍を特使として、アレキサンダーに對し、ポーランドとトルコとをロシアの自由處分に任すといふ條件を以て、媾和を申込ませた。

此の時、大分氣が強くなつてゐたアレキサンダーは、フランス軍が露領内にある間は、斷じて媾和談判に應じ難しといつて、素氣なく交渉を拒絶した。

モスコー退却

ナポレオンが、モスコーで媾和を求めようとして、荏苒一箇月を空過したのは、彼にも似合はしからぬ無分別であつた。何となれば、彼は、之が爲に強敵に加へて嚴寒の襲撃をも併せ受けねばならなくなつたからである。

彼が、いよく見切りをつけてモスコーから退却し始めたのは、十月の十九日であつた。沿道の都市は、來る時に、既に大抵焼拂はれ、又目星しい農村の住民は、家財を纏めて悉く逃げ去り、見渡す限り、茫莫たる荒野のみ。

十一月六日には、雪が降り出して、肉を刺すやうな寒氣がビシ／＼と迫つて來る。食糧は欠乏するし、被服は十分でないし、長途の疲勞は加はるし、病に罹る者や、餓死する者や、凍死するも

モスコー退却

のなどが、日毎夜毎に段々増すばかり。

それに、ナポレオンがモスコーに一箇月を無駄に費してゐる間に、ロシア側では、要所々に新銳な軍隊を配備し、標悍なコサック騎兵を放つて、退却軍の前後左右から、間斷なしに奇襲を試みる。ナポレオンは、且つ退き且つ戦はねばならないといふ苦境に陥つたので、死傷者も格外に多く、最も勇敢に奮闘したネー元帥に屬する一部隊の如きは、三分の二を失つたほどである。

十一月二十五日に、ベレシナ河に於て、ダニューブ方面から來たロシア軍に進路を遮られ、左右兩側から挾撃を受けた時には、辛うじて一方の血路を開いて橋を渡つたもの、全軍未だ對岸に達し切らない中に、敵の砲彈で橋が撃落されたので、殘軍は、コサック兵の鏖殺する所となり、河中に溺死したもののばかりでも一萬二千に上つた。

モスコーの遠征軍二十五萬の中無事に引揚けた兵數は、僅かに四萬二千に過ぎなかつた。

十二月五日に、スモルゴニまで到着した時に、忌はしい警報がナポレオンを駭かした。それは、パリにゐたマレー(Maré)將軍が、

「モスコー出征軍全滅し、ナポレオン皇帝は戦死した。」
と言ひふらし、自らパリ總督と稱し、各官署を占領して、將に參謀本部を乗取らうとした時に、

端なく捕へられて銃殺されたが、之が爲に、人心頗る恟々たりといふのである。

そこで、ナポレオンは全軍の指揮をミュラー(ナポリ王にして元帥たる)に任せ、自分だけパリに急行することに決し、ワルソー、ドレスデンを経て、十二月十八日の夜に、漸くテューイユリー宮に着いた。

ナポレオンが生きて歸つたといふ公報が發表された時に、パリ人が狂喜したのは言ふまでもなく、遠いローマ、ミラノ、フロレンス等からも賀表、祝詞の來るもの數知れず、いづれも短文なるに拘らず、之を登載するために、官報に五十頁を増したといふから、ナポレオンの人望は、まだ衰へなかつたものと見える。

實際彼は、戦に勝つて而かも敵の都城にまで攻め入りながら、猛火と氷雪との爲に、思はぬ不覺を取つたに過ぎないのである。これは、不運とか天災とかいふべきもので、毛頭戦の罪ではなかつた。併しそれは、ナポレオンに取つて一大失敗たるに相違ない。この明白な失敗が、彼の赫々たる榮光に、一條の暗影を投げずに止む筈がない。

躬方の離反

「予は、モスコーに到着した時に、既に所期の目的を達したと思つた。その住民は、雙手を舉げて予を迎へ、ツァールの専制政治から救ひ出して貰ひたいといふ無数の請願書を提出するし、市内には、有らゆる物資が豊富に蓄へられてあつたしするから、予は冬季を通じて優に軍隊を支持するこゝとができたのだ。然るに、入城後二十四時間もたない中に、火は十五箇所から起り、忽ちにして十二哩の間を一面の灰燼と化してしまつた。これは、世界の歴史に未だ曾て前例のないことで、予の到底豫期し得る所でなかつた。」

これが、ナポレオンのモスコー失敗の述懐である。

併し一難を経る毎に勇氣百倍し來るともいふべきナポレオンのことゝて、この失敗の耻を雪がんと、三十萬の新兵を募つて、花々しく再舉を圖る準備を整へて、時機を狙つてゐた。折しも、これまでナポレオンの強制に、止むを得ず、心ならずもフランス方となつてゐたプロシアは、モスコー出征軍の大敗を奇貨として、俄かに寢返りを打ち、ロシアと攻守同盟を結んだので、ナポレオンはモスコー退却後未だ半年もたぬ一八一三年の四月の末に、早くも兵をサクソニーに進め、五月二日に、ルーツェンに於いて、露普聯合軍を撃退し、八日にドレスデンを占領し、二十日にポーツェンに於いて再び敵を破り、依然として常勝將軍たる實を示した。

併しこの時、悔り難いイギリスの名將ウェリントンが、スペインに現はれ、頻りにフランス軍を悩ましてゐたので、ナポレオンは、一日も早く大陸方面の戦局を結んで、イギリスに當るを急務とし、それには、プロシアを失つた代りに、オーストリアを得る必要を感じ、岳父に當る煥帝フランシス二世を説き、フランスに躬方するやうに勸めて見た。

この時、オーストリアの樞機を握つてゐた老獪な外交家メッテルニッヒは、一國の去就を決するに、姻戚の情誼よりも寧ろ國家の利害關係より打算せねばならぬといふ見地から、容易くはナポレオンの希望に應じないで、差當り仲裁を試みることを承諾した。

そこで六月四日から八月十日まで、休戦状態の下に、フランス、オーストリア、ロシア、プロシアの代表者の間で交渉が開かれることになつた。聯合國側の提出した媾和條件の要點は、イタリー、ベルギー、オランダをフランス領とし、スペインの獨立を認むるといふのであつた。ナポレオンは、スペインを放棄せば、それがイギリスの勢力範圍に移り、フランスの脅威となるからとて、斷呼としてこれを拒んだ。是に於て、交渉が大分むづかしくなつて來た。

丁度折衝最中の六月三十日に、スペインのヴィットリアに於て、ウェリントンがフランス軍を襲撃して大勝を博したといふ急報が傳はつた。これが、聯合國側の意を強うせしむると同時に、ナポレオン

の氣を苛立たせたので、たゞとう媾和談判は破裂して、八月十一日に再び戦端を開くことになった。その時に、ナポレオンを失望させたのは、射方となる管の煥帝フランシス二世が、メッテルニツヒの差金で、案外にも敵方に加擔したのみならず、曾て自分がスウェーデン國王に封じてやつた、元の部將ベルナドットが、恩を仇に、自分を棄て、露帝アレキサンダー一世に就いたことである。ベルナドットとしては、その治下に在るスウェーデンが、ナポレオンの設定した大陸制度の打撃に苦しんでゐたし、ロシアと密接な隣交關係を持つてもゐたし、それに勢に附く人情も手傳つて、さてこそ、モスコ失敗以來めつきり影の薄くなつたナポレオンを見限る氣になつたものと見える。いづれにせよ、かう段々と射方が離れ去つたのは、ナポレオンに取つて、非常な物質的打撃であつたばかりでなく、どの位悲痛な精神的衝動であつたか知れない。

倒瀾覆厦

予がオーストリア皇女と結婚したのが、全く没落の因を成したのである。フランシス二世がその女婚たる予を見棄て、アレキサンダー一世の射方にならうとは、どうしても思はれなかつた。若しオーストリアがロシアに就くことが明白に判つてゐたならば、予はロシアとの戦争を續けなかつたのだ。」

これは、ナポレオンの自白であるが、彼の違算は、嘗にフランシス二世の態度ばかりでなく、曾て自分の部將として恩顧を加へたスウェーデン國王ベルナドットまでが、自分の信賴を裏切つて敵側に走るとは、夢にも思はなかつたに違ひない。

そればかりでない。ナポレオンが第一統領時代に、陰謀を企て、死刑になるところを助けてやつたナポレオンの部下第一の名將といはれたモローが、丁度この時にアメリカから歸つて来て、アレキサンダー一世の幕僚となつて、自分に又向ふことになつたと聞いた時に、ナポレオンは、どの位憤慨したか知れなかつた。

尙ほそれ以上に、ナポレオンを憤慨させたのは、時もあらうに、戦況漸く不利となつた場合に、妹婿のナポソール王ミューラーが、オーストリアの宰相メッテルニツヒの甘言に迷つて、對陣最中に、突然その部下と共に敵方に走つたことである。

最後の不幸は、浮沈の運命を定むべきライプツィヒ戦争の時に、ナポレオンは、總勢十九萬を以てロシアの十五萬、プロシアの八萬、オーストリアの四萬、スウェーデンの三萬、それに少數ながらイギリスの援兵を加へて三十餘萬の大軍に當るべく餘儀なくされたことである。

戦争は、十月十六日から十八日に至る三日間に亘つて続けられ、ナポレオン方は四萬を失ひ、聯合側は六萬を失つたといふから、その激戦の状も、略ぼ推察されるが、敵側には、ナポレオンの軍略作戦の秘訣をよく呑み込んでゐる舊部將がゐたし、それに衆寡の差が餘り甚だしいので、さすがのナポレオンも、その光輝ある一生中始めての大敗を實驗し、十一月九日を以て、恨みを飲んで、一先づパリに引き返した。

それからといふものは、ヨーロッパの輿邦は、悉くナポレオンに背き去り、ドイツ地方は勿論、イタリー、スペイン方面に於けるナポレオン軍は、いづれも敗走し若しくは捕虜となつてしまつた。

聯合國は、プロシアのフランクフルトに會議を開き、フランスがドイツ諸邦、スペイン、オランダ及びイタリーを放棄し、その國境を舊領域に局限することを條件として和を結ぶことに決し、その趣をナポレオンに申込んだ。併し、ナポレオンは、生きてかゝる恥辱を受くるに忍びずとて、それを拒絶した。そこで、聯合軍は一八一四年の一月早々いよく大舉してフランスに攻め入ることになつた。この時、新たにスヘス、デンマーク、ライン同盟聯邦までが、聯合側に加はつた。

やがて、聯合軍が國境に迫つて來た時に、ナポレオンは、一月二十五日に、皇后マリー・ルイズと皇嗣イタリー王に最後の別を告げて戦線に向ひ、さながら傷ついた獅子の如くに奮闘し、幾度も聯合

軍を撃退した。併し聯合側は、相互の連結を鞏固にするために、三月一日に至り、シヨームンに於てイギリス、ロシア、オーストリア、プロシア四國間で、新に同盟條約を結び、これに依つて、聯合國は、常に戦線におのゝ十五萬の精兵を維持し、なほ十分ならずるときは、更に各國六萬の軍隊を増派し、軍資の不足はイギリスに於て之を負擔することを規定し、次から次へと新しき手を向けて來ることになつたから耐まらない。ナポレオンが一方の國境アルシ・シユル・オーブに於て戦つてゐる間に、聯合軍の本隊は、早くもフランス國內に攻め込んでしまつた。

ナポレオンが軍を班へした時には、哀れや、パリは、既に全く敵手に落ち、皇后マリー・ルイズと皇嗣イタリー王とが、オーストリアに送らるべく連れ出された後であつた。

萬策茲に盡きたことを觀念したナポレオンは、命を天に任せ、悄悄としてフォンテーヌブローの離宮に引籠つた。

退位宣言

聯合軍は、三月三十一日にパリを占領し、露帝アレキサンダー一世と、普王フレデリック・ウイリアム三世は、彼等自身の都城が曩にナポレオンに蹂躪された怨みを晴らさうといふ復讐氣分で、大

威張りでテュイユリー宮に乗込んだ。煥帝フランス二世だけは、娘婿のナポレオンの屈辱を見るに忍びなかつたものか、郊外に留まつて、パリには這入らなかつた。

聯合國が劈頭に、ナポレオン若しくはその一族とは、直接に媾和の交渉に應じない旨を聲明したので、ナポレオンの舊外相タレーランの組織した假政府は、翌四月一日に、ナポレオン・ボナパルトは帝位を喪失し、その一族の相續權も自然に消滅し、隨つてフランスの國民及び軍隊は、ナポレオン・ボナパルトに對する忠義の誓を解かれたりといふ布告を發し、それと同時に、ナポレオンは、皇帝の位を退くべく餘儀なくされた。

聯合國は、ナポレオン皇帝を以て、ヨーロッパの平和克復上唯一の障害なりと聲明したるに依り、ナポレオン皇帝は、その子孫と共に、フランス及びイタリーの君位を退き、且つフランスの利益のために、如何なる個人的犠牲をも辭せざるのみならず、生命さへ惜まざることを茲に宣言す。

一八一四年四月六日

フォンテーヌブローに於て

ナポレオン

この日から二日前に、ナポレオンは、その位を皇太子に譲り、皇后を攝政とする積りで、その時に、

「皇太子の繼承權及び皇后の攝政權と離るべからざるフランスの利益の爲には、如何なる個人的犠牲をも辭せざるのみならず云々」と書いたところ、假政府が、既にナポレオン一族の帝位相續權の消滅した旨を公布したので、ナポレオンは、止むを得ず、その子孫と共に、主權を放棄するといふ意味に書き直したのである。

越えて四月十一日に、フランス皇帝處分法が、フォンテーヌブローに於てナポレオンとロシア、オ

ーストリア、プロシア三代表者との間に結ばれた。その中の最も重要な部分は左の二項である。

第一、ナポレオン皇帝陛下は、その住所として擇びたるエルバ島を、一生の間、獨立せる邦土として、自己の主權の下に領有すること。

第二、ナポレオン皇帝は、フランス政府より歳費二百萬法を受くべく、その中一百萬法は皇后の歳費とすること。

哀れむべし、僅か半年以前には、ヨーロッパ大陸の皇帝たる威嚴と實力とを振るつてゐたナポレオンは、九天の上から九地の下に落ちて、面積僅かに八十六方哩、わが後醍醐天皇の流され給ひし隱岐よりもなほ小さい、地中海の一孤島エルバの領主と成り下つたのである。

イギリスはこの協約をさへ容易に追認しなかつた。ヨーロッパの平和攪亂者をして、依然皇帝の名

稱を保たしめ、且つ一小土たりとも、獨立國の元首たらしむるは正當でないといふ、一理窟をこねてから後に漸くそれに同意した。

ナポレオンは、この屈辱的協約に調印した翌晩に、悲憤の餘り、自殺を企てた。この自殺の事實を否認する學者もあるが、セント・ヘレナに於けるナポレオンの實話によると、それは本當らしい。

「わしはモスコから退去する時に、コサツクの捕虜となる場合を慮つて、軍醫官ヴァンに命じて、調合させた毒藥を小さな絹袋の中に入れ、首からつるして絶えず持つてゐた。フォントレーヌロー協約に調印したあとで、わしは考へた、何故かくまで屈辱の苦痛を忍ばねばならぬのか、若しわしが死んだら、或はわが子が皇帝の位に即くことができるかも知れないと。そこで、床から飛び起きて、この毒藥を水に入れて、一種言ふべからざる刹那の安慰を覺えつゝ、それを一口に飲み乾した。暫くして腹が痛み出したので、思はず呻吟つたものと見え、近侍の者共が醫師を呼んで手當をしてくれた。すると、すぐに癒つた。多分時がたつて藥の氣が抜けたので、毒が利かなかつたのだ。さう早くわしを殺すのが、神の意でなかつたのであらう。」

タレーランの活躍

ナポレオンが位を退いたあとで、今度は何人をフランスの元首に擧ぐべきか問題となつた。これは、勿論當時フランスの死命を制してゐた聯合國の意向を窺はねば、決することのできない問題であつた。

この時、假政府の首脳となつてゐたのが、タレーランである。タレーランは、曩にナポレオンがスペイン國王を放逐し、兄のジョセフを以てこれに代へた時に、それは、禍の種を蒔くものであるとて、極力之に反對した爲に、ナポレオンの不興を蒙つて免職となり、六年ばかり隠遁の身となつてゐたが、その間、始終ナポレオンの反對派から護立てられて、その首領株になつてゐたのである。

「タレーランは、事の善惡に頓着なく、たゞ自己の利害からばかり打算して仕事をする奴だ。心中で思つてゐる事は、唇に口にしないのみか、露ほども色にさへあらはさない。その沈着さといつたら、逆も眞似手はあるまい。彼が人と話してゐる時に、うしろから彼の頭をぐわんとくらはして、彼は蠅のとまつたほどにも感じさうもない。それでなかく、思慮の深い男だから、外務大臣として、今生きてゐる人物中で、彼の右に出る者はあるまい。」

曾てかうナポレオンに品階されたタレーランは、今やナポレオン没落後の始末に就いて、アレキサンダー一世との交渉に當ることになつたのである。

「タレーランは、例に依つて沈黙を守り、自分の方からは、なんにも言ひ出さないで、アレキサンダーから口を切つた。」

「ナポレオンに代つてフランスに君臨するものは、その輕歴と名望とに於いて、ナポレオンにも劣らない現スウェーデン國王ベルナドットが適當だと思はれるが、どんなものか。」

この提案は、ベルナドットがアレキサンダーに取入つて、運動した結果であつた。併しナポレオンの言つた通り、なか／＼思慮の深いタレーランは、それを承知しない。

「フランス國民は、軍人には懲り／＼してゐます。軍人としては、ナポレオンより偉い人はありません。ベルナドットは、品の悪い第二のナポレオンであります。」

「それでは、誰がよからう。」

「今後永く世界の平和を維持するには、ブルボン家を再興するに限ると思はれます。」

「外に名案はあるまいか。」

「詰まり、ナポレオンかブルボンか、二者その一を擇ぶより外はありません。第三者は絶対に問題になりませぬ。」

「舊王ルイ十六世の嗣子は、既にこの世を去つたではないか。」

「只今ロンドンに亡命してゐるルイ十六世の王弟が、正統の國王となる人であります。」

タレーランの意見には、陰武者ながら實力を持つてゐたイギリスが、眞先に賛成したので、折角アレキサンダーの指名したベルナドットが落第して、ブルボン王家が再興されることになつた。

ルイ十六世の嗣子が十七世となるべき資格を以て早世したので、新王は、ルイ十八世と稱せられることになつた。タレーランがその宰相となつたのは、言ふまでもない。

こゝで、フランスの元首が俄に英雄から凡人に代つたのである。ルイ十八世の力では、容易に解決し切れない幾多の難問題もあり、容易に抑制し切れない黨派の軋轢もあり、また容易に媾和し切れない利害の衝突もあつた。殊に、これまでナポレオンを崇拜してゐた人々の中には、現政府顛覆の陰謀を企てたり、エルバの孤島に渡つて、ナポレオンの再起を促したりする者が、日を経るに連れてますます多くなつて来る。

他の一方に於いては、聯合諸國はヴィエナに會議を開いて、ナポレオンが勝手に色を付けた地圖を塗り換へることにしたが、アレキサンダーがポーランド全部を自國に合併することを主張するに及んで忽ち紛議を生じ、その結果、イギリス、オーストリア、フランスの三國はこれに對抗するため、一八一五年の二月二日に、攻守同盟の密約を結び、若しロシアが強ひてポーランドを取らうといふなら

ば、三國はおの／＼十二萬の兵を出してこれを妨けることを約束するなど、そろ／＼内輪もめが始まつた。

この時、宛かも檻の中から大空を仰いで飛躍を試みんとする鷲の如きエルバの孤囚は、この内外の形勢を望み見て、武者振ひをせずにはゐられなかつたに違ひない。

エルバ島脱出

之より先きナポレオンは、

「昔予は貧書生として、僅二十法をポケットに入れてコルシカからフランスに來た。今や予は皇帝の尊稱と二百萬法の歳入とを持つて、フランスを去りエルバに行く。畢竟するに、何の損もないではないか。」

と近侍のたれかれをなだめつゝ、一八一四年の四月二十五日に、イギリス軍艦不屈號(Undaunted)に乗り込み、五月四日にエルバに上陸した。

この彈丸黒子の小島には、僅か一千二百人しか住民が居なかつたから、宛かも大驚が鶏籠にでも容られたやうなものであつた。それでも、母のレティチアと、妹のポーリーヌとが一緒に來たので、

ナポレオンは家庭的にさまで寂漠を感じなかつた。聯合國の監視者が附いて居たといふものの、エルバ島は、協約上ナポレオンの主權に屬する獨立の領地となつてゐたから、彼等は客分位の資格で、ナポレオンを拘束すべき何等の權能をも持つてゐなかつた。

ナポレオンが、エルバに來てから一年ばかりたつた時分に、前に述べた通り、フランスの國民が、ルイ十八世の無能に愛想をつかして、ナポレオンの再起を熱望してゐるのみならず、聯合國の歩調も、ロシアの暴横が基で、大分亂れ出したといふ情報も、頻々として來たのである。

そこで、ナポレオンは、いよくエルバ脱出の意を決し、一八一五年、二月二十六日の夜に、四百人の腹心と共に、フランスの運送船不變號 (Constant) に乗込み、六隻の小船に七百人の義勇兵を載せて、エルバを發し、三月一日に、サン・ジュアン灣からカンヌに上陸し、七日にグルノーブルを経て、二十日の夕方に、早くもパリに乘込んだ。

その途すがら、一行の進路を遮らうとする兵士でもあれば、ナポレオンは、すぐにその面前に立ちふさがつて、

「汝等の皇帝茲にあり。撃たんとするものは撃て、斬らんとする者は斬れ。」と大喝する。

ナポレオン

兵士等はその聲を聞くと、忽ち電氣にでも打たれたやうに、銃を伏せ劍を収めて、ナポレオンの身邊に集まり、

「皇帝萬歳！ Vive L'Empereur!」

を連呼して、忠義を誓ふのである。

ルイー十八世の命を受けて、ナポレオンの討伐に向つたネー元師の如きは、懐しい舊主の顔を見るや、その手を握つて無事の再會を歡び、自ら率ゐて來た軍隊と共にナポレオンの部下となり、矛を倒にしてその先鋒となつた。

ルイー十八世は、ナポレオンのパリに到着する數時間前に、テュイユリー宮を去つて、ベルギーのフランデルへ逃げてしまつた。

ナポレオンは、宮城に入つた翌日、取り敢へず、軍隊及び人民に左の諭告を發した。

「兵士よ、朕は遠島中、汝等の聲を聞けり。朕は、有ゆる障害と危険とを凌駕して、この都城に入り、再び汝等の總帥となれり。汝等來つて一齊に我に従へ！」

「フランス國民よ、朕は遠島中汝等の不平と希望とを聞けり。汝等は、汝等自身の選擇せる政府を要求せり。それが唯一の合法的政府なればなり。汝等は朕の永く眠れるを咎め、朕が、自己の安逸

を圖るために、國家の洪益を犠牲にせるを責めたり。朕は今有らゆる危険を冒し、海を越えて、朕と共に汝等にも屬する權利を回復せんが爲に、再び汝等の中に来れり。既往の出來事は、人力の能く制し得べき所にあらざりき、それに對して、讒誣の言議を逞しうするものありと雖も、吾等の國家に盡せし功績は、此等妄言の爲に没却せらるべきものにあらず。朕は今より全力を盡して國威の回復に當らんとす。」

尙ほ、ナポレオンは、別に詔勅を發し、聯合國が皇后及び皇太子を抑留して、自分との同棲を妨げ且つ約定の歳費を一錢も支拂はず、また刺客の危険を豫防せざりし等の事實を指摘して、大に列國の不義背信を詰責した。

最後の慘敗

ナポレオンがエルバからパリに乘込み、ルイー十八世が國外に逃出したといふ警報の傳はるや、曩に結ばれたイギリス、オーストリア兩國の對露攻守同盟の密約は、一轉して對佛攻守同盟の公約となり、ロシアも亦ポーランド併合の欲望をなけうつて、此の同盟に加はり、列國一齊にフランスに向けて兵を繰り出すことになつた。

最後の慘敗

この時、かくも一致結合した列國の相手として戦ふの無謀なことを覺つたナポレオンは、四月一日を以て列國の君主に親書を送り、自分の唯一の希望が、たゞ帝位を保つてヨーロッパの平和を維持するにある旨を通告して媾和を懇請した。これは、當時に於けるナポレオンの本心であつたに相違ないが、聯合國は、彼の復位と平和とは到底兩立しないものと認めて、彼の懇請を聽かなかつた。

是に於て、ナポレオンは、是非なく、居ながら敵軍の襲來を待つよりも、自ら進んで部分的に敵を撃破するに如かずと思ひ、當時ベルギーに駐屯してゐたプロシアとイギリスの混成軍を、露塊兩軍の到着以前に粉碎しようといふ作戰を定め、取敢へず兄のジョセフを攝政としてパリに残し、自ら十萬三千の兵を率ゐて、六月十二日にブリュクセルに向つた。

この時のフランス兵は、訓練に於いても、士氣に於いても、従前のそれよりも大分劣つてゐた。それに、名參謀長ベルテイエーは、僅か十日ばかり前に、二階の窓から落ちて變死し、騎兵の名將ミューラーも、砲兵の名將マルモンも敵方に走つてしまひ、たゞ猛勇を以て知られたネーがナポレオンの副將となり、第二流の戰術家スールが參謀長となつてゐたのである。

敵方には、沈勇なイギリスのウェリントンあり、老練なプロシアのプルュシエルあり、剛毅なオランダのオレンヂ公あり、その兵數も亦多く、ウェリントンの部下に十萬のイギリス、ベルギー、オランダ兵あり、プルュシエルの部下に十二萬のプロシア兵がゐる上に、遠からず、オーストリア兵とロシア兵とおのゝ十五萬、併せて三十萬の大軍が、フランスに攻込む手筈になつてゐたから、敵は餘裕綽々たる氣分で、成るべく持久戰で行かうとしてゐた。

之に反し、ナポレオンの方は、現兵僅か十二萬三千の外にたかゞ十二萬内外の後續部隊を豫期するだけであつたが、それをさへ待つてゐる暇もなく、急に敵を撃破らうとするのであるから、勢ひ無理な戰術を執らねばならなかつた。

ナポレオンは、十五日にベルギーの國境を越えるや、直にブリュクセルを乗取る目的で、十六日に早くも攻撃を開始した。カードル・ブラーに向つたネーは脆くもウェリントンに撃退されたが、翌十七日にナポレオンは、リグニーに於いて、プルュシエルを破つて軍を進めたので、ウェリントンは、ナポレオンに退路を絶たれることを恐れて、ヴァテルロー (Waterloo—英讀ウォーターロー) に退却し、要害の地點を擇んで陣を敷いた。

ナポレオンは、翌十八日の早朝、ウェリントンを追つて、ヴァテルローに迫つた。こゝで、最後の激戦が終日續けられたが、互に勝敗あつて決しないので、氣早なナポレオンは、午後七時三十分、自ら近衛隊を率ゐてウェリントンの本陣に突撃した。

ウエリントンには、ナポレオンが五十ヤードの近距離に近寄るを待ち、時分を計つて決死隊を放ち、一齋射撃を繰返させたので、こゝに兩軍入り亂れて銃剣の接戦となつた。

ナポレオンが自認してゐたやうに、個人としての實力に於て、フランス兵は、イギリス兵に劣つてゐた。互角の戦では、前者は後者にはかなはない。それに、此時には、ナポレオンが常に部下第一の名將といつたデュゼーも、第二の名將といつたランヌもゐなかつた。鬼神を欺くほどのナポレオンでも、獨力大敵に當るべくもあらず、得意の魔術も施すに由なくして、全軍終に總崩れとなつて敗北した。ナポレオンは、敵の追撃を受けて、幾度も死地に陥つたが、わづかに身を以て免れた。

英雄の末路

ナポレオンが、ヴァテルローからバリーに逃げ歸つたのが、六月二十一日であつた。その翌日に、議會は、ナポレオンの運命極まれりと見て、一時間以内に自ら位を退くにあらざれば、廢帝の布告を發するの外なき旨を決議した。

弟のルシアンは、ナポレオンに議會を解散して、自ら獨裁權を握り、兵を集めて、再擧を圖ることを勧めたが、ナポレオンは、かゝる高壓手段に出づるを好まず、飽くまで民意順應主義に殉じて

位を退くことに決した。

「フランス國民よ、朕が國家獨立の爲に戦を始めたは、全國民の一致に依り、成功を期すべき望を懷きたればなり。今や乃ち事志と違へり。……依て朕は自ら位を退き、皇太子をしてナポレオン二世の名の下にフランス皇帝たらしむ。爾等は協力して公安の維持に努め、獨立國民たる實を失ふ勿れ。」

一八一五年六月二十二日

ナポレオン

かくて、エルバ脱出後に於けるナポレオンの百日天下は、無殘な終焉を告げることになつた。

ナポレオンは、常に彼に同情を表してゐたアメリカに行かうとして、六月二十九日にバリーを發し、七月三日にロシユフォル港で、軍艦ラ・サールに乗り込み、脱出の機會を窺つてゐた。

さうかうする中に、聯合軍は、早くもバリーを占領し、七月八日に至り、イギリス代表ウエリントンの取計で、ルイ十八世を再びフランス國王に擧げたので、營にナポレオンが位を皇太子に譲らうとした希望が水泡に歸したのみならず、イギリス艦隊の監視がますます厳重になつて來たので、そのアメリカに行かうといふ企までも實行することができなくなつた。

そこで、ナポレオンは、次善の策として、イギリスに身を寄せることに決し、當時ロシュフォール港に碇泊してゐたベレロフォン號の艦長メートランドを訪ひ、

「予は敵國中最も寛大なるイギリス法律の保護に一身を託す。」
と告げて、イギリスへの護送を頼んだ。

これは、曩にブルボン家の亡命者がイギリスで歓迎されてゐた事實に照らし、ナポレオンも亦同じ好誼に浴することができると思つたからである。

やがて、ベレロフォン號は、ナポレオンとその随員とを乗せて、イギリスに向ひ、七月二十六日にブリマスに到着したが、ナポレオンは、意外にも上陸を許されないので、頗る失望してゐると、同月の三十一日に、海軍大將キース卿が、政府の命令を傳ふべく軍艦にやつて來た。

「我政府は、貴方をセント・ヘレナ島に送ることに決定しました。」

「予が身を貴國に投じたのは、貴國に最大の信頼を置いたからである。予は、ロンドン郊外に田地を購ひ、ミュイロン大佐 (Colonel Miron) として、餘生を送る積りである。」

ミュイロン大佐といふのは、イタリーのアルコラ戦で、ナポレオンの身代に戦死した人である。

「聯合國中には、貴方をルイー十八世に引渡し、その處分に任せよといふものさへある。その處分

とは、言ふまでもなく銃殺である。イギリスは、列國に對しても、貴方を國內にかくまつて置く譯にはゆきませぬ。」

實は、イギリスの首相リヴァープール卿自身が、ルイー十八世にナポレオンを銃殺させるのが、一番早い處分法だといつてゐたのである。ルイーは、寧ろフランス人の意向を憚つて、それを承知しなかつたのである。

「予は自ら進んでイギリス法律の保護を求めたのであるから、斷じて捕虜の取扱ひを受くべきはれがない。セント・ヘレナの位置と氣候は常人の到底耐へ得る所でない。予は寧ろ死刑の宣告を擇ぶ。かゝる措置は、後代のイギリス史上に、大汚點を印するものだ。」

「我等は政府の決意を傳へる外に、裁量の權能を持つて居らぬから、御不満の點は書面で御申出が願ひたい。」

ナポレオンは、書面を以て抗議を提出して見たが、何の効果もなかつた。

ナポレオンの随員等は、悲憤の涙を流し、

「飽くまで抵抗して殺されるか、然らざれば、火藥庫に火を放つて、軍艦諸共爆沈しよう。」

とまで騒ぎ出した。

セント・ヘンナ

ナポレオンは、常に、

「苦痛に耐ふるは、死ぬより以上の勇氣を要するものだ。」

といつてゐた。果然、彼は、屈辱を忍んで、天涯の絶島に流されることになつた。

彼は、八月七日に、イギリス軍艦ノーサムバーランドに移され、海路二箇月と六日を経て、十月十四日に、セント・ヘンナに護送された。

この島は、面積が四十七方哩、住民三千五百人、當時東印度會社の所有に屬し、最も近いアフリカ大陸から千二百哩を距て、ヨーロッパからは六千哩も離れてゐるから、逆も脱出の恐れのないのに、イギリスは、サー・ハドソン・ローをセント・ヘンナ總督の名義で、監視人とした。

サー・ハドソン・ローは、無智文盲な上に、偏狭粗暴で、愛嬌も同情も何もない冷血漢であつた。ナポレオンが初対面後、

「彼の目は、まるで良にかゝつた狼のそののやうだ。」

といつた所から察すれば、面相も亦餘程瘡癩であつたと見える。

ローは、總督たる權威を笠に着て、ナポレオンを囚徒扱ひにし、前帝たる待遇をしないのみか、單にボナバルト將軍 (General Bonaparte) と呼んだので、ナポレオンは、

「そんな名前の人がエジプト遠征時代にあつたやうだ。」

と空とほけ、
「御前は大陸に名を轟かした古兵であるから、定めし禮儀作法を辨へてゐるものと思つてゐたのに、豈圖らんや、御前の政府及び國民と同じやうに、御前も亦牢番として、わしに甚だしい侮辱を與へる。ボナバルト將軍としてわしを晩饗に招き、衆人満座の中で嘲笑の的とでもする氣であらう。わしを弑殺しにするよりも、なぜ男らしく一思ひに息の根を止めぬのか。」

と怒鳴りつけた。

ナポレオンは、それから死ぬ時まで、五年有半の謫居中、どんな事があつても、ローとの面會を承知しなかつた。

ナポレオンに附いて來たのは、式部長官ベルトラン伯夫妻、ナポレオンのコルシカ時代から親密にしてゐたモントロン伯夫妻、ナポレオンが我子のやうに可愛がつてゐたゲールゴー將軍、それから海軍武官出身で文筆に堪能であつたラ・カッセ侯爵、待醫オメーラなどで、いづれもナポレオンの崇拜

者ばかりであつた。就中ラ・カッゼの如きは、其日記中に、

「ナポレオンは、予の神なり。予は毫も我身の流竄を憾みとせず。何となれば、之が爲に、我身を人類中最も崇高なる人物の側近くに置くことを得たればなり。」

と書いてゐる。

ナポレオンは、これ等の人々を相手に、政治や文學や哲理や宗教などの雑談に耽つて、時を過ぎたのだ。尤も、日課としては、グールゴとラ・カッゼに自叙傳や追想録などを口授して筆記させ、且つその無数の演説集や、公文や私信などを整理させた。

グールゴとラ・カッゼは、おの／＼別に「ナポレオン言行録」と「セント・ヘレナ日記」とを書いた。又オメーラは「遠島中のナポレオン」を、モントロンは「ナポレオン流竄史」を銘々に編述した。

ナポレオンの一生が、正確に後世に傳はり、他の英雄のそれの如く、朦朧として霞を隔て、山容を望むが如き遺憾のないのは、この五年有半の間に、編纂され記述された文書や實録が、悉く保存され或は發表されたからである。

古今の英雄中で、ナポレオンほど、豊富に傳奇や評論などの資料を世間に提供したものはあるまい。その死後今日まで約百年、その間、彼に關する著書が、世界の各國で次から次へと際限なく出版され、それがまた新しい興味を以て萬人に讀まれる。かういふ現象は、今後いつまでも續くものと思はれる。

孤囚の餘憤

セント・ヘレナの謫居中、ナポレオンの歳費として給與された總額は僅か八千磅（約八萬圓）であつた。それでナポレオンの外、五十人の隸屬者を扶持するのであるから、随分苦しかったに違ひない。調度役のモントロンが、

「ロー總督が一人で一萬二千磅を取つてゐるのに、陛下の歳費が八千磅とは、餘りといへば酷過ぎる。これでは、ナポレオン皇帝どころか、ボナバルト將軍をして、も足りる筈がありません。」

といつて、勝手元不如意をたび／＼訴へるので、ナポレオンは、仕舞には、痼癢を起して、

「フランスから持つて來た食食用の銀器をみんな賣飛ばしてしまへ。」

と命じた。

「そんな事をしては、外聞が悪くはありますまいか。」

「我々の外聞に關はる譯がどこにある。イギリスが如何に我等を虐待してゐるか、天下に暴露されるまでだ。」

モントロンは、ナポレオンの命令に背く譯にもゆかず、従ふにも忍びなかつた。そこで銀器の一部を賣拂つて、残部を匿して置き、暫く粗末な食器を使ふことにした。すると、ナポレオンは、

「あゝ、器が悪いと食物も旨くないな。かう落ちぶれるとは思はなかつた。併し我々は子供の時はこんな食器で満足してゐたものだ。畢竟我々は成長した子供だと思へば済む。」

と、いかにも哀れな事をいつたので、翌晩には、モントロンが、自分の匿して置いた銀器を出して使はせた。ナポレオンは、それを見ると、いかにも嬉しきうな顔をして、

「なぜ残らず賣つてしまはなかつたのか。馬鹿め。」

とモントロンを叱り付け、更に一同を見廻して、

「わしには死ぬまで好運が付きまとつてゐるぞ。フランス人は、わしに皇帝たる黄金の冠をかぶらせてくれたし、イタリー人はわしにシャーレマンの用ゐた鐵の冠をかぶらせてくれたし、今又イギリス人は、むかしローマ人が救世主キリストの頭に載せたものと同で荆棘の冠をわしにかぶせてくれて、わしをして殉義者 (Martyr) たる名を成さしめたではないか。」

といひつゝ苦笑した。

さしも暴慢なロー總督も、この話を洩れ聞いて、多少感動したものと見え、ナポレオンの歳費を自分の年俸に等しい一萬二千磅に増すことにした。

一年に四千磅位殖えても、ナポレオンの生活状態は、さして樂にもならなかつたので、近侍の人、別けて女性のモントロン夫人などは、

「如何に有爲轉變の浮世とは申しながら、世界の帝王を脚下に踏まへた大君主が、囚徒に等しい今の御苦難、なんといふなさない事でせう。」

と涙をこぼすこともたび／＼あつた。

「一體、わしは、わしが成上つたやうな位に登るべく生れたのではなかつた。わしは、ボナバルト君であるても、ナポレオン皇帝であると同じやうに幸福であつたに相違ない。労働者でも、他の人々と同じやうに幸福なものだ。美食に飽きたわしはついぞ旨いと思つて物を食つたことがない。かういふ美食をすることのできない貧乏人は、スープと焼鳥だけで、舌鼓を打つであらう。畢竟何事も相對的なものだ。」

近侍の人々が、

「只今の御生活は、なにかにつけて、さぞ御不自由勝で御座いませう。」
といふと、ナポレオンは、

「さうでもない。若しわしが囚徒でなくて、ヨーロッパの何處かで暮してゐたら、この位の生活が
丁度恰好だ。エルバにゐた時には、金もたんと有つたし、智者や學者などの來訪者も多かつたか
ら、大變愉快であつた。わしはエルバ島の皇帝として幸福な餘生を送ることができたのだ。フラン
スの軍人や國民が、餘計なお節介に、わしを呼び返さなかつたらな。」
さすがの豪傑も、往事を追懐して、愚痴をこぼさずにはゐられなかつたと見える。

臨 終

生れてから一度も病氣に罹つたことのないナポレオンは、謫居後五年目から腹痛を訴へて床に就い
た。病症は、父の遺傳の胃癌であつた。

或日暴風俄に起り、天地もあはや覆へるかと思はれた時に、わがナポレオンは、この嵐のやうな騒
がしい一生をあとにして、
「我が遺骸は、セーヌ河の畔に埋めて、予の親愛するフランス國民の間に安置せよ。」

1939
1821
118

と言ひ遺して、夢のない静かな永い眠に落ちてしまつた。時に一八二二年（文政四年）五月五日。行
年五十一歳九箇月。セント・ヘレナに流されてから、五箇年六箇月と二十日の後である。

それから十九年の後に、ナポレオンの靈柩は、その遺言の通りセント・ヘレナからセーヌ河畔に移
され、一八四〇年十二月十五日に盛大な改葬式が行はれた。その壯嚴な墳墓には、今尚ほ日々内外帛
客の跡を絶たない。

著者も、世界漫遊の途次、大正十年即ち一九二一年の二月に、イギリスから大陸に渡り、先づベル
ギーのヴァテルローの古戦場を弔ひ、今はドイツ聯邦となつてゐるプロシア、バヴァリア、バーデン、
サクソニーを経てオーストリア、スイスを廻り、アルプス山をトンネルで通過してイタリーに出て、
それからフランスに往き、五月五日即ち丁度百年前に、ナポレオンの大往生を遂げた同月同日をトシ
て、セーヌ河畔の墳墓を詣でた。

墳墓は、廢兵院（Invalides）内の一隈に建られた堂宇の内、石窟の底にある。壯嚴といへば壯嚴だ
が、桃山御陵や日光廟などに慣れた目には、如何にも物足らぬやうに見えた。併しこの埋骨場に對す
る物足りない氣持の反動でもあらうか、彼の英魂が、この猫額大の小窟に蟄居せで、何時も天地の
間に磅礴し、到る所の人心に、不斷の追慕を起させ、無限の感化を與へつゝあるを思ひ起して、今更

のやうに敬虔の感に打たれざるを得なかつた。

ナポレオンが息を引取る時に、その枕元に居合せたモンτροンは、ナポレオンの口から、

「フランス——軍隊——ジョセフィーヌ || France—armée—Josephine」

といふ微かなきれゝの聲が聞えたといつてゐるが、ナポレオンが死ぬまで思を付けてゐた第一皇后ジョセフィーヌは、ナポレオンが最初の流竄地たるエルバに到着してから二十五日目の五月二十九日に咽喉炎に罹つてこの世を去つた。聯合軍がパリを占領して、ナポレオンの處分を議するに當り、イギリスが死刑を主張した時に、彼女は病氣を推して露帝アレキサンダーや普王フレデリック・ウイリアムなどを説き廻つて寛典を懇請した。それで、ナポレオンの死を救ふことができた代りに、自分の死を早めたのである。

第二皇后マリー・ルイズは、皇嗣と共にオーストリアで暮すことになつた。ナポレオンがエルバから脱出してフランスに乗り込んだ時に、二人を呼び寄せようとしたが、煥帝フランシス二世は、それを承諾しなかつた。彼女は、其後皇后太夫ナイベルヒ (Zuimper) 伯と結婚し、ナポレオンの歿後二十六年目の一八四七年十二月十七日に五十六歳で他界した。

ナポレオンが、全世界中、フランスに亞いで自分の最も愛するものは我が子なりといつた皇嗣ローマ王は、ナポレオンの死後十二年目の一八三二年七月二十二日に、僅か二十歳で夭折した。彼は、若し長生したならば、ナポレオン二世となる筈であつた。それを恐れて、オーストリアの宰相メッテルニッヒは、彼を毒害したのだといふ説がある。それは、ローマ王が健全に生長し、氣象も快活であつたのに、死ぬ間際になつて俄に虚弱多病となつたからである。毒害は事實でないとしても、メッテルニッヒは、さういふ嫌疑を受けさうな人物である。

ナポレオンの愛弟ルーイ (オランダ王) とジョセフィーヌの實子オルタンスとの間に出來た三男のシャルル・ルーイは、一八四八年十二月十日に第二共和國大統領となり、四年の後、一八五二年十二月一日にナポレオン三世として帝位に即き、それより十八年の後、むかし伯父の大ナポレオンが虐待したプロシアと戦つて、セダンに大敗し、更にイギリスに亡命して、一八七三年一月九日に易簣した。行年六十四歳。

ナポレオン三世が没落してから、フランスは、三たび共和國となつて今日に及んだのである。

英雄の功罪

ナポレオン

むかし、「力拔山氣蓋世」と歌つた楚の項羽は、垓下の一戦に敗れて、

「吾兵を起してより八歳、七十餘戦して未だ曾て敗れず。今卒に此に困しむ。これ天の我を亡ぼすなり。戦の罪に非ず。」

と述懐した。

ナポレオンが、百戦百勝の後、ライプツイヒに一敗し、ヴァテルローに再敗して、セント・ヘレナに悶死したのも、天命の然らしむる所で、戦の罪でなかつたかも知れない。併し、よし戦の罪でないとしても、天命の極まるまでには、人の罪も幾分か手傳つたに相違ない。

ナポレオン自身さへ、

「顧みれば、予は政略上三大失策を重ねた。第一は、スペインを放棄しないで、イギリスと戦を續けたことだ。次は、ポーランド回復に満足しないで、モスコまで深入したことだ。最後に、ハムブルヒ以下無用の邦土を惜んで、ドレスデンで聯合國と和を結ばなかつたことだ。」

といつて、必ずしもその失脚した所以を天命にのみ歸してゐない。

併し彼の失敗した原因には、尙ほこの三大失策よりも一層重大なものがある。それは、イギリスの富源を壅塞する目的で大陸制度を強制したことである。それが實際に於いて、イギリス封鎖でなくて却て大陸封鎖となり、イギリスよりも大陸諸國の方がヨリ以上に苦しむ結果となつたために、宜しく彼の射方たるべき大陸諸國が、自衛の必要から、一齊に彼を見棄て、敵方のイギリスに加擔するに至つたからだ。

更に根本に遡れば、彼の失脚した原因は、その狹隘な民意順應主義であるともいへる。彼の成功は彼自ら言へるが如く、時勢の赴く所に従ひ、多数民衆の意向に應じて進んだからである。彼がいつかナポレオン二世となるであらうと思つてゐたその子の爲に、書き遣した憲法草案の第一條に、

「主權 (Souverainete) は人民の中に在るものとす。」

と特筆したり、また彼をクロムウェルに比するものでもあれば、

「わしは、國民投票で三度も公選されたし、戦争でも、外國人を相手にしたゞけで、絶へて自國人を向に廻したことがないから、わしと彼とは、てんで比較にならない。」

といつたり、更に彼の退位を決議した議會を解散するがいと、弟のルシアンに勧められた時に、

「そんな高壓手段を執ることはできん。」

といひつゝ、自ら帝位を退いたりした諸種の事實から推察して見ても、ナポレオンが如何に民意を尊重したか判る。

英雄の功罪

その結果、後の頭は、常に新奇を好むフランス人の心を繋ぐには、次から次へと功績を現して行かねばならぬといふ觀念に支配されてゐた。彼が、無謀にも世界征服の詭道に邁進したのも、彼自身の欲望を充たす爲よりも、むしろフランス人の虚榮心を満足させてその離反を防ぐ目的であつた。

されば、ナポレオンを起したものがフランス人であつたやうに、彼を倒したのもまたフランス人であつた。彼は、畢竟するに、民意順應主義で成功し、同じ主義で失敗したのである。

惜いかな、彼は、民意に順應するを知つて、民意を指導するを知らなかつた。併しそれがまた彼をして暴君たらしめなかつた所以である。孔子のいはゆる「觀過斯知仁矣」といふものであらう。

凡そ人物の功罪を評定するには、單にその一身の成敗からばかり打算すべきものでなく、その世界の文化と人類の幸福とに與へた影響の輕重から推斷しなければならぬ。

よしんば、ナポレオンが、フランス皇帝とイタリー國王とだけで満足し、若しくは、その世界征服の目的を首尾よく達し得て、有終の美を濟したものと假定したところで、それが果して何時まで續いたであらうか。それは、彼の瞑目すると同時に、彼が途中で失脚した場合と寸分も違はない状態に立戻つたであらう。たゞ時間に僅かばかりの遅速があつたに過ぎまい。

「予の一生は燦爛たる帝冠の光と共に輝いたが、その輝きは、やがて薄らいで行つて、終に墳墓の裡に消えてしまふであらう。それが英雄の運命だ。アレキサンダー然り、シーザー然り、予もまた幾許もなくして世人に忘れられるであらう。」

ナポレオンは、かういつて、自分をアレキサンダーやシーザーなどと同列に置いてゐるが、尋常の英雄としては、如何にもその通りで、アレキサンダーやシーザーが生前に征服した天下は、その人物の没落と共に、舊態に復へつてしまつた。さながら、一時風に靡いた草木が風が去ると、忽ち元に戻つてしまふやうに。

併しわがナポレオンに至つては、その征服事業こそ、彼の失脚と共に、幾許もなく消滅したれ、彼が封建制度瓦解後の空虚に築上げた郡縣制度や、彼の創意に係る國家を主權の本體とする憲法政治や彼の編成した人權平等の原則を基準とする法典やは、フランスのみならず、他の列國にも、無窮の惠澤を與へ、その上に、自己の體驗を以て模範を示し、苟くも人間たる以上は、その修養次第で、研究次第で、努力次第で、どれほどまでの偉才や達識や機智や膽略や斷判力や統御術やを獲得し得るかを立證した點に於いて、ナポレオンは、單に千古の英雄たるに止まらず、眞に世界人類の大恩人といふべきである。

ベンジャミン・デイスレーリ

親に似ぬ子

丁度ナポレオンが得意の絶頂に達し、終身統領から皇帝となり、ノートル・ダム寺院で、皇后ジョセフィーヌと共に盛大な戴冠式を挙げてからまだ間もない一八〇四年十二月二十一日に、ロンドンの國王街 (King's Road) の一家内で、呱呱の聲を揚げた赤子がある。それが、本篇第二の主人公たる後のビーコンズフィールド卿ベンジャミン・デイスレーリ (Benjamin Disraeli) だ。
デイスレーリの原字は、Disraeli と綴つたもので、希伯來語で「イスレール = Israel の子」といふ意味である。イスレールは即ち猶太人の故國であるから、氏そのものがまさしく彼の血統を指示してゐる。

むかし猶太人は、幾度か異教國に征服され、迫害され、又は放逐された結果、四方に流浪して、そ

親に似ぬ子

の足を留めた所を家としたものであるが、どこの國に往つても、人非人のやうに、賤まれ、厭がられ、悪まれて、今も尚ほ社會的排斥と政治的迫害との的となつてゐる所の哀れな民族である。

デイスレーリの一家は、始めスペインに永住し、十五世紀の末にイタリアのヴェニスに移住したが、デイスレーリの祖父に當る人が、二男に生れたので、自分で別に一家を立てようとして、單身飄然、十八世紀の中葉頃、當時世界商業の中心となつてゐたイギリスのロンドンに出かけ、此處で刻苦數年の後、貿易商として相當の地歩を作り、同じ猶太人から妻を迎へ、幾人かの子ども出來て、何不^{そく}足なく暮してゐるが、長男のイサーク (Isaac) といふのが、どうしたものか、商家の相續人に生れながら、帳面を調べる代りに、書物を読んだり、算盤を撥く手間で、詩文を作つたり、商況視察にオランダやフランスに遣れば、商賣に縁の遠い文學の研究に耽つたりするといふ變りものであつた。兩親が代るゝ意見をして見ても、イサークは聴き入れようもしないのみか、

「商賣を勵まなければ、一家が立ち行かないといふのなら兎も角も、お父さんが、有り餘るほど資産を拵へたので、これからは樂に暮せるとおつしやつたことがあるではありませんか。私は何のため、自分の天分を枉けてまでも、この上金儲にあくせくせにやならんのです。」
とやりこめる。



リレーステの代時年壯



大宰相時代のレスリー



confidential

2. Whitehall Gardens.

S.W.

Dear Willie -

I hear from a
great lad, who tho'
belongs to the Whigs,
is our friend, that
there is some plotting
going on - You had
better

それに、その頃は丁度フランス改革時分なので、イサークは、パリにゐる間に、當時流行のヴェルテールやルッソーなどの自由主義にかぶれたものと見え、
 「私は自分で自由に處世の方向を定めます。商賣は、人間の賤業でありますから、それだけは、どうしてもやれませぬ。」
 と言ひ張るので、両親も、これでは到底家業を繼がせる見込がないものと諦めて、ロンドンの店舗を引拂ひ、財産を整理して、郊外の舊莊園でアレーデンハムといふ處へ退隱してしまつた。
 イサークは、同じ猶太人の娘でマリア・バッセヴィーといふ、賢いといふよりも、淑かな方な美人と結婚し、父から資産を分けて貰つて、ロンドンに家を構へ、好きな道として、奇書珍籍を集めて、心ゆくまで讀書慾を充たしたり、著名な詩伯文豪などと交際したりして、氣樂に世を送ることになつた。

彼の雜書を集めた「文藝奇觀 || Curiosities of Literature」は、かういふ類書の白眉であるといふ好評を博し、またその抒情詩は、一代の巨匠サー・ウォルター・スコットが意深く韻高しとまで賞揚したほどであるから、彼は、この時既に一廉の文學者として且つ無類の藏書家として、同人の間に推重されてゐた。

この天稟と修養とを兼ね備へた文學者の家庭に生れ、その圖書室で育つたのが、即ち我がベンジャミン・デイスレーリである。

雄辯の練習

後年、一代の文豪としても立派に一家を成すほどの學識を誇り、また政治家としても、外交家としても、殆ど専門家をしてその後へに瞠若たらしめるほどの才幹を現はしたデイスレーリは、他の有名な學者や政治家のやうに、イートン又はウインチェスターの高等學校を卒業したでもなく、勿論オクスフォード大學にもキヤムブリッジ大學にも這入つたのでもなかつた。彼は、十四歳まで、ブラックヒースの私塾で普通教育を受け、十五歳からウォルサムスタウ學校に移つたが、二年後に半途で退學し、十七歳から二十歳まで、スウェーデン法律事務所の見習書生となり、それから後は全然獨學で勉強したのである。

父は詩人を氣取るほどの悠長者であり、母も、どちらかといへば、賢母といふよりも慈母といふ方であつたので、デイスレーリは、すつかり甘やかされて、我儘氣隨に育つたが、生付いての學問好きで、毎日大抵十二時間位を讀書作文に費すのが常例となつてゐた。随つて、學校の成績は大抵優等

であつたが、喧嘩の方も亦第一番で、口が達者で、手が早い。日頃彼の血統を賤しみ、彼の學力を嫉んでゐた學生共が、彼に向つて、

「おい、お前の先祖は基督を磔刑にした大罪人だぞ。その天罰で、お前達は、いまだに世間の拔者にされてゐるんだ。」

などいふと、デイスレーリはすぐに口角泡を飛ばして饒舌り立てる。

「一體お前達は、基督をどこの人だと思つてゐる。おれ達と同じ猶太人ぢやアないか。おれ達は、神様から選ばれた人種である、聖書にぢやんと書いてあるぞ。」

「そんな事をいつたつて、お前には、極つた國が無いぢやないか。おれ達は、イギリスといふ立派な國を持つてゐるんだ。」

「お前達には、小さい一つの國しかあるまい。おれ達の國は、廣い大きい全世界だ。」

「それぢや、家なしを食だ。」

「なににい？ この野郎め。」

こゝで、デイスレーリは、早くも拳固を振り廻して、片つ端から毆り飛ばす。その死物狂の勢に怖れて、相手は毆られながら手向もしないで逃げ出すのである。

併し喧嘩に負けた學生等は、デイスレーリの亂暴に尾緒を附け、一致して校長に讒訴して止まなかつた。その結果、彼は十七歳で高等科二年を終つた時に、到頭退校處分を受けることになつた。彼は、學校にゐる間、普通教育の外、希臘や拉丁の故典を學び、別けてプラトーン、アリストートルの哲理とホーマー、ソフォクルスの文學との研究には、特別の趣味を持つてゐたが、殊に、デモスゼネスとシセロの雄辯に、すつかり心酔してしまひ、その演説集は、殆ど暗記するまでに、繰返して熟讀したものだ。

宛かもナポレオンが、アレキサンダーとシーザーに私淑して、世界征服を思ひ立つたやうに、デイスレーリは、デモスゼネスとシセロに私淑して、雄辯家となつて政治舞臺に雄飛しようといふ志を起したのである。

彼は、復案を練つて置いてから、獨りで圖書室の片隅に立ち、左右と前面の棚に並んでゐる數千卷の書籍を聴衆に見立て、堂々と演説を試み、自分の口から連發する名言妙語に、自分ながら感動して拍手喝采するといふ狂態を演じ、度々家人を驚かした。

猶太教から基督教へ

デイスレーリの父も母も猶太教には餘り執着してゐなかつた。彼等の猶太人たる色彩は、極めて薄かつたといふよりも、寧ろ全く褪め果て、ゐて、猶太教徒といはれるのをさへ厭がつた位である。

元來猶太教の信徒は、世界の主宰者たる萬能の一神が、いつか人の形した救世主 (Messiah) を下界に降し、神から特に選ばれた猶太人を中心として、全世界を宗教的にも政治的にも統一させるのであるといふことを、その根本の信仰としてゐたのである。

そこへ、今を距る一九二八年前に、猶太のベスレヘムといふ一小市の大工の家に生れた耶穌なるものが、三十歳の時から僅か三年の間、新説を唱へ廻り、天の神は、太陽が美醜を別たす普く照すが如く、一視同仁の慈父であつて、人は平等の同胞であるから、神を信じて正しい道を歩む者は、人種の差別と宗派の異同とを問はず、悉く天国へ這入れるものであると説いたのである。

この人類平等の新説は、猶太人だけを神に選ばれた特惠人種と認める信條には勿論、猶太人の脚下に世界を統一しようといふ觀念に、一大打撃を與へるものであるから、猶太教徒が、この新説の提唱者を如何に怨み且つ惡んだかは想像に餘りある。彼等は、耶穌が地上に神の王國を作らんとし、葉を奇貨とし、彼を誣いて、神を瀆し人を欺くのみならず、當時の羅馬帝國の羈絆を脱して、別に王國の復興を企てるものであるといつて、ローマの役人に訴へた。そこで、耶穌は、謀叛人として裁判

を受け、カルヴァリーの丘上で、人もあらうに、賤むべき二人の盗人と同列に、磔刑にされたのである。

されば、耶蘇基督（耶蘇は名で、基督は希臘語の救世主といふ意味）自身が、猶太人であり耶蘇の死後、その宗旨を廣めた最初の使徒も亦猶太人であつた。それ故に、猶太人と基督教徒との間に、人種的差別がある譯ではない。猶太人中にも基督教の信者があり、猶太以外の民族中にも猶太教の信者があつたのである。併し、今日では、猶太人は、大抵基督教を信奉し、歐米諸國人は大抵基督教に歸依するやうになつてゐる。

猶太人は、思ひ／＼に世界の各國に散在し、到る處に猶太教會を建て、神に選ばれた天惠人種として、特殊部落を作つてゐる。周囲の基督教徒からは、天惠人種どころか、むしろ天刑人種として排斥されるので、彼等は、申合せたやうに、恥も外聞も顧みず、金儲の一方に偏し、高利貸や、質屋や、寶石商や、銀行業などを專業とし、中には世界的金融家となつてゐるものも少くない。かのナポレオン戦争で、イギリスは八億磅（八十億圓）といふ大金を使つたが、その大部分を融通した者が、かの世にも名高いロスチャイルドである。この人は猶太人であるに拘らず、その功に依つてイギリス政府から男爵を授けられた。

さて、イタリーから始めてイギリスに移住したデイスレーリの祖父時代には、貿易業に従事してゐた關係から、主として猶太人と交際してゐたが、父のイサークが文學家となつてからは、金儲專業の猶太人とはおのづと疎遠になり、却て、基督教派の詩人や文士と交際するやうになつた。

丁度デイスレーリが十三になつた時に、祖父が亡くなつたので、父のイサークは、その妻と共に斷然猶太教と絶縁し、長女セーラー、長男ベンジャミン、次男ラルフ、三男ゼームスに基督教の洗禮を受けさせて、こゝに一家は猶太教から基督教に改宗することになつた。時に一八一七年七月三十一日。

辯護士と政治家

「僕は、他の學生よりも遙に獨創力と機智とに富んでゐるといふ一般的評判を受けたけれども、それと同時に、全校中一番亂暴で、高慢で、生意氣で、始末におえない悪戯者であるといはれてゐた。」

これは、デイスレーリが十七歳の時に、ウォルサムスタウ塾から放逐されるやうになつた事情を彼自ら物語つた一節である。

併し彼の學校生活は、たゞそれだけで説明し盡されるのではない。彼の自叙傳とも見るべき「ヴィ

ヴィアン・グレイ Vivian Grey]の中に、

「僕は、生れて始めてこんな争鬪的でさうして衝動的な境遇に出會はした。快樂、希望、悲哀、野心、肝智、魯鈍、勇敢、怯懦、濃厚、粗野、高尚、貪婪、雅量、富裕、貧窮、優美、毒惡、專横、苦痛、偽善、瞞着、眷愛、憎怨、情悍、無氣力など、形容すべき種々相が、僕の周圍で、響いたり、動いたり、働いたりする。それから軽い笑や、悲しい泣聲や、深刻な呪や、親切な人、放蕩者、暴漢などの遣口や、勇士、優男、伊達者などの仕業や、天稟の機智から、迷る流行語や、修養から湧き起る綺語麗句や、どれもこれも、耳目を聳動する奇々怪々なものばかりであつた。」

とあるから、彼は、學校に於いても、死學問ばかりでなく、活實驗をも満喫したものと見える。

凡そ親達が一番困るのは、退校處分を受けた青年の始末である。テイスレーの父は、その子の行末を考へた上、スウェーデンといふ友達が、近處で辯護士をしてゐたのを幸ひ、この人に頼んで、テイスレーを見習書生として、その事務所で働かせて貰ふことにした。スウェーデンの家に十五になる娘がゐるので、テイスレーが一本立の辯護士になつたならば、二人を夫婦にする内約もできてゐたが、それは兩人には知らせなかつた。

併しテイスレーは、この書生奉公に満足しなかつたものと見え、時々父に不平を訴へた。

「私は政治家になる積で、演説の稽古までやつて、折角義政壇上に起つ準備をしてゐるのです。大海に棲む魚は、小河では育ちません。個人間の訴訟事件などに出頭没頭して、一生を送る法律家になるのは、私の柄には合ひませんよ。」

「大海も小河も同じ水ぢやないか、鯨などは海でも河でも生きてゐる。お前はまさか鯨ではあるまい。第一政治家になるには金が要る。こんな身代がいくつ有つても、足りることぢやない。政治といふものは、貴族か富豪などの道樂仕事だ。それを真似ようとすることこそ、本當にお前の柄に合はないといふものだ。我々の身分としては、確定收入のある職業に就くのが本筋だ。」

「私は金を使はずに自分の實力だけで、立派な政治家になる積りです。」

「それは、お前だけの積で、世間には通らない。」

「併し人は銘々に特殊の天分を持つてゐます。お父さんだつて、先祖傳來の商賣を嫌つて文學家になつたぢやありませんか。私は辯護士が厭なんですよ。」

「よく考へて見なさへ。辯護士と政治家とはさうかけ離れてゐない。殊に政治家になるにしても、法律の知識が必要ぢやないか。將來辯護士から政治家に移ることは、わしが商賣人から文學家に轉じたほど不自然でもあるまい。」

かうまでいはれては、この上強ひて父の意見に逆ふ譯にもゆかないので、デイスレーリは、いやいやながら、見習書生として、スウェーデンの辯護士事務所に通ふことになつた。

二十歳の時に七萬圓の負債

何事にも熱心な質のデイスレーリは、三年の間誠實に辯護士事務所働いた。

彼は、筆が立つ上に辯舌も達者なところから、書生といふよりも秘書役として重寶がられるやうになり、事務所に出入する當世の名士や紳商など、もおのづと懇意になつて、内外の評判が大そう好くなつた。

彼は、演劇にも音楽にも趣味を持たないので、事務所と自宅の外には、何處にも行かず、家に居る時は、法律書は見向きもせず、政治や文學や歴史などに關する古今の書物にばかり讀み耽つてゐた。

餘り閑ち籠つて勉強ばかりしてゐたせいで、もあらうか、彼の健康がだん／＼悪くなつて來た。今なら神經衰弱とでもいふのであらう。父のイサークが心配し出して、暫く保養旅行をさせるために、彼をアントワープからラインの河流に沿うて、風景の好い處に連れ廻つた。

彼の病氣は間もなく全快したけれども、それと同時に、例の政治家たらんとする慾望が、またして

もむら／＼と頭を擡げ出して來た。

「私はもう辯護士事務所通ひは止めたいと思ひます。」

「今少しの辛抱ぢや。スウェーデン君の話ぢやア、お前は勉強家な上に、人並優れた腕前を持つてゐるから、やがて立派な辯護士になれさうだぞ。」

「立派な辯護士になるには、一廉の法律家とならねばなりません。さうなると、その方に非常な精力を傾けねばなりませんから、大政治家となる希望を棄てねばなりません。それに、私の體では大法官まで漕ぎ着ける前に、痛風にでも罹つて斃れるに相違ありません。」

「お前はよく大政治家といふが、一朝一夕に大政治家になれるものぢやない。」

「それだから、今からその方面に、力を向けようといふのです。屹度當代一流の大政治家になつて見せますよ。」

子を見ること親に如かずといふが、この親は、不敏にしてこの子を見る明を欠いでゐたと見え、

「おれは何の因果で、こんな誇大妄想狂を生んだのだらう。」

と嘆息しつゝ、政治運動には一文も金を出さなまいといふ堅い諒解の下に、その子の心に任せることにした。

デイスレーリの望は漸くかなつたもの、彼は、これから自分で、政治上の運動費を作る工面をしなければならなくなつた。

恰も好し、彼がスウェーデンの事務所にゐた時分に懇意になつたパウルスといふ資本家が、メキシコの鑛山事業に着手してゐたが、ロンドンで資金を募る爲に、デイスレーリの文才を南米投資の宣傳に利用する思惑で、相談を持ち掛けて來たので、漸く二十歳になつたばかりのデイスレーリは、旨い金儲の口が開けたものと思ひ込み、政治家になる資金を作る目的で、二つ返事で、山師の仲間に這入つてしまつた。

デイスレーリは、その得意の筆を揮つて、通商上ばかりでなく、政治上から見ても、大に南米開拓の緊要なる所以を説き立てた。初めは、雑誌を發行したが、間もなく日刊新聞をも經營して、盛んに南米熱を煽つた結果、投資申込者が續々殖えて來たので、いよいよ大規模の會社を創立するまでに、段取が運んだ。

寸善尺魔とでもいふのであらうか、折悪くしも、この時ロンドンに、經濟上の一大恐慌が起つた。それが爲に、鑛山事業は眞先に頓挫して、その主腦者たるパウルスは破産の宣告を受けることになつた。

その影響として、デイスレーリは、自分の責任に係る七千磅(七萬圓)の責務を負ふことになつた。

白面書生から一躍大文豪へ

丁年未滿の青年時代に、七萬圓といふ負債ができたのが始まりで、デイスレーリは、哀れにも、一生生涯借金に苦しめられべく運命づけられたることになつた。

政治運動にさへ一文も出さないうつぱり言ひ切つた彼の父が、なんで投機事業の失敗から生じた損失の始末に、目をくれる筈があらうぞ。デイスレーリの方でも、この失敗の事は父に匿くして、何も話さなかつた。

「金の無いほど苦しいことはない。借金は、失敗と犯罪の母であり、また一生の前途に浮かぶ希望の甘夢を破る悪鬼だ。」

彼は、口ではかういつてゐたもの、それは、常人の場合であつて、彼自身に取つては借金が却て奮發心を喚び起す好個の刺戟となつたのである。

投機事業に懲りたデイスレーリは、その天稟の才筆を元手に金を儲けようと考へた。その目的で彼

が最初に書いた小説が、あの名高い「ヴィヴィアン・グレー」である。これは、彼が、未來の成功をも取り入れて作り上げた自叙傳で、出版者コーバーンに、原稿料二百磅（二千圓）で賣渡したものである。

その荒筋は、政治家となることの無謀を戒めた父の意見を聞き入れずに、飄然政海に乗り出した一青年が、刻苦を重ね鍛錬を積んで、終に自ら一代の大政治家になることができたといふだけであるが、その経緯には、當時生存してゐた大家、名士、賢婦などの徳行と醜態とを織り込み、それに古今稀に見る斬新で奇抜な筆致を以て縦横に描き出したのである。それにまた、この小説が匿名で出版されたところから、一入世間の好奇心を唆り、新聞雑誌の評論家は、いづれも、それが大文豪か大政治家かの手になつた大文字として、競うて好評を書き立てた。

初版は一月もたぬ中に賣り切れてしまひ、再版の出るときに、出版者が、五百磅といふ前篇のそれよりも二倍以上の原稿料を出して、續篇の執筆を頼んだほどの盛況であつた。

デイスレーリは、行年僅か二十歳四箇月で、無名の寒措大から一躍して、見事に當世隨一の文豪となりましたのである。再版發行の時分に、漸くその著者が、大文豪でもなく大政治家でもなく、地位も経歴も何もない白

面の一青年であることが判つた。

イギリス人としては、かくの如き鬼才の出現したことを文運、奇瑞として又自國の誇とした。宜しく推稱し謳歌すべき筈なのに、どう血迷つたものか、是まで賞言讚辭の有りたけを列べた評論家が、著者の本名を知るに及んで、手の裏を覆へんやうに、その態度を一變し、デイスレーリを以て、似面非偉人を氣取る誇大妄想狂にあらざれば、世人を瞞着する狡兒猾奴なりとて、冷潮熱罵の有りたけを浴びせかけるやうになつた。

人情の輕薄は昔も今も變りがないとしても、苟くも文字を知つて物の道理を辨へてゐる筈の評論家の態度として、これはまた、なんとといふ理不盡！ なんとといふ卑劣！ なんとといふ醜陋！ さなきだに、整理の見込のない借金やくりくり、氣を腐らしてゐるところへ、この残忍無情な虐待に逢ひ、デイスレーリは、鬱憤の凝る所、積怨の極まる所、一たび氣を失へば、一週間も茫然として人事不省に陥るといふ奇病に罹つた。

好評と悪評

恰も好し、デイスレーリで懇意にしてゐた人々の中で、オーステンといふのが、夫婦で、フランス

からイタリーへの漫遊を思ひ立つてゐた。デイスレーリは、それを奇貨として、この人達と連れ立つて、保養旅行に出かけることにした。

三人は、急がぬ氣散じの旅のことゝて、ゆくゆく、パリーの花を賞で、ボルドーの酒に酔ひ、ヴェニスの月を眺め、ローマの古城に、過ぎし昔の榮華の夢の跡などを偲びつゝ、この年の夏を過ぎした。

デイスレーリの健康は、思の外早く回復した。

彼が旅から歸つて見ると、「ヴィヴィアン・グレー」がその頃またも羽が生へて飛ぶやうに賣れ出してゐた。

それはどういふ譯かといふに、最初に大文豪が大政治家かの匿名作であらうといふ想像から、一時大評判となつたものが、再版の出る頃に、それがデイスレーリの處女作であることが判つたので、今度は、二十歳になるかならない青二才の、取るにも足らぬ愚作だといふ悪評が、盛んに文壇を賑し始めた爲に、それが、却つて一般の好奇心を刺戟したものと見え、漸く下火になりかけた讀書界の人氣が再び煽揚げられたからである。

或種の著書が好評よりも悪評で賣れる例が少くない。

著者がロンドンに居た時分に、丁度前首相アスキス夫人の自叙傳が出版された。

それは、デイスレーリの小説「ヴィヴィアン・グレー」を實録で行つたもので、鋭利な、さうして奔放な筆鋒を振つて、グラットストーン以下、自分の良人を加へて六大宰相を始めとして、現代の家、名士、賢婦などに關する感想を赤裸々に書きなぐつた上に、外聞も無禮も一切おかまひなく、自分のきはどい戀物語から他人の大事な秘密までも、大膽に、無遠慮に、素破抜いたものである。

元來が氣取屋のイギリス人のことゝて、この著書を見るや、これは不道德 (Immoral) を通り越して亂倫 (Indecent) の域に入るものだから、紳士淑女の斷じて讀むべきものでないといふ評判がばつと立つた。アスキス夫人も、それが爲に、社交界の誰彼から爪弾されるやうになつた。

それが、どうだ、出版後三月もたない間に、五十萬部 (英國版二十五シリング、米國版九ドル) を賣り盡し、印税か原稿料か知らないが、アスキス夫人の手に十五萬磅 (百五十萬圓) ほど這入つたといふことだ。

デイスレーリ的小説が、好評時代よりも悪評時代に、出版物として成功したのも、同じ群衆心理に依るものであらう。

デイスレーリは、この案外な成功に勵まされて、それから二年の間に、「天國のイキシオン」(Ixion in

Heaven) 「地獄結婚」(The Infernal Marriage) 及び「ポパニラ」(Popania) を矢継早に出版した。

前者は、希臘の神話に託して、イギリス王ジョージ四世の宮庭とそれを圍繞する人物の正邪と功罪とを品臨したもの。中者は、数百万の労働者の膏血を搾り上げて驕奢淫逸に耽る貴族どもが、觀樂極まつて哀傷に滅びるといふ社會小説。後者は、野蠻の一孤島に住んでゐた一青年が、海岸に打上けられた難波船の中から、精神的に、社會的に、倫理的に、政治的に、人種を改善すべき秘法を暗示する虎の巻を發見し、やがてそれを携へてイギリスに渡り、大いに國民を警醒するといふ諷刺小説。いづれも着想の奇と行文の妙と、相俟つて、優に從來の老成大家をさへ壓倒したものである。

デイスレーリは、これで、如何なる非難攻撃の力でも寸毫も動かすことのできないほど、確乎不拔な文壇上の地歩を占めることになつたのである。

大東洋と小西洋

職業批評家が、デイスレーリを文壇の冒險狂として嘲殺しようとして試みたに拘らず、大方の識者は早くも彼の偉才を認め、競うてその著作を愛讀し出したので、一流の新聞社や雜誌社からも頻りに彼に寄稿を頼んで來る。従つて彼の収入もだん／＼増して來るものゝ、何分にも、斷えず債鬼に攻められる

ので、いくら働いても追つ付かない。その中、過度の思索と不斷の執筆との結果、またもや、彼の健康が傷められた。

そこで「若公爵」(The Young Duke) を書く約束で、原稿料五百磅を前借し、それを保養旅行の費用に充て、彼の姉セーラーと婚約のあつたメレディスと二人連で、一八三〇年の七月の初めに、ロンドンを出發し、今度は、スペインからギリシア、トルコ、パレスティン、エジプトなどの東洋方面に向つて漫遊の途に上つた。

この旅行は、實に彼の健康の回復に效果があつたのみならず、その世界的智見を廣めるに於て、どの位與つて力があつたか知れない。

「恰も夕陽將に没せんとする時に、コンスタンチノーブルの全市が目睫の間に展開して來た。鬱蒼たる茂林の上に、奇異な圓頂閣や尖塔などが數限りもなく簇出する光景。なんともかとも形容すべき言葉がない。」

といひ、

「ジェルサレムに行つた時に、予は、土人の服装して、オマー寺院の見物に出かけた。さうして禁苑の門内に這入らうとして、不思議な構造の殿堂や廻廊などに、驚異の眼を放つてゐるうちに、突

如として一群の迷信者に襲はれ、命からがら逃げ歸つた。」
といひ、

「エジプトでは、ナイル河を溯行すること七百哩、それから到る處の古跡を見舞つた。四千年の風霜を経來つて、今尚ほ儼存する金字塔や、凱旋門や、繪畫や、彫刻や、花崗石の神像及び王像や、天を衝くばかりの自然石を削つたオベリスクや、獅身女面のスフィンクスや、周圍三十呎、長さ之に應ふ一千本の圓柱を建て連ねた大伽藍や、それ等の偉觀を仰ぎ見ると、希臘や羅馬に於ける古物の貧弱にして且つ倭小なるを痛感せざるを得ない。予の目は眩み、予の心は慄いた。」

などといつてゐる。

彼は、東洋文明の淵源を探検して、無量の感慨に打たれたものと見える。

彼はこの旅行から歸つて、約束の「若公爵」の外に、第二の自叙傳「コンタリニ・フレミング」Contarini Fleming」四卷を書き上げた。

第一自叙傳の主人公（デイスレーリ自身）は、政治家で成功することになつてゐるが、第二自叙傳の主人公は、冒險事業に手を出して失敗し、政治家となつても思はしくゆかず、たま／＼戀すれば、思を遂げる前に相手の美人が死んでしまふといふ不幸續の後に、斷然氣を變へて、ホーマー、ダンテ

にも劣らない大詩人になつたといふ筋で、その間に、東洋諸國で見聞した奇事珍事を、おもしろおかしく書き綴つたものである。

この四卷の大著述は、一八三二年五月に出版された。當時評論を以て一家を成してゐたミルマンは、この小説を以て、バイロンの名著「チャイルド・ハロルド」に優るとも劣らぬ傑作なりと推稱し、ドイツの詩聖ゲーテ（Goethe）までが、特にその美文に對して賞讃の辭を寄せ、著者（デイスレーリ）も、その小説の主人公のやうに、詩人になつてはどうかと勧めた。

詩魂の幻滅

デイスレーリは、ミルマンやゲーテの激賞に勵まされて、今度は一番大詩人になつてやらうといふ野心を起し、「革命詩史」The Revolutionary Epic」といふ三萬行に上る長篇を作つた。彼は、曩に「ヴィヴィアン・グレー」の散文を出して、一夜の中に無名の書生から當代隨一の文豪に成り上つたやうに、この詩篇で、一躍ホーマーかダンテと肩を並べるほどの詩聖になる積りであつた。

彼は、先づ最初の三章だけを五十部ほど印刷し、知友を一堂に集めて、自らそれを讀み聞かせ、そ

の批評を求めたことにした。

この詩篇の筋は、頗る奇抜なものであつた。

封建制度の守護神と、共和主義の守護神とが、天帝の法廷に出頭し、おの／＼自家に有利な辯論を戦はして、裁決を仰ぐ。すると天帝は、兩者の是非を即断せずに、先づ超人的精力を有する一個の人間を下界に降し、その自由意志で決定させるといふ宣告を下す。茲に於て、天の精、地に降つて、この人間に移る。それが、即ちナポレオンである。ナポレオンは、その自由意志で共和主義に加擔する。そこで、封建制度の守護神が諸國の帝王を使喚して、ナポレオンに反對させる。ナポレオンは衆寡敵せずして終に斃れる。

かういふのが、この史詩の骨子である。

デイスレーリは、その身が既に大詩人になりました積りで、得意然として試讀會に現はれた。その風體を見れば、袖に襷のある黒天鵞絨の上衣を着け、バイロン式に廣いカラーを折り下げ、色糸縫箔のチョッキに太い金鎖を閃かし、紅花薔薇形の總を附けた半靴を穿き、長い髪を巧みに擧らし、七三に分けて肩に垂らし、香氣紛々たるハンカチーフを打振りつゝ、悠々として自作の詩を讀み始める。彼の聲は、或は高く或は低く、音樂的に響き渡り、美辭、麗語、奇言、警句、口を衝いて迸しる。

並居る人々は、たゞそれだけに感服したが、さて詩そのもの、價値を認める者は一人もなかつた。

第一捕へた題目がよくなかつた。革命といふことは、保守的なイギリス人の禁句であるのみか、ナポレオンの名を聞いても、慄毛を立てるものが多かつた。それもその筈で、イギリス人は、彼の爲に二十餘年間も脅かされたり、辱められたり、苦しめられたりした揚句の果に、八億磅といふ國債を背負されたからである。

事もあらうに、人もあらうに、禁句禁物となつてゐた革命とナポレオンとを麗々しく持出したのであるから、いくら名作でも、當時の知識階級に歓迎される筈がなかつた。

それに、デイスレーリは詩人たるべく餘りに世才に老け過ぎ且つ人情に通じ過ぎてゐた。隨つて、その詩は、理窟攻で、幽玄な含蓄に乏しかつた。

試讀會では、強ひて貶す者もなかつたが、無言の裏に、以心傳心で、デイスレーリは、詩人となるべき素質を備へてゐないといふことに、一致した様子であつた。

デイスレーリが、それを看破ることのできぬほど、遲鈍でなかつたことは、言ふまでもない。

軍用金と後援者

到底大詩人になれる見込がないと観念したデイスレーリは、曾て親爺の前で屹度大政治家になつて見せまるといふ大口を利いた面目上、今度は、萬難を排しても、宿志を遂げねばならぬと、こゝで最後の決心を固めた。

それからといふものは、苟くも當世に名ある政治家とあれば、我から進んで交際を求め、又苟くも機會だにあれば、得意の辯舌を振つて自己廣告に努め出した。

彼が、一八三二年の五月二十四日附で、姉のセーラーに送つた手紙の中に、

「私は昨夜エリオット卿の晩餐に招かれ、ピールの隣の席に着きました。ピールは實に偉人です。

みんな彼を畏敬してゐました。彼は、横柄で附合ひにくい人物だとばかり思つてゐたところ、昨夜は、殊の外謙遜の態度で、少しも高ぶる容子が見えませんでした。私は彼に向つて、貴君は前大臣でせうが、私は新進政治家ですぞ、と言つてやりました。」

とある。

ピールといふのは、保守黨の首領サー・ロバート・ピール (Sir Robert Peel) のことで、リヴァプール内閣の愛蘭大臣となり、又ウエリントン内閣の内務大臣ともなり、この時から一寸後に總理大臣になつた人である。

それから、デイスレーリが議會を傍聴しての感想を同じ姉に書き送つた中に、

「私は今日議會に出かけて、マコーレーの大演説を聴きました。シールのも、グラントのも、聴きました。マコーレーには感服しました。これは、お互の仲だけの話ですが、私の力で彼等の總てを凌駕することができると思ひます。私には、一度議會に這入れば、どんな問題でも通過して見せるといふ自信があります。」

とある。

マコーレー (Macaulay) は、政治家といふよりも、歴史家として有名な人、シール (Sheil) も、グラント (Grant) も、當時一流の雄辯家である。デイスレーリは、この時、既に此等の先輩にさへ、一歩も譲らないといふ抱負を持つてゐたものと見える。

さて、どうして議會に這入ることができようか。それは生やさしい問題ではない。交際社會は、文壇の流行兒といふだけで、我から求めないでも、歓迎してくれるが、議會は、如何に名聲の高い人でも、自發的に招かない。先づこの方から選挙場裡に打つて出て、力づくで、中原の鹿を逐はねばならない。それには、第一軍用金要る、第二に有力者の推挽要る。デイスレーリは、まだどちらも持つてゐなかつた。

併し、彼が文壇に持て囃されるやうになつてからは、金を貸さうといふ人が殖えて來た。それは大抵高利貸であつたが、彼は先の事などは深くも考へずに、どしどし借りることにした。又幸な事には、彼の後援者として、ルイス (Lewis) といふ有名な金持議員が乗出して來た。この人の妻君がまた大のデイスレーリ最良であつた。

ルイス夫人は、小造な愛嬌者で、口の達者なことにいつたら、無類飛切り、快活を通り越して騒々しい位であつた。デイスレーリは、演壇で雄辯を振つたに拘らず、平生は、至つて内氣で無口な方であつた。

「妾は静かな陰氣な方が好きですわ。」

「至極御尤も。快活同志では衝突しますからね。」

「あら、随分ひどいことを……」

デイスレーリとルイス夫人とは、こんな言葉を交すほどまでに、心安くなつた。

雄辯と落選

一八三二年の八月十五日に、父の住所から程遠からぬハイ・ワイコムで補缺選挙が行はれることに

なつた。デイスレーリは、ルイス夫妻の後援の下に、いよく候補者に立つことになつた。これが彼の政戦に乗り出す初陣であつた。時に歳二十八。

この年の末に、選挙法が改正されて、代議士の定数(六百五十八人)は變らなかつたが、選挙権者が、從來の四十三萬五千人から六十五萬六千人に増加することになつた。(當時の人口二千五百万人)。

この補缺選挙は、この改正前の最後のもので、ハイ・ワイコムの有権者は僅四百人しかなかつた。デイスレーリは、その噴々たる文名と、自分免許の雄辯と、無理算段の借金とで、中立を標榜して當選を争はうとしたのである。

彼の競争者は、現首相グレイ卿の次男で、而も陸軍大佐の肩書附、その上保守黨の公認候補といふ餘程手硬い強敵であつた。

グレイ大佐は、早くから選挙運動に着手し、六月九日に、四頭立の馬車で、音楽隊と多数の雇壯士とに取り捲かれつゝ、堂々とハイ・ワイコムに乗り込み、廣場に集まつた群集に對し、馬車の上から政見發表の演説をやつた。それは頗る簡單で、聴衆に格別の感動を與へなかつた。

デイスレーリも同じ日に、縁起を辿つて擇んだ赤獅子旅館 (Red Lion Hotel) といふのに陣取り、その女關から政見發表の演説をやる用意をしてゐた。

やがて數百の群衆は、玄關の前にひし／＼と押し寄せて、候補者の出るのを、今や遅しと待ち受けた。

定刻になると、デイスレーリは例の奇怪な劇的服装で、しづ／＼と現はれる。

筐襟附の白シャツの上に、淡紅色の縁のある黒天鵞絨の上衣を着け、赤色チヨッキに金鎖をぶら下げ、手を動かせば、幅廣の金指輪が二つも明星のやうに閃き渡る。

それに蒼白い顔の色、頭から左右に分かれ、耳を掩うて肩に垂れる長い髪、薄黒く輝く眼、猶太人特有の弓形に秀でた鼻、一文字に引締つた口、いづれも群衆の興味をそゝるものばかり。

彼は、霎時聽衆を見廻しつゝ、宛かも立役者が始めて舞臺に出たやうな思入をして、咳一咳する。

「諸君、吾輩は保守黨でもなくまた自由黨でもない。一切の黨派心を棄て、一意専心、國家本位で邁進するものである。諸君、或は問はむ、然らば汝の政治主義は如何と。それは唯イギリスの一語に盡きる。イギリスの民福を増進する。イギリスの國威を發揚する。それが吾輩の主義である。吾輩の目的である。吾輩の總てである。」

滔々として説き去り説き來ること、一時間と二十五分。聽衆は悉くその雄辯に酔はされ、婦人中には、感極まつた泣き出す者さへある。

彼は、後に人に語つて、

「予の一生中で、この時ほど多くの射方を作り、且つ深く敵を感化したことはない。」

と誇つたが、同じ旅館の二階で聽いてゐた反對候補者グレイ大佐さへも、

「予は未だ曾てあれほどの美辭麗句を耳にしたことがない。」

と嘆稱したほどであつた。

それが若し今日のやうな普通選舉であつたならば、勝利の榮冠は、必ず彼の頭上に落ち來つたに相違ないが、何分選舉權者の數僅かに四百人、その多數が政府黨に屬してゐたことゝて、演説の成功は無残にも、落選の憂目を以て酬られることになつた。

落選と創作

補缺選舉が濟んでから半年もたゝないうちに、總選舉が行はれることになつた。

今度は、ハイ・ワイコムから二名の定員が選出されるのであるから、前代議士グレイ大佐とデイスレーリとだけならば、二人とも當選するに極まつてゐた。ところが、兩人の外に、新に土地の領主カリンントン卿の嗣子ロバートが加はつた。そこで、デイスレーリは、その孰れかの一人と當選を争はね

ばならなくなつた。

彼は、選挙期日から二箇月前の十月十九日に、「哨兵」(Sentinel) といふ週刊雑誌を臨時に發行し、それに自分の政見を連載して、有権者に無料で配布し始めた。

彼は、依然として中立を標榜して、既成政黨を非難した。

「保守黨といひ、自由黨といひ、いづれも政治的狂言で、良民を誘惑するものに過ぎない。予は、超然としてこの忌むべき黨派の外に立ち、舉國一致の眞政黨を作らうとするものである。兩黨徒らに政權爭奪を事とせんか、内訌絶ゆる時なく、國民の幸福得て望むべからず。予は下層民衆の現狀を改善すべき政策を執らぬやうな政府には、黨派の如何を問はず悉く反對する。予は、獨立獨歩者として、諸君の推舉を要求する者である。」

この意見は、理想として申分がない。日本にも、かういふ理想を待つてゐる政治家が随分ある。併し既成政黨を徹底的に打破して新政黨を作り出すことは、言ふべくして行はれるものでない。よしんば、それが出来るとしても、新政黨そのものが、間もなく既成政黨と同じものになつてしまふに極まつてゐる。所詮、既成政黨を改善して、黨派本位の私黨から、國家本位の公黨に立直す外はない。殊に、選挙場裡に於て、獨立候補として、他の強かな政黨の公認候補に打勝つことは、不可能でない

としても、至難事たるを免れない。

果せる哉、デイスレーリは、黨派關係の薄い前首相ウエリントン(ウァテルローに於てナボレオンを倒した勇將)や、大法官リントン・バルワーや、愛蘭の名士オコンネルなどの聲援を受けたに拘らず、十二月二十日に於ける開票の結果は、ロバート一七九、グレー大

佐一四〇、デイスレーリ一九で、又しても落選の憂目を見ることになつた。それから三年の間、彼は、ブレードンハムの父の家に立籠つて、専ら筆硯に親み、「アルロイ奇譚」

The Wonderful Story of Alroy」(「ヘンリエッタ・テンブル」Henrietta Temple)「ヴェネチア」Venetia」などを次から次と、書上げた。その第一は、彼の祖國イスレールの古い記録から採つた驚くべき怪談。第二は、あの名高い詩人テニソンまでが、傑作の銘を打つたほどの純然たる戀愛小説。第三は、詩聖バイロンとシェリーをモデルとして描いたもの、その中に、自作の詩をバイロンやシェリーの名作として入れたので、批評家の中には、デイスレーリの虚榮心を嘲つたものもあつたが、併しこの時分では、何人もデイスレーリがスコットやサケリーや、ディッケンズ等の大家に伍して少しも遜色のないことを認めるやうになつた。随つて、彼の原稿料までが、何百磅(何千圓)から何千磅(何萬圓)に桁が上つた。

彼は、小説を書いて金を儲けると、直にブレードンハムからロンドンに出て来て、借金の整理を付したり、交際社界に出入したりして、政界雄飛の準備を怠らなかつた。

大宰相になりたい

「私は大宰相になる積りです。I Want to be Prime Minister.」

これは、デイスレーリが、三十歳の時に、メルボーン卿に語つた有名な警句である。

X

X

X

デイスレーリは、ハイ・ワイコムで二回迄も落選してから、二年後の一八三四年の二月十日に、當時政界の女傑といはれてゐたノートン (Notton) 夫人の夜會に招かれた際、不圖グレイ内閣の内務大臣で、この時から五箇月後に總理大臣となつたメルボーン卿 (Lord Melbourne) と落ち合つた。その時彼は例の長舌舌を振つて縦横に時事を論議した。メルボーンは、彼の言葉の終るを待つて、「さて、お若いの！ 君は一體なんになりたいと望んでをられるか。事と品に依つたら、不肖ながら、一臂の力を添へようではないか。」と親切に尋ねた。

すると、デイスレーリは、即座に、

「私は大宰相になる積りです。」

と答へたのである。

さすが老成のメルボーンも、この意外な大言に、鳥渡度膽を抜かれた容子であつた。

ノートン夫人は、その場をとりなすつもりで、

「棒ほど思つて針ほど叶ふといひますから、望は、なるだけ大きい方がいゝでせう。」

と口を入れた。

デイスレーリは、ノートン夫人を顧みて、

「私のは空想ぢやありませんよ。」

と、如何にも自信ありけに、大真面目で言斷つた。

併し、この時には、よしんば、それが、彼の本心から出た言葉にもせよ、そんな大それた望が、デイスレーリの一生中に實現しようとは、メルボーン卿にせよ、ノートン夫人にせよ、夢にだも、思ひ及ばなかつたに相違ない。

日本にも、著者の知つてゐる範圍で、デイスレーリを氣取る政治家が少くとも二人ほどある。その

一人は尾崎行雄、他の一人は松本君平。

二人とも小説こそ書かないが、早くから讀書を好んで、雄辯と健筆とを誇つたところや、三十歳前後の時には、頭髮に香油を塗つて、綺麗に七分三分に分け、圖抜けて長いフロック・コートに模様附のチヨッキを着けたり、又は黒紋附に純白の太紐を胸高に結んだりして、ことさらに人目を惹くことに、腐心したところや、清廉で併し放埒で、借金に借金を重ね、今なほ時たま歳費の差押を食つたりしてゐるところなどは、どこまでもデイスレーリ式を發揮してゐるやうだ。

尾崎は、曾て郵便報知新聞にゐた時に、社説を書くのが手間取つて、編輯係から催促された時に、

「おれは未來の大臣だ。一字一句、苟くも書けるものぢやない。」
と威張つたものだ。

松本も、アメリカ留學から歸つて間もなく、竹越三郎の紹介で、當時の外相陸奥宗光に逢つた時に、

「私は他日大臣にならうと思つてゐますが、それには、役人から鰻上りに行く方が得策か、或は代議士となつて一足飛に内閣に這入る方が捷徑か、教へて下さい。」
とやつて、さしも豪邁な陸奥を煙に捲いたことがあつた。

尾崎は、文部大臣になり司法大臣ともなつた。松本も近頃參與官まで漕ぎ付けたから、今一息で大臣になれぬこともあるまい。

惜い哉、二人の慾望は大臣に止まつて、大宰相までには及ばなかつた。尤も、それは、彼等が、金持の後家に惚れられたデイスレーリの艶福にあやかることができなかつたからで、もあらうか。

文壇の才子政界の勇士

一八三五年の四月にトーントン選出議員ラボーチアが、造幣局長に任命されたので、資格の變動する毎に、選舉民の意思を問ふといふ、從來の慣例に従ひ、同人は、一旦議員を辭し、改めて再選を求めることになつた。

デイスレーリは、この人と競争するために、三たび候補に立つた。

イギリスでは、同じ黨派の内閣の下で、官職に就いた議員は、一層信認に價するものとして、形式的に辭職しても、必ず再選されるのが、恒例となつてゐた。随つて、何人がそれと競争したとて、進も勝てる見込がないのである。デイスレーリは、さういふ事情を知つてはるが、萬一を僥倖する冒險的氣分と、世間に名を賣つて、自己の存在を認めさせる目的とで、無理から打つて出たのであ

る。

當選の僥倖は、まんと外れたが、議員候補者としてのみならず、一代の勇士として、イギリス全國にその名を轟かす好運が、突如として湧いて来た。その経緯はかうである。

「デイスレーリは、その政見發表の演説で、現政府は放火人 (Incendiary) ともいふべきオコンネルの血腥い手を握るほど墮落してゐると放言した。」

といふ記事が、モーニング・クロニクル紙上に掲げられた。

事實、デイスレーリは、煽動家 (Agitator) といつただけで、放火人といふ言葉は使はなかつたが、新聞記者の筆が立ち過ぎて、さういふ強烈な文字が用ゐられたのであつた。

さなきだに、アイリッシュ式癡猛性を帯びて、毒舌と來たら、誰にも引けを取らない、といふほどのオコンネルが、この新聞記事を見たからたまらない。彼は、早速ダブリン市で復讐演説をやつた。

「デイスレーリは、その名の示すが如く、猶太人だ、猶太人は、神から選ばれた特惠人種だなど、誇るけれども、その中には悪い奴がある。キリストと一緒に磔刑になつた盗賊があるたではないか。吾輩は其奴の名が、たしかデイスレーリであつたと思つてゐる。さうだ、その後裔が今のデイスレーリだ。」

火付と泥棒、どちらも随分あくどい悪口雑言ではないか。

この時分では、言論を超越すれば、決闘で勝負を付けるのが、男兒の意氣地となつてゐた。

デイスレーリは、直に公開状を新聞に投寄し、その結末に、

「この上は、決闘場にて見参せん。我は汝がベンジャミン・デイスレーリに加へた侮辱を記憶し且つ後悔するまでに、汝を懲らしめくれん。期日を定めて來れ。」

と挑んだ。

この公開状が發表された翌日 (五月九日)、一隊の警官がデイスレーリの寓居に臨み、一週間の禁足を命じ、背く時は五百磅の罰金を課する旨を言渡した。

併しオコンネルは、以前に一度決闘をやつて相手を殺したことがあるので、生涯決闘を止めることを神に誓つたといふ理由で、デイスレーリの挑戦に應じなかつた。そこで、實際何事もなくて済んだが、デイスレーリは、當事剛膽無雙といはれた愛蘭の名士を挑み、而もそれを屈伏したといふ評判が立つたので、これまで文壇の輕薄才子とばかり思はれてゐたデイスレーリが、俄かに氣骨稜々たる政界の猛者と仰がれるやうになつた。

四回目で漸く當選

一八三七年六月二十日に、イギリス國王ウイリアム四世が崩御して、その姪に當る繼嗣ヴィクトリアが女王として位に即いた。

イギリスの憲法では、君主の崩御と共に、議會を解散し、新君主の下に立つ内閣の信任を國民に問ふのが例となつてゐる。

デイスレーリが、その總選舉に打つて出たのは、言ふまでもない。

彼は、既に三回も落選してゐる上に、今度又も同じ運命に逢へば、それから五七年間は、議會に出る機會を逸することになるかも知れなかつた。といふのは、議會に多數黨員を持つてゐる内閣の壽命は、大抵五年間乃至七年間續くのが、不文法の例になつてゐて、その間滅多に解散がないからだ。

されば、彼としては、今度といふ今度こそ、是が非でも當選しなければならぬ。それには、何は兎もあれ、萬全の選舉區を擇ぶのが肝要である。

恰も好し、彼の人物に惚込んだルーイス夫妻の好意で、その勢力範圍ともいふべき處女石(Maidstone)といふ所から、ルーイスと連名で、保守黨の公認候補となることができたので、彼は、その

お蔭で、苦もなく當選することができた。

デイスレーリの當選後間もなく、ルーイス夫人が、その實兄に送つた手紙の中に、
「妾の豫言を是非記憶して置いて下さい。それは、デイスレーリ氏が、數年後に、必ず現代に於ける最も偉大な政治家の一人となるといふことであります。今政界に時めくリンダースト及びチャンドース兩卿の聲援と、妾の良人の議會に於ける後見とでも、かの人は、屹度成功するに違ひありません。右等の人々は、デイスレーリ氏を妾の御抱議員だなど、申してをります。」

とある。

實際、ルーイス夫人は、デイスレーリが、當選する前は勿論、議員となつてから彼も、彼にどの位力瘤を入れたか知れなかつた。

デイスレーリが、中立態度を放棄して、保守黨に這入ることになつたのも、ルーイス夫人の肝入であつた。

彼は、飽まで國家本位を旨とし、黨派の情實に拘泥せず、自黨の首領と雖も、その主義に背く場合には、遠慮なく非難するし、馬鹿正直なほど主義主張に忠實であつた。それが、非常に彼の出世の妨となつたけれども、長い間には、正義の人として、一般國民から、深甚な信用を受けるやうにな

つた。それといふのも、ルース夫人が、陰になり、日向になつて彼を援けたからである。併し、奇しき運命の手が、この時から僅か二年後に、デイスレーリとルース夫人とを夫婦關係にまで導いて行くであらうとは、他人は勿論、當人同志さへ、神ならぬ身の知る由もなかつた。一代の名士で、有夫の婦人と戀に落ちた例が、デイスレーリの前に、海戦の名將ネルソンあり、その後、政界の巨星バーネルがある。ネルソンは、ナイル河口にナポレオン艦隊を撃破しての歸りがけ、ネーブルスに立寄つて、ハミルトン大使の夫人と情を通じてから、トラファルガーで戦死するまで、醜關係を續けた。バーネルは、オーシー大佐の夫人と關係し、大佐がそれと覺つて離別した夫人と、厚顔にも正式に結婚したが、その翌年に病死した。デイスレーリとルース夫人との關係は、前記兩人の所行に較べれば、實に雲泥の差がある。それは後に語ることにする。

處女演説の失敗

始めて議員になつたデイスレーリは、その年の十二月七日に開かれた議會で、いよいよ處女演説を試みることになつた。

彼の服装は、例に依つて頗る奇抜なもので、長い暗綠色のフロック・コートに、極月の冬の日に

白チヨッキを着け、それに太い金鎖を閃かし、聲を張り上げ、手を振つて、こゝぞとばかり、滔々と懸河の雄辯を振つて、自由黨内閣の施政方針を攻撃し始めた。

新議員の議會に於ける處女演説は、概して形式的なものであり、また聴く方でも、特別の禮讓を以てそれを迎へるのが、例となつてゐる。

併しデイスレーリは、議員になる前から、一部の人人々から、一種の冒險家と思はれてゐた。彼は、當初あらゆる政黨の腐敗を痛罵して、自ら中立を標榜しながら、いつの間にもやら保守黨に加入してしまひ、今や新議員として、慇懃に挨拶演説でもすることか、彼が曩に決闘を挑んで辱しめたオコンネルが演説したすぐあとで、意氣天を衝くやうな態度で、滔々と而も長々しくオコンネル攻撃を兼ねた政府攻撃をやり出したのである。

そこで、オコンネルの部下に屬する議員は勿論、政府黨議員は、始めの中は、空咳をしたり、唸聲を出したり、高笑をしたりして、軽い妨害氣分を示してゐたが、デイスレーリの舌鋒の鋭さが、段々加はつて行くに連れて、野次を飛ばし、漫罵を放ち、喧騒を續け、議長の注意も制止も何の効なく、彼は終に一言も發することができないやうになつた。

デイスレーリは、霎時口を閉ぢ目を怒らして、屹と議場を見廻しつゝ、やがて一際聲を張り上げ、

「議長、本員はこゝで發言を中止します。併し今後間もなく、諸君が吾輩の演説を謹聴する時が屹と來ますぞ。」

と言放つて席に着いた。(イギリスの議會には、特別の演壇なく、銘々その自席で發言することになつてゐる)。

デイスレーリの後援者の一人チャンドス卿が、デイスレーリの肩を叩いて、

「處女演説としては上出来だ。」

と慰めた時に、デイスレーリは、いかにも落膽した容子で、

「いや、失敗です。」

と答へた。

保守黨の首領ピールは、彼に向ひ、

「我黨員の中で、君の演説を失敗と見るものもあるが、吾輩は全然それと反對の見解を持つてゐる。」

といつて、彼を勵ました。

當時議會第一の雄辯家といはれてゐた愛蘭黨の領袖シールは、わざ／＼デイスレーリに近寄つて、

「君の演説は、若し妨害がなかつたら、最善の處女演説であつたに違ひない。あの妨害にも拘らず君は卓越した辯舌と無盡藏な語源と不屈の膽力とを持つてゐることを議場で立證した。今後もしばしば發言して、君が臆病者でないことを知らせてやるがい。併し演説は短い方がいい。常に冷靜で沈着な態度を執るがい。推理は八分目位に止めるがい。餘り論究が過ぎると徒らに機智を弄ぶやうに思はれるからだ。細目の事項は、飽まで正確を旨とし、數字や、時日や、統計などを列擧して、聽く人を驚かしてやるがい。さうすると、議場は必ず君の識見と雄辯とに推服し、却て君の發言を促すやうになり、常に君の意見に耳を傾けるやうになり、やがて君を重寶がるやうになるに違ひない。」

と親切に教へてくれた。

デイスレーリは、心からこの有益な忠告に感佩し、生涯それを服膺したといふことだ。

この日から十日ばかりして、版權法案が議題に上つた時に、デイスレーリは、再び起つて演説を試みた。今度は、冷靜な態度を以て、簡短明瞭に、實際に適應する修正意見を述べたので、全院擧つて喝采し、提案者タルフォードの如きは、

「本員は、現代文壇を飾る巨星の一人デイスレーリ君の卓見に敬服する。」

といつて、直に彼の修正意見を採用した。

それで、彼はすつかり前日の失敗を取り返してしまつた。

政略結婚乎同情結婚乎

デイスレーリが議員候補者として三度までも引續いて落選し、四度目に苦もなく當選することが出来たのは、彼の熱誠な後援者ルイス夫妻の斡旋が、與つて大に力あつたからである。然るに、この恩人のルイスは、不幸にも、その翌年の三月十二日に、俄かに腦溢血でこの世を去つてしまつた。

これは、デイスレーリの政治生活に取つて、たしかに一大打撃であつたが、併しこの禍は一轉して勿怪の福となつたのである。といふのは、ルイスは、數代に亘つての資産家で、年收だけでも五千磅(五萬圓)も持つてゐるが、子供が無いので、その財産は、彼の死後夫人の所有に移り、夫人は、一年間亡夫の忌服を濟ましてから、一八三九年八月廿八日に、この財産を持つて、デイスレーリと結婚することになつたからである。

デイスレーリは、この時分に、借金は依然として嵩むばかり、収入としては、たゞその著述の原稿料のみ。それに當時の議員は無給なのに、交際派手にやらねばならないのであるから、その窮境も推

して知られる。

かく貧乏のどん底に落ち込んでゐる所へ、思ひがけなくも、救の神ともいふべき金持の後家さんが舞ひ込んで來たのである。

デイスレーリがルイス夫人と結婚したのは、全く金に目が眩んだのだといふ噂が鳥渡立つたことがある。それといふのも、ルイス夫人は、世に優れた美人といふほどでもなく、また結婚の時に、デイスレーリは三十五歳、ルイス夫人は五十歳に近い老婆であつたからだ。

ナポレオンが始めて結婚したジョセフィーヌは美貌でこそあれ、六歳上の未亡人であつたので、政略結婚などと言はれた。デイスレーリは、十五も歳の上な金持の未亡人を迎へたのであるから、世間で兎角の評判を立てたのも怪しむに足らぬ。

それに、デイスレーリは、元來理性の人で、

「わしは、戀愛に信用を置くことができない。わしの朋友で、戀愛や纏緻好みで結婚した人々の總てが、細君を毆つたり、別々に棲んだりしてゐる。わしは、一生の中で、多くの痴態を演ずるかも知れないが、併し戀愛で結婚する事だけは斷じてやらない。それが、不幸を避ける唯一の方法であると信じてゐる。」

といつたことがある。それも亦、デイスレーリが戀愛でなくて、金を目當に結婚したものであると、世人に早合點される動機の一であつた。

併し戀愛でなければ、必ず利害の打算であるものと斷定するのは當らない。ジョージ・エリオット夫人は、

「結婚は純粹な同情から成立たねばならぬものである。|| Marriage must consist of pure sympathy.」

といつてゐる。同情は、性格の一致と趣味の投合とから、自然に湧き起るものである。いはゆる戀愛なるものは、一時の浮氣、膚淺の衝情で、結婚後になると春の雪のやうに忽ち消えてなくなるものであるともいへる。

デイスレーリとルイス夫人との結婚が、戀愛結婚でなく、勿論政略結婚でもなく、純粹な同情から成立つたものであることは、二人の間に、三十三年の長きに亘つて、續いて渝らなかつた濃艶な情交が雄辯に物語つてゐる。

神聖な戀愛

「完全に而も深厚な同情を持つ女と、一生を借にするほど、男として幸なことはあるまい。夫の歡を頌ち、夫の悲を和らけ、夫の總ての仕事を助け、夫の總ての嗜好を充たし、夫の心配事のある時には忠告を與へ、夫の艱難に際しては援助を捧げ、自分の愛嬌と智慧と親切とで夫の生活を愉快にし順調にし圓滿にするほどの妻を得ることができれば、如何なる勢力も、如何なる榮譽も、この無上の幸福に代へがたいものである。」

かういふのが、デイスレーリの家庭を作る理想であつたが、彼は結婚後に於て、果して、その豫期した總ての甘味を満喫することができたのである。

彼の新妻は、彼の助手であり、彼の忠友であり、彼の顧問であつた。彼は、彼女と二人で一室にゐる間、彼の最も幸福な時であつたと自白してゐる。成功の時でも失敗の時でも、彼は必ず議會から家に急いで歸つて、愉快も苦痛も、彼女と共に頌ち合ふのを樂としてゐた。

彼は、結婚から六年後に、「シビル || Sybil」といふ政治小説を書いたが、その第一頁に、

「予は此書を彼女に捧ぐ。崇高な精神と優美な氣品とを以て、常に煩悶者に同情を寄せた彼女——やさしい言葉を以て予を勵まし且つ趣向と裁斷とを以て予を指導して、この著述を完成するを得しめし彼女——最も嚴格な批判家でも完全無欠な良妻たる彼女に、此書を捧ぐ。」

とあるのを見ても、彼が、如何に彼女に心服し、如何に彼女を尊敬してゐたか判る。併し彼の彼女に對する心服と尊敬とは、彼女の彼に對する心服と尊敬とに比して、果して勝れたものであつたらうか。

彼女が、彼と一緒に議會に行くべく馬車に同乗した時に、彼女の指が扉に挟まれて潰されたことがあつた。その時、彼女は、馬車が議會に行き着くまで、無言の儘で凝然と痛さをこらへてゐた。それは、若し聲でも立てると、良人の心を搔亂して、その議場での働を鈍らせることを氣遣つたからである。

何人でも、殊に敏感な女性には、尙ほ更ら耐へきれぬであらうところの苦痛を、無言の忍耐で抑へ通すといふことは、献身的犠牲心が餘程強くなければできない業である。この事が、端なくも馬丁の口から洩れて、一時世間の評判となつたが、さういふ例はいくらもあつた。

彼女は、八十三歳まで長壽を保つたが、その臨終の際に、彼が発見した彼女の手文庫の中から、遺言書が出て來た。それは、死ぬ時から十七年前に書いて置いたものである。

妾若し御身より先きにこの世を去らば、たとへ御身がイギリスからいかほど遠い處で死なるとも必ず二人を同じ場所に葬るやう申付けて下され。神よ、妾の最も親切なさうして最も愛慕する夫を祝福し給へ。御身は妾に取つて、完全無欠な夫なりき。必ず妾の側に來て下されよ。さようなら！最愛の夫よ。ゆめ獨り棲み給ふ勿れ。御身に忠實なる妾と同じやうに御身に愛着する何人かを求めらるゝこそ、妾の切に願ふ所なれ。

一八五六年六月六日

メリー・アンヌ

妾の親愛する夫へ

デイスレーリが、その後一生再婚しなかつたことは、改めて付け加へるまでもない。二人の同情は、たしかに純真無垢な同情であつた。二人の間に戀愛といへるやうなものがあつたとすれば、それは、たしかに神聖な戀愛であつたに相違ない。

王意と民意

話は、デイスレーリの結婚當時に戻る。

西洋では、昔から結婚後の一ヶ月を蜜月(Honeymoon)といつて、大抵旅行することになつた。それが、デイスレーリ夫婦は、丸二月餘り足かけ三月も、ヨーロッパで新婚旅行を續けた。

王意と民意

それからロンドンに歸ると、デイスレーリは、元のルイス夫人——今の自分の細君の所有となつた巍々たる高樓に納まつて、やがて四方から攻め来る債鬼をば、二十萬圓近くの金彈を飛ばして苦もなく撃退し、昨日の貧乏代議士は、今や富貴大盡の政治家に成上つて、保守黨首領サー・ロバート・ピールからは招待される、前首相ウエリントン公に紹介される、昔し輕蔑された先輩からは尊重される、議會では、シールが豫言した通り、何人も彼の一言一句も聴き洩らさじと耳を傾ける、このころ、デイスレーリの黄金時代とある。

「昨夜の議會で、始めて存分にわしの思が通つた。わしは、夜半のいや明方の五時に起立して演説を始めた。議員は大分疲れた容子で、始めの十分ばかりの間は、わしの存在さへ無視して、あちらこちらで雑談などをやつてゐた。これは逆も駄目だと思つたが、さうでもないと思つた。諄諄と議論を進めて見た。すると、二十五分ばかりしてから、一般の注意を惹くやうになつた。それから七時半まで、正味二時間ばかり滔々と饒舌り續けた。その間議場は靜肅そのもの、如く、森として咳拂ひ一つするものなく、針の落ちる音さへ聞えるほどになつた。一人の例外もなく、各員悉くわしの雄辯を謹聴したといふよりも、むしろわしの論旨に感動した。」

これは、彼の發議に係る領事制度改革案の説明演説をして、家へ歸つてから、細君と差向での自慢話である。

彼は、この演説で、世界商業の現状から説き起し、イギリスがその中心となつてゐる地位に鑑み、その領事制度を根本的に改革せねばならぬ所以を論斷し、その經濟的達識とその外交的卓見とで、營に議場を壓倒したのみならず、やがて國論をも風靡して、ますますその名聲を高めたのである。

この時、メルボーンの内閣は、ヴィクトリア女王から淺からぬ信任を蒙つてゐたのであるが、女王は、一八四一年の始に、ドイツ系で保守主義の傾向を持つてゐたコブルグ公の第二子アルバートと結婚してから、知らず識らず配偶者の感化を受けたものと見え、段々メルボーンの自由政策を歡ばないやうになつた。

イギリスの議會は、民意の反影であるといはれてゐるけれども、その民意なるものも、公平無私に國家全體の休戚を軫念し給ふ君主の意志に依つて、動かされる場合が少くない。

この形勢を見て取つた在野黨（保守黨）首領ピールは、一八四一年五月十五日に、内閣不信任案を議會に提出した。それは多數で通過したものの、その差が僅かに一票に過ぎなかつたので、メルボーンはその信任を更に國民に問ふ爲に、直に議會を解散した。

翌月二十九日の總選舉の結果、政府黨が少數に落ちたので、メルボーンは國民の信任を失つたもの

ベンジャミン・デイスレーリ

と見て、直に辭職し、保守黨首領ピールが彼に代つて内閣を組織することになった。

このピール内閣には、デイスレーリも加はるものと一般に想像されてゐたのにも拘らず、彼の名が終に閣員の中に見えなかつたので、彼は非常に失望したが、それが又彼に取つてむしろ好運であつたことは、後になつて判つたのである。

君主政治乎民主政治乎

イギリスは立憲政治の元祖といはれてゐるだけに、歴史を見ると、一二一五年の六月十五日に、ジョン王、大憲章 (Magna Carta) を認許し、一二六五年の一月二十八日に、シモン・デ・モントフォートがヘンリー三世に代つてウェストミンスターに始めて議會を召集してから今日に至るまで、殆ど七百年の間、立憲政治の研究を積み且つ實驗を重ねて來たのである。

今から約八十年前のデイスレーリ時代には、政黨の分野がや、確定し、自由黨 (Whig = Liberal) と保守黨 (Tory = Conservative) 兩黨の旗幟が、大分鮮明になつて來た。

この兩黨は、いづれの國にも自然に存在する所の急進と漸進の兩思想を代表するものである。自由黨は、舊慣故例を打破して總ての制度を改造せんとし、保守黨は、舊慣故例を保存して漸次に

改善を加へんとし、自由黨は、民主政治を本位とし、國民全體の衆智を集めて政治を行はんとするのであり、保守黨は、君主政治を本位とし、日常の衣食に逐はれて修養の暇なき一般群衆に依頼するよりも、むしろ長上に忠實なる士魂あり、正義を踏んで恐れざる義膽あり、強を挫き弱を援ける俠氣ある貴族をして、上は君主を輔翼し、下は萬民を扶掖せしめんとするものである。

又實際問題としては、自由黨は、自由貿易主義、愛蘭 懷柔主義、排露親土主義を執り、保守黨は、保護貿易主義、愛蘭 自治主義、排土親露主義を執つて、全然反對の態度を持してゐた。

デイスレーリは、當時の政黨を以て、いづれも政黨たる本領を没却して邪道に墮したものと認め、自由黨が、漫然破壊を事として、建設を知らざるを痛撃すると同時に、自己の屬する保守黨も亦舊慣に執着して進取の氣なきを非難し、殊に兩黨の中堅たる貴族が、徒らに父祖の遺産に衣食し、たゞ私利を圖るに急にして、貧民を救ふ情なく、弱者を援ける心なきを罵倒した。

尙ほ彼は、君主制度に依るにあらざれば、到底最良の政治を庶幾し得べからずといふ意見を懐いてゐて、

「現代の代議政治は、國民全體を代表するものでない。議會は少數國民の議會である。たゞ君主だけが國民全體の君主である。」

君主政治乎民主政治乎

といひ、

「最も進歩した文明は、純粹な君主政治を要求する。君主政治は、高度の文明と公正な法律及び慣行と廣汎な知識とを包含するものである。」

といひ、

「王權の衰へる時は、却つて民衆の特典の消滅する時であり、王冠が虚飾となる時は、却つて臣民が奴隸の悲境に落ちる時である。權威赫々たる君主と、自由にして繁榮な國民とより成り立つイギリスの全盛時代を、今一度見たいといふのが、予の畢生の祈願である。」

といつてゐた。

彼は「コニングスビー Coningsby」「シビル＝Sybil」「タンクレッド＝Tancred」などの政治小説を作つて、盛んにかういふ思想を鼓吹したものだ。

彼は、政黨の腐敗を防ぐには、國民の品性を陶冶するに如かず、而して國民の品性を陶冶するには言論機關に由るの外なしとし、

「言論機關は、君主と宗教と議會の義務を悉く負擔し、民心を統御し、教育し、指導するものである。」

と論斷してゐる。

これは、操觚者無冠の帝王など、いつてゐる今日では、少しも珍しい説ではないが、當時に在つては、拔群の卓見であつた。

正義の闘士

デイスレーリが、ピール内閣に這入れなかつたのは、彼に取つてむしろ幸ひであつたことに就いて既に一言して置いたが、假にピールが、デイスレーリに内閣の一椅子を與へて優遇したとする。デイスレーリは、ピールの部下の平大臣として切つても斷れない因縁を結ぶことになり、その宿志の通り大宰相になることができずに、身を終つたかも知れない。

デイスレーリは、平の一議員として、暫くの間ピール首相の頗使に甘んじて、神妙に忠勤を擢んでゐるが、ピールが、一度ならず二度までも、黨議に反する政策を執るに及んで、デイスレーリは、決然矛盾を逆まにして自黨の首領を攻撃し始めた。

第一の問題は、ピール内閣の提出した穀物法全廢法案であつた。穀物法(Corn Law)はどんな趣旨で出来たかといふに、イギリスは、ナポレオン戦争中、長い間封鎖状態に置かれたので、自給自足の

方針を立て、荒蕪地までも開墾して、穀作を奨励してゐたところ、ナポレオン没落後、大陸との貿易關係が復舊した結果、若し外國の穀物がイギリスに濫入することゝもならば、穀價は忽ち下落して、折角の開墾地も再び荒廢に歸する恐れありといふので、當時の保守黨政府は、穀物法を制定し、輸入穀物に重税を課して、自國の農業を保護することにしたのである。

この法律で、農業は保護されたけれども、他の一方に於いては、それが爲に、穀價は騰貴し、それに連れて賃銀もまた騰貴したので、工業家は頗る不利な影響を蒙るやうになつた。そこで、マンチエスター學派の自由貿易主義者が、一齊にこの穀物法に反對し、あの有名なコブデンとブライトは、反穀物聯盟 (Anti-Corn Law League) の牛耳を執り、自由黨は穀物法反對を黨議の一綱領として居たのである。

他の一方に於ては、地主と耕作人とが、自家の利益を擁護する穀物法の維持に熱中してゐたのは當然の事である。彼等が保守黨議員に投票したのも、畢竟同黨の標榜する保護貿易主義に依頼したからである。

今やこの保守黨政府の首相ピールが、その信賴を裏切つて穀物法全廢案を議會に提出したのであるから、デイスレーリは、ピールの措置を以て、黨議に悖り、選舉民を欺くものとして、獅子吼し出したのである。

たのである。ピールの方から見れば、自黨の腹心から不慮の反對者が起つたのであるから、デイスレーリを以て獅子身中の蟲と思つたかも知れない。

敵射方を問はず、おのれよりも低い人物は、てんから相手にせず、必ず第一流の政治家を向に廻して、之と一騎打の勝負を争ふといふのが、デイスレーリの議場に於ける秘訣であつた。さうして、彼は、何事によらず、黨派觀念に囚はれることなく、たゞ國家中心の高處から大觀して、是非曲直を推斷するのを、自己の本領としてゐた。

彼がかういふ見地から、自黨の首領にして現政府の總理大臣たるピールを攻撃し始めたのであるから、反對派の自由黨議員までが、彼を正義の闘士と見て、やんやと手を拍つて喝采するといふ有様。デイスレーリが、かく公然と叛旗を翻へしたのは、ピール内閣に取つて、眞に由々しき一大事であつた。

自由貿易と保護貿易

どこの國でも、農工商が三位一體となつて立國の基礎を成し、それが相倚り相援けて、始めて國運が順調に發展するものである。

併し國柄に依つては、その間におのづと輕重の差があり、主客の別もある。例へば、古來瑞穂の國といはれる日本は、農業を以て立國の本位とし、工業と商業とがそれに隨伴してゐる。鳥の双翼といふ辭があるが、工商兩業が差し詰めそれだ。そして農業は双翼の中心たる體に當つてゐる。これに反して、鐵と石炭とを無盡藏に持ち合せてゐるイギリスは、工業を以て立國の本位としてゐる。國內で生産する穀類丈では、到底全人口を支へることが出来ないものであるが、無理に農業を興して、その不足を補充するよりも、むしろその得意の製造品を輸出し、海外から農産物を輸入する方が、簡便であり且つ利益も多いから、勢ひ工主農従といふ傾向を來すことにならざるを得ない。

そこで、ピール時代に於ても、農業のみを保護して、工業と商業とに不利な影響を及ぼす所の穀物法を緩和し若しくは廢止するのが本筋であつたに違ひない。況やピールが一八四六年に穀物法全廢法案を提出した前年には、アイルランド人の主食物たる馬鈴薯饑饉が起つたので、是非とも食糧を海外に仰ぐ必要が起つたのである。

然らば、何故にデイスレーリが、それに極力反對したかといふに、それにも亦相當の理由がある。第一、凡そ國際貿易は宜しく相互主義に立脚すべきものであるのに、列國が保護關稅を設定して

るに拘らず、イギリス獨り輸入税を全廢するは、相互主義を没却するものである。第二、穀物法を全廢することは、保護貿易を標榜する保守黨を選出した地主及び農家の信頼を裏切るもので、斷じて背信の責を免れない。第三、保護主義の保守黨が、反對派たる自由黨の自由貿易主義を實行するに於ては、政黨たる面目が丸潰れになる。

かういふ理由を擧げて、デイスレーリが議場で自黨の首領を扱き卸した舌鋒の鋭いこと、いつたら、眞箇に相手の肉を剥り骨を刺すやうなものであつた。

「ピール首相は、反對黨（自由黨）が、海水浴をやつてゐる處に付け込んで、その脱いで置いた着物をそつと盗んで、厚顔にも、それを我物顔に議會で見せびらかしてゐるのだ。」

その着物といふは、説明するまでもなく、自由貿易主義で、穀物關稅の全廢を指したのである。

「ピール首相は、在野時代には保護主義を高唱し、一朝政府に立てば、忽ち自由主義を實行する。なんといふ反覆無耻な政治家だらう。保守黨の首領たるピール首相が、既に自黨の主義を脚下に蹂躪して平氣である以上、我々は、最早自黨の首領に對して忠誠を盡す義務から免除されてゐる。吾輩は、飽まで主義に依つて立ち、主義に依つて倒れんとするものである。」

「ピール首相よ、閣下は自分で裏切つた議會を解散するが、そして自分を信任しない國民に自

分の信任を問ふがい。吾輩は、残念ながら保守黨なるものが偽善團體に悪化したことを、同黨の一員として、天下に告白するの苦痛を忍ぶべく餘儀なくされたのだ。」

随分猛烈な攻撃であるが、それは、目前の事實に立脚する直言であり正論であるので、さすがのピールもその辯駁に苦しみ、たゞ切迫した現状に鑑み、この應急手段を取るの止むなきに至つた情實を説明するだけであつた。

併し穀物法全廢案は、自由黨の主張を踏襲したものであるから、在野黨たる自由黨議員の全部が、これに賛成し、政府黨たる保守黨議員中に、少からぬ反對者があつたけれども、依然ピールの身方となつてゐた議員が擧つて之に賛成したので、難なく議會を通過した。

愛蘭の自治と聯合

ピール内閣が次に議會に提出したものは、愛蘭強壓法案 (Irish Coercion Law) である。元來愛蘭問題は、イギリスの癌といはれたほど始末におへない難問題であつた。

丁度大戦後、愛蘭に暴動が起つた年 (一九二一年) の冬に、著者がロンドンで新聞王ノースクリフ卿と會談した折に、

「我々も朝鮮といふ厄介物を控へてゐるので、貴國の愛蘭問題には、一入同情致します。」

と挨拶したところ、ノースクリフ卿は、「朝鮮と愛蘭とは比較になりませんよ。愛蘭の獨立運動は、貴國で言つたら、丁度四國か九州

か本土から分離しようといふやうなものだ。」と答へたことを、今でも能く記憶してゐる。

愛蘭には、イギリス人も多く移住してゐるが、愛蘭人はケルト人種で舊教徒であるところから、アングロ・サクソン人種で新教徒であるイギリス人とは、どうも反が合はないで、始終喧嘩ばかりしてゐた。

アメリカ十三州が獨立戦争に成功して母國から離れた時分に、愛蘭も亦自治を要求して、獨立議會を持つことを許された。

その後、ナポレオンが、ヨーロッパの覇權を握るに及び、フランス人が、同じケルト人種で舊教徒である關係から、ナポレオンがイギリス襲撃に愛蘭人を利用することを恐れ、當時イギリスの保守黨政府は、愛蘭の獨立議會をイギリス議會に併合することにし、なほ一八二九年に至り、愛蘭人が、これまで舊教徒たる故を以て除外されてゐたところのイギリス官吏になる特典をも與へること

とにした。

これは、愛蘭を懐柔してイギリスに同化しようといふ保守黨の方針で、同黨が後に聯合黨 (Unionist) と呼ばれるやうになつた所以である。

然るに、今ピールが自黨年來の主張に反して、俄かに愛蘭強壓法案を提出したのは、何故かといふに、それには又止み難い事情があつた。

當時愛蘭總督から、

「最も嚴重なる強壓手段と專斷的逮捕處置とを執るにあらざれば、寸時たりとも、愛蘭に於けるイギリス人の生命財産を保護する能はず。」

といふ急報が頻りに來たので、ピールは、心ならずも、かういふ專制法案を提出したのである。

デイスレーリは、又もや自黨政府に對して攻撃の鋒を向け出した。

「ピール内閣は、囊に保護貿易主義を看板にして多數の投票を集めながら、翻つて自由貿易主義を實行したことさへ、背信無耻の甚だしきものであるのに、今また保守黨年來の主張たる愛蘭懷柔策を擲つて、愛蘭強壓策を執らんとす。これ一度ならず二度までも自黨の主張に背き且つ選舉民を欺くものである。公黨たる面目、果して那邊にある？」

愛蘭自治策を綱領としてゐた自由黨が、保守黨の反政府派と共に、この強壓案に反對したので、採決の結果、この法案は大多數で否決されてしまつた。

その翌日に、ピールは辭職し、自由黨首領ジョン・ラッセル卿 (Lord John Russell) が之に代つて内閣を組織することになつた。時に一八四六年七月二十六日。

失脚後のピールは、保守黨を收拾する勢力をも失つた。それが、デイスレーリに取つて、乗すべき好機となつた。

文豪から大臣

保守黨内閣の首相ピールが、急迫した事情に餘儀なくされたとはいひながら、穀物法全廢案と愛蘭強壓案を議會に提出して、自黨年來の主義に背いたといふ廉で、その辭職後に至り、保守黨總裁たる威望を失つてしまつたので、副總裁ダービー卿 (Lord Derby) がこれに代ることになつた。

ダービー卿は、元スタンレーといひ、曾てグレー内閣の愛蘭大臣となり、ピール内閣では殖民大臣をやつてゐたが、ピールが穀物法全廢案を議會に提出した時に、意見を異にして辭職した人で、後にダービー卿と改稱し、三度も保守黨内閣の首相となる運命を荷つてゐた。この人と親密の關係を續

けてゐたデイスレーリは、いつもその下に大蔵大臣となつた。下院總務が藏相となるのが、この時分の例であつたからだ。

この時分に、有望な新進議員として知られ、デイスレーリより五つの歳下で、後に四たびも自由党内閣の首相となつたグラッドストーンが、デイスレーリの下院總務振を評して、

「デイスレーリの討論は、壯快で該博で、而も陸離たる光彩あり、眞に驚異に値する偉才を發揮してゐる。予は、彼の意見に全然反對する時でも、その偉才には敬服せざるを得ない。」
と言つたほど、デイスレーリの議政壇上に於ける振舞は花々しかつた。

さて、ラッセル卿の自由党内閣は、困難な幾多の外交問題に逢着した。取り別け、フランスに於ける革命騒動は、イギリスに容易ならぬ衝動を與へた。

フランスでは、ナポレオン没落後、ルイ十八世、シャル十世、ルイ・フィリップの三代を経て、再び革命が起つて第二共和國となり、ナポレオンの甥ルイ・ナポレオンが大統領となり、一八五一年十二月二日に、クー・デターで議會を解散して獨裁權を握り、ナポレオン三世として帝位に即いた。

これは、まさしく大ナポレオンの二の舞で、イギリスに取つて由々しき脅威であつたに違ひない。

併しナポレオン三世は、大ナポレオンの如くイギリス征服の野心を懐いてはゐなかつた。それを確めた自由党内閣の外相パーマーストン卿(Lord Palmerston)は、イギリス政府がナポレオン三世のクー・デターを無條件で承認する旨を、勅裁を経ずに、フランス政府に通告した。

その前年の事であるが、オーストリアに叛旗を翻へして失敗したハンガリーの愛國者コシュート(Kossuth)がロンドンに亡命して來た時に、パーマーストン卿は、彼を義人として歡待したので、オーストリア政府から抗議を申込んで來たことがあつた。

ヴィクトリア女王は、かういふパーマーストンの措置を輕率なりとして、首相ラッセル卿を召寄せ、爾來重要な外交方針に就ては、必ず勅裁を請くべき旨を言ひ渡した。

併しこの時六十五歳で、外交事務に携はること十有六年、老練政治家を以て自任してゐたパーマーストンは、幼弱で無經驗な女王の指導を仰ぐを滑稽とでも思つたものか、相變らず獨斷專行を續けたので、ラッセル首相は、違勅の責を負はして、パーマーストンを免職した。

パーマーストンは、その實力に於ておさくくラッセル首相に譲らなかつたので、議會に於て長廣舌を振ひ、おのれを排斥した自由党内閣に猛烈な攻撃の鋒を向けたので、ラッセル内閣は居たゝまれなくなつて辭職した。

自由党内閣が例れると保守党内閣となり、その新總裁ダービー卿が首相となつたので、下院總務たるデイスレーリが、始めて内閣に入つて大藏大臣となつた。時に一八五二年二月二十七日。

パン 行列

デイスレーリが始めて大臣の椅子を占めたダービー内閣の壽命は、不幸にして意外に短かつた。ダービー首相が、極端な保護貿易主義を固守したのが、その主なる原因であつた。

デイスレーリは、必ずしも保護貿易に執着しなかつた。彼の意見は、たゞ國際貿易は、宜しく相互主義 (Reciprocity) に立脚すべきものであるから、諸外國が保護關稅を設定してゐる時代に、イギリスだけが自由貿易主義を執つて、輸入稅を全廢するは、正則でない、常道でないといふに過ぎなかつた。丁度組閣十箇月後に、定期總選舉が行はれることになつてゐたので、彼は、ダービー首相に注意し、貿易問題を以て選舉に臨むの不可なる所以を説いた。併しダービーは、地主と農家との役票を集める思惑から、徹底的に保護政策を主張するが、いゝといつて、デイスレーリの忠告を聽容れなかつた。

そこで、來るべき總選舉に於ては、自由黨と保守黨とが、前者は自由貿易主義で、後者は保護貿易主義で、相争ふことになつた。

どこの國の民衆でも、百年の長計よりも、目前の生活問題に動かされるものである。殊にイギリスのやうな工業本位の國柄では、製造品を外國に賣つて、食糧を外國から買ふ方が利益であるのに、輸入食糧に重稅を課して、内國の地主や農家を保護すれば、食糧が高くなるから、賃銀も亦高くなる。賃銀が高くなれば、製造費も高くなる。製造費が高くなれば、物價も高くなる、物價が高くなれば、製造品が外國に賣れなくなる。それでは、工業が衰へて國が亡びる。かういふのが、自由黨の議論で、一般民衆には、早分りがして、受けがよい。それに、自由黨に、トレントンといふ機敏な策士

がゐる、極く平凡であつたが、實際に非常な効力のある宣傳趣向を案出した。それは、示威運動の行列に、數百本の竿を持ち出し、二本づゝを一組とし、その一本の先きに圖抜けて大きいパンを載せて、

「これは自由黨の供給する食糧なり。」

と書いたビラを付け、他の一本の先きに、極小さいパンを載せて、

「これは保守黨の供給する食糧なり。」

と書いたビラを付け、さうして兩方に、

「但し同じ値段なり。」

と書き加へてある。

それを群衆に見せびらかしながら、

「諸君よ、諸君はどちらをお求めになりますか。」

と大聲で呼はりつゝ、歩いたものだ。

同じ値段なら大きいのを買ふのが人情だ。我も我もと自由黨候補者に投票した。

その結果、保守黨議員は二百八十人の少数に落ちた。(議員總數六百五十八人)。併しコブデン、ブラ

イト等の急進黨と、數十名の中立派とを併せれば、必ずしも絶望ではなかつた。

デイスレーリは、新議會の劈頭に於て、五時間に亘る大演説を試み、財政方針を説明し、大に議場を

感動せしめたのみならず、ヴィクトリア女王から、

「卿の適切妥當なる施政計畫を嘉す。」

といふ勅語まで賜はつたに拘らず、その提出した豫算案は、採決の結果、贊成二八六、反對三〇五で

否決されたので、僅か十九票の差に過ぎなかつたけれども、ダービー内閣は潔く辭職することにな

り、デイスレーリは、就任僅か十箇月で、再び野に下ることになった。

東洋は野蠻か文明か

保守黨内閣の没落と共に野に下つたデイスレーリは、その時から五年の間、議會に於て、いはゆる「陸

下の反對黨」Her Majesty's Opposition」として奮闘した。

その間、イギリスの國際關係は、頗る多事を極めたが、就中クリミア戦争と支那討伐とは、内閣の

死活問題を引き起すほどのものであつた。

一八五四年に、露土兩國間に戦端の開かるゝや、イギリスは、トルコを援ける爲めに、ロシアと戦

つて、少からぬ犠牲を拂つたが、取り別け、セヴァストポルの包圍戦で、軍令の錯誤から一隊の輕騎兵

を犬殺させ、かの詩聖テニソンをして、

「死地に乗り入る六百騎。

前を望めば大砲よ、

右も左も大砲よ。」

といふ悲歌を作らしめたほどの失態を演じたので、政府非難の聲は轟々として起つた。

デイスレーリが、議會でこのクリミア戦争の有害無益な理由を擧げて、政府を攻撃した時に、平和主

義のコブデンは、それに賛成の意を表し、

「若し見識遠大なデイスレーリ君を中心とするダービー内閣が、今日まで繼續してゐたならば、かゝる無名の師を興して、十萬の生靈と一億磅の國帑とを徒消せず済んだに違ひない。」

といつて、盛んにデイスレーリの外交方針を推稱した。それから三年後の一八五七年に、コブデンがイギリス軍艦の廣東砲撃を非難し、問責決議案を議會に提出した機會に、デイスレーリは、その東洋に對する宿論を披瀝した。

「我等は、東洋諸國を野蠻なり不文明なりとして、虐待するの思想を、我等の胸奥から一掃せねばならぬ。支那に對しても、他の文明國に對すると同様の外交的禮儀を以て臨むやうに、我等を習慣付けねばならぬ。支那は、二千五百年の文明を保有し、その古國たる點に於て、ヨーロッパ諸國よりも遙に優越してゐる。その太古の習慣は、今日の儀式禮典として存在してゐる。餘りに率直な行動一極端にいへば、獸的暴力を以て、それを驚かすことなく、外交談判と條約とに依つて、徐々に併し堅實に、我等の目的を遂行するのが、我等の取るべき正道である。」

この問責決議案は、ピールやグラッドストーンまでが賛成したので、賛成二六三反對二四七で通過した。

併し自由黨内閣の首相パーマーストンは、辭職する代りに、議會を解散して、その對支政策の當否を國民に問ふことにした。

どこの國でも、對外強硬策が一般に歡迎されるものと見え、總選舉の結果、政府の廣東占領を是認する自由黨議員が多數に選出された。

「總選舉の結果は、世人に意外の感を與へたやうだが、實は予の久しく懐いてゐた二大政黨對立の理想を實現したものである。「獨立」を標榜する個人及び小黨は掃蕩され排除されて、議會の空氣は概して健全となつた。わが保守黨は數に於て少しく減じたに拘らず、質に於て一層堅實となり、結合力もまた一層強くなつた。従前は黨員として二百八十名以上を算したが、結局信頼し得べきものは二百二十名に過ぎなかつた。今や忠實なる黨員二百六十名を得たのであるから、實力からいへば、以前に増して優勢となつた譯だ。」

これは彼の述懐であるが、この二百六十名こそ、眞箇に彼と共に進退を共にする黨員であつた。而して彼がこの一致結合の保守黨を率ゐる内閣を乗つ取る時運は餘り遠くはなかつた。

印度の恩人

デイスレーリが野に下つてから五年ばかりたつた時分に、偶然の出来事が、彼を再び臺閣に登すべく沸き起つた。

一八五八年の一月十五日に、ロンドンに根據を構へてゐた一團のイタリー壯士が、イギリス製の爆裂彈を携へて、パリに密行し、ナポレオン三世とその皇后とを暗殺しようとして、未だその目的を達しない中に、フランス警官の手に捕へられた。

時のフランス外相 ウアリュースキー伯(Comte Walewski)大ナポレオンとポーランド美人との間に生れた人は、イギリス政府に對し、頗る暴慢な一殆ど威嚇に等しい語氣を以て、かゝる重大事件を默過したイギリス政府の責任を糺して來た。

然るに、バーマーストン内閣は、之に對して直に辯駁を加へようともせず、却て屈辱的態度を執つたといふ理由で、二月十九日に、問責決議案が議會に提出され、それが、一三四對二一五で通過したので、バーマーストンは、今度は議會を解散せずに、潔よく自ら辭職した。

是に於て、保守黨總裁ダービー卿が、内閣を組織することとなり、下院總務たるデイスレーリは再び大藏大臣となつた。

デイスレーリは、ヨーロッパを漫遊する毎に、しばしばナポレオン二世と會見して、親交を結んでゐ

たので、陰謀事件に關する英佛係争問題は、何の苦もなく片付けることができたが、こゝに眞箇の重大問題となつたのは、印度統治と選舉法改正とであつた。

イギリスの印度統治には、頗る長い歴史が伴つてゐる。今を距ること三百餘年の昔、詳しくいへば、一六〇〇年の十二月三十一日に、あの有名な東印度會社が、エリザベス女王の勅許に依つて設立されたのであるが、この會社は、その時から六十年後に、ボムベ、マドロス、カルカッタの三要地に占據して、此處で、裁判權を行ふことを許され、軍隊を使用する權能をも與へられたので、兵力を以て逐次各地方を征服し、十九世紀の始めには、通商會社の性質は一變して、一種の政治機關となり、終に面積百萬方哩、人口二億五千萬の大國を、イギリスの統治の下に、包容するに至つたのである。

このイギリスの侵略に對して、印度人が絶えず反抗を試みたことは言ふまでもないが、丁度デイスレーリが内閣に入る前年に、土人兵が謀叛を企て、イギリス人を虐殺し、女子供までも容赦しなかつたといふ大騒動が起つた。之が爲め、イギリスの國論は、一時に沸騰し、議會に於ても、以後の懲戒に、土人に對し斷乎たる處分を加へよと絶叫するものが多かつた。

デイスレーリは、沈着な態度で、

「虐殺に酬ゆるに虐殺を以てするは、何の益なきのみか、徒らにイギリスの名を汚すに過ぎない。

元來印度統治の方針は、野蠻の境遇から土人を救ひ出し、その生命、財産は勿論、土着の宗教をも保護するために、文明の政治を施さんとするにある。随つて印度人をして、彼等とその眞實の君主たるヴァクトリア女王との君臣關係が、ますます密接ならざるべからざる所以を悟らしめねばならぬ。政府は、先づ當面の急務として、勅命に依り調査委員を特派し、土人の不満を懐く事情を研究せしむると同時に、常に彼等の古例、舊慣、殊に宗教を尊重し給ふ叡慮を普く諒解せしむる積りである。」

と説き、飽くまで懐柔策を執る旨を聲明した。

事實調査の結果、ディズレーリは、印度に於ける虐政の弊を除く爲に、斷然東印度會社を廢し、印度總督をして、印度統治の責を負はしめ、更にその監督の任に當るために、内閣に印度大臣を新設することに決して、その實行案を議會に提出した。それは、勿論大した異論もなく通過した。印度の今日あるは、實にディズレーリの賜である。

道理の争と感情の争

大抵の政治家は、民衆に自家の恩を賣らうといふ思惑から、漫に參政權擴張論などを唱へるもの

である。内心には、民衆政治を險呑がつてゐながら、表面では、普選主唱者たる名譽を誇りたがる政治家が、そこいらに、ざらにあるではないか。

人情は、世界を通じて變りがない。丁度同じやうな風潮が、ディズレーリ時代にも流行してゐた。然るに、ディズレーリの編成した選舉法改正案は、市部に偏重してゐた選舉區を割いて、偏輕の嫌ある郡部に移さうといふ趣旨であつたから、選舉權の擴張でなくて、整理であり、しかも市部から見れば、むしろ選舉權の縮少であつた。

この法案が議會に提出されて、ディズレーリが説明演説を始めると、當時既に普通選舉を主張してゐた急進黨 (Radical) 議員は、

「專制主義！」

「臆病者！」

などといふ野次を飛ばして、ディズレーリの説明演説を妨げようとしたが、彼は、一向平氣なものでその論旨を進める。

「諸君、諸君が明日にも普通選舉を實行することありとしても、吾輩は、着實、溫良、義俠の特質を併せ備へてゐるイギリス人が、忽ち掠奪、焼打、虐殺などの暴舉を敢てするの恐れありと思ふは

ど神經過敏ではない。吾輩は、イギリス人の高尚な品性に信頼するに於て、斷じて何人にも譲らない。併し我國人と雖も、他の國人と同じやうに、政治的法則に支配されるものであることを否定することができない。諸君、若し共和政治を創立せんか、諸君は、時になれば、その結果を刈り取らねばならぬ。道理の争でなくて、感情の争、それが諸君の刈り取るべき結果だ。諸君若し民主政治の下に立たんか、諸君は、必ず諸君の財産の價值が下落して、諸君の自由が縮少する事實を發見するに相違ない。」

この意見は、古今の歴史の既に明證する所ながら、一般民衆を歡ばせる説ではない。殊にディズレーリの識者政治論は、大聲、俚耳に入らぬ憾がある。

「イギリスの富は、單純な物質から成立つものではない。耕地や、田畑や、帆船の林立する港灣や盛大な工場や、無盡藏の礦山などが富の全部ではない。それよりもなほ貴い寶がある。それは、國民の品性だ。諸君は、いはゆる階級立法 (Class Legislation) なるものを破壊しようとしてゐるがそれは、取りも直さず、我國をして、偉大ならしめ、繁榮ならしめ、強盛ならしむる源泉を破壊するものだ。抑も國民の品性は、學校の教育で養成し得るものでなく、宜しく政治制度に由つて、陶冶すべきものである。」

ディズレーリは、當時の急進派が打破しようとしてゐた階級立法——即ち理解ある識者階級に依つて成立つ議會政治を守り立てようとしたのである。彼は、それでなければ、下層民衆の眞誠な幸福を増進することができぬものと信じてゐた。

併し、彼の提出した選舉法改正案は、賛成二九一、反對三三〇、三九票の差で否決された。

ダービー首相は、一先づ議會を解散し、總選舉の結果、その黨員が三十名ほど増加したに拘らず、新議會に提出された不信任案が、賛成三三三、反對三一〇で通過したので、その差は僅か十三票に過ぎなかつたが、再解散の惡例を開かぬ爲に、直に辭職してしまつた。

ディズレーリは、在職一年四箇月で又も野に下つた。

英國政黨の美點

ディズレーリの選舉法改正案が否決された爲に、保守黨内閣が辭職したので、自由黨首領パーマーソンが、一八五九年の五月十八日に再び首相となつた。この内閣は六年ほど續いたが、それは主として反對黨の下院總務ディズレーリの援助があつたからだ。

パーマーソンが、内閣を組織する時に、ディズレーリを訪問して、

「今回不肖組閣の天命を拜したが、昨今サルヂニア王ヴィクトル・エマニユエルは、イタリー統一を圖らんが爲に、ナポレオン三世と共にオーストリアと開戦し、アメリカでは、南北戦争將に勃發せんとし、又支那政府が貴内閣時代に調印した天津條約の批准交換を拒絶した事件もある。この外交多事の秋に當り、貴下の好意と忠言とに俟つにあらざれば、拙者の微力を以てして、到底大任を完うする能はざるを思ひ、頗る憂慮に堪へない。」

と語つた。すると、デイスレーリは同情の色を面に現しつゝ、

「御心痛如何にも御察し申す。若し貴下が内治に於て政費節約の方針に出で、外交に於て平和な併し厳正な政策を執らるゝ間は、拙者も、及ばずながら、一臂の力を吝まぬであらうから、國家の爲に折角御奮勵あれ。」

と答へた。さうして彼はこの約束を誠實に履行した。

敵黨同志の間柄で、かういふ諒解ができたといふのは、如何にも不思議なやうであるが、そこがイギリス政黨の美點で、反對黨と雖も、自黨と同じ政策を行ふ間は、歡んでそれを援助する。それが公黨たる面目である。若し單に政權爭奪を目標として、理非曲直を論ぜず反對せんが爲に反對するやうな妄舉に出でれば、却つて永久に國民の信任を失墜することになる。(これは勿論イギリスの話だ。)

尤もデイスレーリが、飽くまでも主義に依つて進退し、己を空しうして人を容れる雅量を持つてゐたことを立證したのは、この時に始まつた譯ではない。

曩にラッセル卿が内閣を引受けた時、バーマーストンを外相に擧げようとして躊躇したことがあつた。デイスレーリは、その時丁度バリーにゐて、フランス王ルイー・フィリップと會見したところ、フィリップ王は、

「バーマーストンは排佛政治家なりと一般に見られてゐる。若しこの人が貴國の外相となれば、英佛の關係は必ず悪化するであらう。」

と語られた。

當時、フィリップ王ばかりでなく、ヴィクトリア女王までが、バーマーストンの外交方針を危険視してゐたのである。

若しデイスレーリが普通の政治家であつたならば、反對黨の大立物が斯く内外から疑はれてゐたのを奇貨とし、如何にも仰せの通りと相槌でも打つて、その疑惑を一層深からしめたかも知れない。併し彼は、バーマーストンほどの人物がこんな誤解を受けて埋もれるのを氣の毒に思ひ、彼の爲に、極力フィリップ王に辯明すると同時に、當時別段懇意でもなかつたバーマーストンに一書を飛ばし、早く

その眞意を公表して内外の誤解を釋くべく忠告した。

バーマーストンは、その好意に感じ、すぐに、

「予は英佛兩國間の親交を助長するを以て、兩國双方の根本的外交方針とせねばならぬといふ最も強い信念を懷いてゐる者である」

といふ意味の陳述書を發表した。

その結果、バーマーストンはラッセル内閣の外相となることができ、六年間も引續いて、名外交家たる榮譽を博することができたのである。

今度バーマーストンが首相の印綬を受けた時に、デイスレーリの好意と忠言とを依頼し、デイスレーリがそれを快諾したのも、かういふ経緯があつたからである。

外交の本義

バーマーストンの自由黨内閣は、前首相ラッセル卿を外務大臣とし、又この時既に自由黨の下院總務となつてゐたグラッドストーンを大藏大臣としたので、可なり有力な内閣であつた。さうしてその六年に亘る任期中には、世界に於て、随分重大な事件が頻發した。

先づイタリアに於ては、中興の大政治家カヴール (Cavour) が、サルヂニア王ヴィクトル・エマニエルを輔けて、イタリアの統一を圖る爲に、オーストリアに對し獨立戰爭を起し、かの快傑ガリバルデー (Garibaldi) も亦之と呼應して義勇兵を編成して、各地に轉戦するあり。(今日の統一したイタリア國はこの時から約十年後に生れ出たのである。) アメリカに於ては、リンカンが、大統領となるに及び、南北相分れて、四年間の激戦を交ゆるあり。ドイツに於ては、一世の豪傑ビスマルク (Bismarck) が宰相となり、デンマークの領土シュレスウィクとホルスタインとを合併するあり。又フランスのナポレオン三世は、みづからイタリアを援けて、オーストリア軍を驅逐した報酬として、サヴォイとニースとをイタリアより割取するあり。これ等の出來事は、直接若しくは間接に、イギリスの利害に影響を及ぼすものであつた。

國論はおのづと對外硬派と對外軟派とにわかれて、甲論乙駁、紛々として底止する所なく、殊に議會に於ては、首相バーマーストンは、ドイツ若しデンマークを侵略するに至らば、イギリスは袖手傍觀するを得ずと聲言し、外相ラッセルは、ナポレオン三世のイタリアに對する横暴を非難し、また藏相グラッドストーンは、強大なアメリカ合衆國が南北に分離する方がイギリスの利益であるといふ見地から、北部の統一論よりもむしろ南部の分離論に同情し、曾て十三州の植民地が母國から分離した

のが正當なりとせば、今南部が北部政府から分離するも亦正當であると論辯し、イギリスと此等諸國との關係は一時頗る險惡となつた。

當時在野黨の首領で而も在朝黨の忠言者たるデイスレーリは、議會に於て、その平生懷抱してゐる外交意見を發表すべく起立した。

「イギリスたるもの、事情の如何に拘らず、絶対に外國の事務に干渉すべからずと主張する者は、在朝黨と在野黨とを問はず、一人もある筈がない。若しイギリスの利益か名譽か、侵害される場合若しくはヨーロッパの獨立が脅威される場合に於て、吾等は、他國の事務に公然として干渉し得るのである。併し干渉すべき場合の有無を判断するは、決して容易の業ではない。吾等は、明白な必要に迫らるゝにあらざれば、斷じて他國の事務に干渉してはならない。他國の人民は、外國の干渉を受けずして、自らその事務を處理すべき完全な權能を持つてゐるものである、といふ一般原則には、何人と雖ども、異議なきのみか、むしろ衷心から同意してをらるゝことを、予は信じて疑はない者である。」

この公平な意見に、政府も國民も否でも應でも服従せねばならなかつた。かくて、パーマーストン内閣は、平和主義—不干渉策を執ることにしたので、アラバニ事件で、危

機に瀕したアメリカとの關係も緩和されて、外交問題では蹉跌せず済んだ。けれども、グラッドストーンが議會に提出した選舉法改正案が、三一五對三〇四で否決された爲に、自由黨内閣は辭職するの止むなきに至り、ダービー卿とデイスレーリは、それに代つて、三たび保守黨内閣を組織することになつた。時に一八六六年七月六日。

女王の權威

デイスレーリが入閣後眞先に解決せねばならなかつた難題は、前内閣のグラッドストーンが失敗した選舉法の改正であつた。

デイスレーリは、この前の保守黨内閣で、自分の提出した選舉法改正案で失脚した苦い經驗を嘗めてゐるし、また同じ問題で、今度自由黨内閣が没落したのであるから、彼としては、暫くこの鬼門に觸れたくなかつたのである。

ところが、當時のイギリス民衆は、曩にフランス革命の原動力となつたルッソー式平等論にかぶれて來たものと見え、各地に於て、盛んに選舉權擴張運動を起し、終には、大衆ロンドンに集まり、王室公園たるハイド・パークの鐵柵を破つて、その中で、選舉法改正大會を開かんとし、その鎮定に

兵を動かすほどの大騒ぎを遣り出すやうになつた。

ヴィクトリア女王は、この形勢を見て、大に宸襟を惱まし、特にデイスレーリを召し、速かに選舉法を改正するにあらざれば、容易ならぬ事態を生ずるに至るべき旨を戒告せられ、それと同時に反對黨首領グラッドストーンに勅使を送り、協調的態度を以て現内閣の提案を考量するやう諭された。

之より先、自由黨の首領バーマーストン病死し、グラッドストーンが、之に代つたのであるが、グラッドストーンは、熱心な基督教信者で而も厳格な氣質であつたから、猶太人たるデイスレーリを首脳とする反對黨内閣に好意を表するほど、恬淡な襟度を持合せてゐなかつた。随つてグラッドストーンに對する女王の諭告は、大した効果を齎らさなかつた。

さて、當面の問題は、如何なる程度まで、選舉權を擴張すべきかといふにある。デイスレーリがこの前に提出した改正案は、擴張といふよりも、むしろ整理であり、また最近グラッドストーンが提出した改正案は、微温的な擴張であつて、共に失敗したのであるから、今度提出する改正案は、よほど徹底したものでなければ、殊にキヤスティング・ヴォートを握つてゐるブライートを主脳とする急進派をも満足させるものでなければ、議會を通過する見込がなかつた。

そこで、デイスレーリは、市部に於ては、獨立の戸主及び賃貸價格一〇磅以上の店舗又は居室を占める寄宿者に、郡部に於ては、賃貸價格五磅以上の土地の所有者及び同じく十二磅以上の借地人に選舉權を與へることとし、その結果、現在の有權者數一、三五三、〇〇〇を二、二四三、〇〇〇に、殆ど倍加する根本的改正案を提げて議會に臨んだ。

この急進案には、保守黨にさへ少からぬ反對者あり、現に内閣員三名までが、デイスレーリの慰諭に肯ぜずして、辭職したほどであつたが、デイスレーリは、斷乎として動かさず、議會に於て、民心安定の適法として、この外に、良策のない事理を懇々説明した。その結果、この改正案は、三二〇對二八九即ち二十一票の多數で、首尾よく議會を通過した。

デイスレーリは、この成功に依り、女王から嘉賞の辭を賜はり、エディンバラ大學から名譽博士號を受け、一團の勞働者から頌徳表を贈られた。

それから、一年有半に亘つて、大した事件も起らなかつたが、ダービー首相は、老衰と病弱との故を以て、永く公職に留まることゝむづかしくなつた。

一八六八年の一月十五日に、デイスレーリは突然ヴィクトリア女王からオスボーン宮に召された。何事ならんと、早速伺つて見ると、先づ彼を迎へた人が侍從武官グレー大將であつた。この人は、三十五年前にデイスレーリが最初にハイ・ワイコムで選舉を争つて敗北した時の敵手(當時の大佐)であつた。

デイスレーリは、その奇遇に鳥渡驚かされたが、更に意外の感に打たれたのは、この人の口上であつた。

「女王陛下は、ダービー卿が辭職される場合に於て、閣下を總理大臣に任じ給ふ思召であります。」
女王は、更に時餘に亘つてデイスレーリを引見し、儀式抜きで腹藏のない懇話を交へ給うた。
首相の奏請を俟たずに、君主自ら後繼者に内命を下し給ふことは、他國は勿論、イギリスに於ても空前の異例であるが、それには、特別の事情が伴つてゐた。

立志三十年

曩にダービー卿が第一次の内閣組織を命ぜられ、デイスレーリを内閣の要職たる大藏大臣に推薦した時に、ヴィクトリア女王は、

「デイスレーリは自黨の總裁ビールに反抗し、別に一派を作つたものであるから、藏相として下院總務の任に當つて、よく保守黨の統一を圖ることができらるであらうか。」
との御下問があつた。

蓋しこの時分に、デイスレーリの議會における振舞が、如何にも奔放で不謹慎なやうに見えたから

であらう。

併し、女王は、間もなくデイスレーリが非凡な技倆を持つてゐるのみならず、熱烈な君主主義者である事實を發見せられてからは、打つて變つて、深厚な信任を垂れ給ふやうになつた。

一八六一年の十二月十四日に、女王の配偶アルバート王が薨去になつた時に、デイスレーリが、議會に於て在野黨總裁として、哀悼の辭を述べ、アルバート王の人格と功業とを激賞するや、女王は特に親翰と眞影とを賜はつて謝意を表し給うた。又一八六三年に於ける皇太子結婚大禮に際しても、當時在野黨の領袖といふだけで、何の官職も持つてゐなかつたのに、勅命に依つて、デイスレーリ夫妻に特定の座席を與へられ、又ウィンズル宮の晚餐に召され、國事の御下問があつたほどで、公務以外に、特別の寵眷を垂れ給うたことがある。

かういふ間柄であつたので、女王は、今度三たび首相となつたダービー卿が老病職に耐へないといふ事情を聞召され、取敢へず、デイスレーリを招いて、非公式の御懇談があつたのである。この時から丁度一ヶ月後に、ダービー卿がいよく辭表を捧呈したので、今度は正式にデイスレーリを召されて、總理大臣の印綬を授け給うた。時に一八六八年二月二十八日、彼の歳六十四。

デイスレーリが、メルボーン卿に向つて、

「私は大宰相になる積りです。」

と語つた時から、三十三年を閲して、漸くその望を遂げることができたのである。

彼は、二十歳の時に、寒措大から一躍して大文豪となつたのであるから、文學家としては、無類の早熟であつたが、政治家としては、大器晩成の方である。

尤もこの時分には、老成の人でなくては首相になれなかつたやうだ。自由黨首領パーマーストンが始めて首相になつた時が七十一歳。グラッドストーンが、ディズレーリに代つて始めて首相となつた時が五十九歳。

ウィリアム・ピットが二十四歳で大宰相になつた例があるが、それはその時分から八十年も昔の事で、殊にその父は名高い大宰相であつたから、七光といふ親の光を頭に戴いてゐたのである。

ディズレーリは、奮に門地や富力の背景を持つてゐなかつたのみか、猶太人といふ世間の厭がる刻印を打たれ、而も始終債鬼の追窮する所となり、その上、直情徑行で、親友の感觸を害するものも、他人の機嫌を損ずるものも、一切關はず、言はんと欲する所を言ひ、行はんと欲する所を行ひ、たゞ勇氣と決心と手腕と——約めて言へば純粹な實力と、それに加へて、清廉潔白な品性と、公明正大な襟度とを以て、遂に大英國の主宰者となつたのであるから、圖抜けて偉らい男であつたに相違ない。

彼が大宰相として、始めて議會に赴く時に、沿道の群衆は、帽子を振り歡聲を上げて、祝意を示しその議場に臨むや、議員一同手を拍つて歡迎し、傍聽席に詰め掛けてゐた人々までが、一齊に起立して敬意を表した。

ディズレーリは、この時から二年以前に、老衰多病、事志に違ふとて、失望の餘り、政界から退隱したいとダービー卿に語つたことがあつた。されば、彼が豫望を達したのは、實に偶然であつた。

潔白と貧乏

吾人は、ディズレーリが、文豪となり、議員となり、政黨の領袖となり、下院總務となり、三度大藏大臣となり、次いでその宿志を遂げて、大英國の主宰者たる地位を贏ち得たまでの公的經歷を、大急ぎに辿つて來たが、こゝらで、暫くその私的生活の方面を窺ふことにする。

昔、宋の岳飛は、文臣不愛錢、武臣不惜死、則天下平矣といつた。日本でも、大政治家は概して金錢に淡泊であつた。西郷、大久保、木戸、伊藤、山縣悉く然りだ。金を拵へるのは商賣人の仕事で、政治家の本領ではない。併し政治家と雖も、生涯貧乏で、借金に苦しむものと極まつてゐる譯で

はない。その貧乏は、大抵大臣になるまでに限られ、大臣となれば、金が溜らぬとしても、もう債鬼に逐ひ廻はされるやうな境遇から解脱することが出来るものだ。これは、東西古今を通じての常例である。

平大臣から大宰相となり、一世の輿望を一身に集めながら、尙ほ且つ貧乏暮しで借金に苦しみ、依然として著作に腐心して、漸く利息の支拂を濟ませるといふやうな實例は、わがデイスレーリを以て、たしかに空前絶後とする。

彼が、金持の未亡人と結婚した時に、三萬磅（三十萬圓）ほどの借金があつた。新夫人は、四五千磅の年收を持つてゐるが、その原財産は、多くも五六萬に過ぎまいから、借金を皆濟すれば、幾等も残る譯がない。

結婚後九年間は、デイスレーリの新著コニングスビー、シビル、タンクレッドなどの印税が可なり這入つてゐた。一八四八年に、父のイサークが亡くなつて、その遺産が同胞四人に分配された時に、彼は一萬一千磅ほど受取つた。それから二度目の大藏大臣を罷めるときに、ヴィクトリア女王の特旨で、二千磅の年金を賜はつた。それは、彼が五十四の時であつたが、それが彼の始めて受けることのできた確定歳入であつた。

他の一方に於ては、ビューゲンデンの邸宅を買ふために、四萬磅といふ大金を借りた。それに機關新聞を經營するとか、政治運動を舉行するとかいふ場合には、いつもデイスレーリが相談役の筆頭になる。彼は自分の持つてゐる金で足りなければ、必ず外から借りて間に合せたのである。

普通の政治家であれば、かういふ場合には、官職を與へるとか、爵位を授けるとかいふ内意を仄めかして、寄附をさせたり、利益交換の豫約で御用商人に献金を申付けたり、甚だしきは、相場師など、結託し、政界の祕密を利用して、莫大の金を儲けるやうな手段を取つたりして、自分は、借金をするどころか、却て不義の富貴を貪るものだ。由來商店國民 (Nation of Shopkeepers) と呼ばれる程のイギリス人であるから、政治家にも、なか／＼商賣氣のあるものが多かつた。

獨りデイスレーリだけは、公々然と借金をしたけれども、人に言はれないやうな後暗い金錢の遣り取りは斷じてやらなかつた。彼の天性は、八面玲瓏とも評すべきもので、政治上の言行に於て、總べて公明正大であつたやうに、その私的生活に於ても、飽まで清廉潔白で終始を一貫し、その間一點の暗影をも止めなかつた。されば、彼に對して如何に醜陋な嘲罵を加へやうとする者でも、多くの政治家の通有弱點たる色と慾との問題に就ては、デイスレーリの満身に一矢を向ける寸隙をさへ、發見することができなかつた。

併じ彼は不思議な女性と不思議な交際を結んで、一時世間から、色と慾との絡はる何事かに關係したではないかと疑はれたことがある。

女から呼出状

名高い政治家や文學者には、絶えず未知の批評家や崇拜者から色々な手紙が来るものである。デイズレーリが、新進文豪で而も新進政治家として知られた時分には、その手許に、日夜幾通となく、かういふ手紙が舞ひ込んだ。

デイズレーリが、始めて大蔵大臣となる前年の一八五一年の一月から、同じ女名前の手紙が、二度ならず二度も三度も續いて来たことがある。その中には彼の著書を読んで感心したとか、彼の議會に於ける演説を聞いて敬服したとか書いてある。さういふ手紙は、さらに来るので、彼はみんなストーブに投げ込んで、別段氣にも留めなかつた。

すると、今度は、折り入つて頼みたいことがあるので、是非ハイド・パークの噴水池の邊で、お逢ひしたいから、御出での時日を知らして下さいと書いた手紙が来た。女の方から、男に公園で逢ひたいと挑むといふことは、鳥渡デイズレーリ自身も書いた小説にもな

い圖である。このまだ見知らぬ女は、一體、何者であらう？ 善か悪か、少女か年増か、美人か醜婦か、いづれにしても、彼に取つて、用のありさうな女ぢやない。

彼は、血氣の青年時代から、女には關係しなかつた。況やこの時、四十七の分別盛りで、殊に理想の細君と楽しい家庭を作つてゐた時分である。又況や彼は今や天下に普く知られた公人として、處もあらうに、公園の噴水池の畔で、知らぬ女性と會合することのできるものではない。それに、女を使つて敵をおびき出して、暗殺するといふのもよくある手だ。危険々々、君子危きに近よらず。デイズレーリは、その手紙を、例によつてストーブにくべてしまつた。

その後、同じ女から同じ要求が三たびも繰返された。住所氏名も明かに書いてある。――

Mrs. Bridges Williams,

Mount Braddon, Torquay.

三度となると、誰でも鳥渡考へさせられるものだ。何か深い仔細があるのかも知れない。デイズレーリは、先づ以て、彼の顧問たり助言者たる細君の意見を聞いて見ると、

「その婦人は、屹度親類にも辯護士にも相談することのできないやうな衰れた境遇の人でせうから、とにかく一度逢つておやんなさい。何かの功德になるかも知れません。」

といふ、いかにも女らしいやさしい答であつた。

そこで、デイスレーリは、いよく彼女の望に應じて、ハイド・パークで逢ふことに決し、その時
日を先方に通知してやつた。

當日の定刻に往つて見ると、小作で、古風な身装をした六十ばかりの老婆が、噴水池の片邊のベン
チに腰をおろして、何か思はしげに、登つて落ちる噴水を、凝然と眺めてゐる。

不圖デイスレーリの近寄るのに氣が付いた彼女は、すぐに立ちあがつて、先づ彼の好意に對して、
一通の挨拶を述べた上、さて自分には一人の子供もなく、近い親類さへ死絶えて、淋しい孤獨の生活
を送つてゐるといふ身の上話をし出した。

デイスレーリは、早くもこの婦人が金の無心に来たものと合點したが、さりとして、人もあらうに、
借金で名高い政治家の自分をわざ／＼撰り抜いた所を見れば、その精神に幾等か異狀があるに相違な
いと思つた。

やがて、彼女は、彼の心意氣をその顔色で讀んだものか、俄にその話を打ち切つて、一封の手紙を
デイスレーリに渡し、

「委しい事は、この中に書いてありますから、お暇な時に御覽下さいまし。」

といひつゝ、別段デイスレーリの返事を聽かうともせず、そのまゝ立ち去つてしまつた。

三十萬圓の贈物

デイスレーリは、ハイド・パークで怪しげな老婆から渡された手紙を、ポケットに入れたまゝ、暫
くそれを忘れてゐた。四五日してから、不圖手に觸つたので、始めて封を切つて見ると、一通の書附
に、一千磅の小切手が添へてある。

「この金は、些少ながら、選挙費の一部にでも御用立て下さい。私は唯今遺言書を作りたいと思つ
てをります。就ては、あなたにその執行者の一人になつて頂きたいのであります。その執行者は、
同時に私の遺産受領者ともなることを御承諾置き願ひます。私の遺産は大したものではありませ
んが、少くも三萬磅はありませう。」

とある。

金の無心でも言ひ出しはせぬかと疑つた人から、大枚の遺産を呉れてやらう、と申込まれたのであ
るから、さすがのデイスレーリも、己の短見淺慮を恥ぢざるを得なかつた。

幸ひ、この婦人の住居地から選出された議員の中に、フィリップ・ローズといふ知人がゐるので、